

江戸期の日中韓交流

～朝鮮通信使の外交・文化的意味と現代的意義～

インターゼミ 2014・アジアダイナミズム班

学部生 3年	三代 ひろな
	三好 瑛大
	杉山 友哉
2年	水口 輝
	山口 夏実
4年 (留学生)	王 星星
大学院生	越田 辰宏
	中村 晶子
	和泉 昌宏
	塚原 啓弘
卒業生	宮崎 真

目次

序章.....	104
1. 研究の背景.....	104
2. 今年度の研究テーマ.....	105
3. 研究目的と意義.....	107
4. 研究方法.....	109
5. 本論文の構成.....	109
第1章 徳川幕府の外交戦略と朝鮮通信使.....	110
1. 日朝関係.....	110
1.1 江戸時代の外交戦略～通信使の展開.....	110
1.2 江戸時代の外交戦略～通信使外交の歴史的位置.....	117
1.3 日光東照宮と八王子千人同心～多摩学より.....	120
1.4 民間交流としての通信使外交.....	124
2. 日中関係と中朝関係.....	129
2.1 日中関係.....	129
2.2 中朝関係.....	135
第2章 朝鮮通信使の軌跡と文化交流ーフィールドワークを通じた現代の視点から...	139
1. 対馬、広島.....	140
1.1 対馬.....	140
1.2 松濤園.....	144
1.3 鞆の浦.....	145
2. 京都、滋賀.....	147
2.1 京都.....	147
2.2 近江八幡.....	147
2.3 高月.....	148
3. 静岡.....	149
3.1 静岡（シンポジウム）.....	149
3.2 清見寺（静岡市清水区）.....	149
4. 日光.....	152
4.1 日光東照宮.....	152
4.2 大猷院.....	156
4.3 朝鮮通信使・今市客館跡碑（杉並木公園）.....	156
5. まとめ.....	158

第3章 朝鮮通信使の近代的意味と現代的意義	161
1. 江戸期朝鮮通信使の活躍	161
1.1 徳川前史の日朝	161
1.2 徳川日本の外交戦略	162
1.3 李氏朝鮮の外交戦略	162
1.4 日朝の窓「対馬藩」の知恵	163
1.5 対等使節「朝鮮通信使」と朝貢使節「朝鮮燕行使」の意味と意義	165
2. 朝鮮通信使が「近代」に与えた影響	167
2.1 日本近代史の意味	167
2.2 近代化と日中朝関係	167
2.3 歴史の内在的理解	168
終章	170
1. 今、生きている時代とは	171
1.1 雨森芳洲の先進思想（誠信の交わり）	171
1.2 新井白石の先進思想（西洋の視座）	172
1.3 朝鮮通信使のユネスコ世界記憶遺産と現代的意義	172
1.4 未来構築の方向性	174
2. 編集後記	177
3. 謝辞	180
参考文献	181
活動記録資料	184

執筆担当者

序章	宮崎 真
第1章	三代 ひろな、三好 瑛大、杉山 友哉、 水口 輝、王 星星、越田 辰宏、 中村 晶子、和泉 昌宏、塚原 啓弘、 宮崎 真
第2章	三好 瑛太、山口 夏実、和泉 昌宏、 宮崎 真
第3章	越田 辰宏
終章	越田 辰宏
執筆協力者	馬 忠傑

序章

1. 研究の背景

2001年8月の小泉純一郎首相の靖国神社参拝や、2002年の日韓共催のFIFAワールドカップを契機に、歴史認識や領土問題で日本、韓国、そして中国の關係に、しばしば暗雲が垂れ込めてきた。日本の首相による靖国神社参拝はもちろんだが、2012年の東京都による尖閣諸島購入計画、それに伴う国有化（2012年9月11日）は中国政府を刺激した。2013年秋ごろからは落ち着いているようだが、国有化以降、中国公船が尖閣諸島に接近する事案が一時急増するようなこともあった（産経新聞 2014年9月9日）。

2014年は、9月中旬ごろから小笠原諸島近海で中国漁船によるサンゴ密漁問題が発生し、日本政府の対応あって同年11月下旬には静まったが、多くの日本人を動揺させるような事案であった。また、韓国政府とは首相による靖国神社参拝をはじめ慰安婦問題などの対応で対立しており、2012年5月の日中韓首脳会談以来、日韓首脳会談が行われていない。北朝鮮とも、依然として拉致問題を抱えている。こうした様々な問題を抱えているせいも、各国において互惠關係はもちろん、相手国の感情や利害、見解に配慮しない人々が少なからずいる。そして、過去を振り返ると、何度か關係が断絶するようなことがあった。日中戦争しかり、韓国併合しかりである。遠く遡れば、百濟を助けようとした結果（白村江の戦い）、新羅との關係が断絶するようなこともあったが、今回のアジアダイナミズム班の研究でいえば、秀吉の朝鮮出兵による明や李王朝との断絶である。

他方、日本は中国、韓国、北朝鮮との間で、互いにこうした問題について非妥協的なわけでもなく、互いに配慮し合う面も、有事には協力する面も、あるいは友好を深めようとする動きがあるということも事実であろう。最近では、尖閣諸島について、2014年11月7日に日本と中国両国政府による「日中關係の改善に向けた話し合い」の中で、「双方は、尖閣諸島等東シナ海の海域において近年緊張状態が生じていることについて異なる見解を有していると認識し、対話と協議を通じて、情勢の悪化を防ぐとともに、危機管理メカニズムを構築し、不測の事態の発生を回避することで意見の一致をみた」（外務省「日中關係の改善に向けた話し合い」と、双方が相手国の見解に配慮する動きが見られた。

東日本大震災でも、世界中から様々な支援を受けたが、中国や、韓国、北朝鮮からも政府・民間レベルで日本に対する様々な援助があったことは忘れてはならないであろう。もちろん、日本も四川大地震をはじめ、他国の災害時には積極的に支援し、またそうした態度を示してきた。こうした動きは、各国が、互惠關係を望み、あるいは相手国の感情や利害、見解に配慮する証左ではないか。

しかし、今日の日本にとって、何より気をつけなければならないのは、中国や朝鮮半島とは2000年を超える密接な付き合いがあるにもかかわらず、我々の多くは中国や朝鮮半島

との関係を今日的な出来事から考えがちだということである。昨今の動きに関心を向けることはもちろん重要だが、諸個人は往々にして国を越えた先人たちの苦闘、あるいは足跡を忘れがちである。新羅との関係が断絶したあとを例にだすと、しばらくして日本の先人たちは関係改善のために遣新羅使を送っている。しかし、今と違い、かつてはそこにたどり着くにも命がけの外交だった。「使人らは途中、逆風に会い、生死の境をさまよい難洪の末新羅に着いた。」とある（久恒 1997;12 頁）。

今日では、技術の進歩によって隣国へ行くのに、命をかけるという感覚はないであろう。懸念すべきは偏見の拡大である。マス・メディアや、インターネットは人間にとって非常に便利なものだが、表現の自由を盾に、それらの媒体によって偏見が一種の集団思考として拡散されている。オーストラリアの科学者レン・フィッシャーは、近年の心理学的な研究で、人間は自らと同じ社会集団に属するメンバーが悪い行いをした場合、この過ちは都合よく外的な原因のせいにし、他方その行いが別の社会集団のメンバーによるものだったら、過ちはその集団の典型的なものとして考える傾向があることを紹介している（フィッシャー 2012;143 頁）。フィッシャーはこうした集団思考に陥らないために、一時的に集団から離れ、しばらく自分の頭で考え、自分なりに結論を出し、それに納得してから集団に戻ることを主張している（同;237 頁）。

アジアダイナミズム班はある意味で一つの集団ではあるが、何らかのより大きな集団から離れ、これまで多摩大学の留学生獲得戦略や、明治維新以降の日本から見たアジア、現代のアジア市場、日中韓の領土問題、飛鳥寺の研究を通して、徐々に日本とアジアとの関係について広く深く向き合うことができた。ときにアジアダイナミズム班という集団から離れ、自分の頭で考え、班の中で互いに意見を交わし、共同論文を作成してきた。各メンバーの個人的な結論には違いはあるかもしれないが、この共同研究がこれまでの歴史を抜きに、過去・現在・未来の日本と日本の近隣諸国との関係を語るができないとの認識を深めつつあるということは確かであろう。

2. 今年度の研究テーマ

今年度の研究テーマは、江戸期における朝鮮通信使の近代史への意味と今日的意義の確認である。本研究テーマは日本総合研究所理事長で多摩大学学長の寺島実郎が雑誌『世界』（岩波書店）で連載中の「脳力のレッスン」で書かれた「朝鮮通信使」に見る江戸期の日朝関係」という論考を基盤としている。この寺島の論考は朝鮮使節に象徴される良好な日朝関係が明治期に反転していくのはなぜかという問題に向き合ったものである。「江戸期朝鮮使節は被虜人の刷還が主目的だったが、次第に外交的意味だけでなく、文化的意義を大きくしていった。（中略）この良好な日朝関係が、皮肉にも明治維新以降の暗転をもたらす。」と指摘されている（寺島 2014a）。したがって、この論考の意義を確認するとこ

ろから始めたい。

寺島論考の現代的意義

近年、今日に至るまでの日朝関係を明治維新以降から今日までの時間軸の中で論じられるものをしばしば見受けるが、この寺島の論考は明治維新以前から今日に至るまでの時間軸の中で論じている点に大きな意義がある。たしかに明治維新から日韓併合解消までの日朝関係の歴史的経緯は、今日の日韓関係に重要な意味を持っている。明治維新になって日本は西欧列強の北東アジアにおける勢力拡大を防ぐために李王朝に対し「開国」と「清からの独立」を要求した。しかし李王朝は日本の要求には応じず、江華島事件（1875年）や、日清戦争（1895年）、ハグ密使事件（1907年）を契機に、日本は李王朝を西欧列強のやり方—近代的な軍事力と西欧式の条約締結—によって李王朝を追い詰めた。そして1909年7月6日安重根による伊藤博文の暗殺を受け、その翌年の1910年6月3日から太平洋戦争終結までの35年間、日本は韓国を併合した。

終戦から70年が経とうとするが、首相の靖国神社参拝や、韓国における一部反日運動、李明博前大統領による竹島（独島）訪問などによる日韓関係の悪化とともに、こうした一連の歴史的流れについての評価をめぐって、一部両国の間で相互不信に陥っているのは確かであろう。そして、こうした明治維新以降から今日までの日韓関係の変遷のみから見ると、日本が韓国の信頼を取り戻すのは非常に困難で不可能にさえ見える。韓国の日本への不信は絶えず、日本の姿勢が変わらない限り、今後もこうした関係が継続するように思える。しかし寺島がこの論考で江戸期の「朝鮮使節に象徴される良好な日朝関係が明治期に反転していく歴史の断層」を説明したことで、日韓関係の異なる展望や、これまで不可解だったことへの解答が見えてくる。

これまで不可解な点のひとつは、日本の政治家や知識人が西欧列強にのまれないために、李王朝に対して「近代化」と「清からの独立」を勧め、それが時代の要請だったにもかかわらず、なぜ李王朝はそれに一丸となってより早く応じられなかったのかということである。たしかに、江華島事件以降、李王朝も鎖国政策から開化政策へと転換したが、帝国主義の時代に素早く対応したとはいえない。しかも、1845年にはフランス東洋艦隊司令官セシルがフランス宣教師の虐殺を問責するために軍艦三隻を率いてきた事件や、1860年には英仏連合軍が北京占領、さらには1871年アメリカのアジア艦隊司令官ロジャースが李王朝に開国を求めて率いてきた軍艦5隻と兵1230名との攻防といったように、李王朝にも西欧の力に震撼する場面は幾度となくあった（李 2006b;321-414頁）。なぜ李王朝は従来の制度をすぐに変えることができなかったのだろうか。逆に、なぜ日本はより早く対応できたのか。こうした疑問を無視して、日本の要求に応じなかった李王朝をただ卑下するような論説がしばしば見られる。しかし今日に至るまでの日朝関係を理解することを目的とするなら、こうした問題に応えることは重要なはずである。

その意味で寺島の論考は、李王朝が「朝鮮中華主義」に埋没していく歴史的過程と李王

朝の日本認識について触れることで、そうした問題に向き合っている。寺島は、「モンゴル化」から明滅亡までの時間軸でその歴史的過程と日本認識を説明している。ここでの「モンゴル化」とは、朝鮮半島において高麗王朝が 1259 年のモンゴル帝国への降伏後のこと、とくに王室同士の縁戚を結ぶことで、寺島はこの時期がその後の 1392 年にモンゴルからの支配を解き放ち、李成桂が建てた李王朝の性格を左右したと主張している。

モンゴルによる朝鮮半島支配は 130 年も続き、その後「李王朝はモンゴルの影響を徹底して排除し、中国で再興した漢民族の明にアイデンティティを求める傾向を強めた」と寺島は述べる(寺島 2014a:88 頁)。本論考では韓日関係史専門の河宇鳳の研究が参考にされているように、李王朝が中華である明と同一視し、日本や琉球、女真を含むそれら周辺国家を他者としての『夷狄』とみなし、室町期の「日本国王使節」を文化的に低い存在として一段低く見ていた李王朝の世界観があったことを確認している。そして寺島は女真族による明滅亡後、朝鮮こそ中華唯一の継承者・守護者という思い入れが強まり、「朝鮮中華主義」への自我意識の埋没までを、近代史における朝鮮悲劇の伏線と見ている。これが明治初期の日本からの「近代化」と「清からの独立」の勧めに応じられなかった朝鮮内部の事情である。

次に寺島は本論考で江戸期の朝鮮通信使が象徴する朝鮮出兵後の日朝間の和解と良好な関係について徳川幕府の外交と中朝関係を視野に論じている。この点は本論で詳しく触れるので、ここでは割愛する。いずれにしても、こうした寺島の時代認識は明治維新以降の日朝関係の暗転に関する因果関係の説明や、近代史における朝鮮の悲劇のみならず、今日に至るまでの日朝関係を、明治維新以降ではなく、前近代の豊臣秀吉の朝鮮出兵、徳川家の治世から見るよう促すものである。「今日に至るまでの複雑に屈折する日本と朝鮮半島の間を考えると、歴史の曲折を静かに確認することが大切である。」と寺島は論考の最後に主張している。そして、この論考はこれからの日本と朝鮮半島の関係に対して狭い視野にもとづく極端な悲観的観測や方針に陥る必要がないことを指し示すかのようであった。本研究は、朝鮮通信使についての今までの研究によってあまり見えなかった意義を再度照らした寺島の論考や問題意識に向き合おうとしたものである。

3. 研究目的と意義

本研究の目的は、寺島の論考をもとに、江戸期の朝鮮通信使が、日本にどのような外交的・文化的意味があったかを確認すること——江戸期の朝鮮通信使を通じた日朝関係、あるいは日中朝関係の再検討——である。中国を含めるのは、日朝関係は中国の存在を抜きに語れないからである。そうすることで、多事多難な国際・国内情勢下で江戸期 250 年にわたる平和をもたらした江戸の外交戦略への理解を深められる。とはいえ、本研究において江戸期の朝鮮通信使の外交的・文化的意味を精査するのに、日本近世史専門の大石学が

『江戸の外交戦略』で表した江戸期朝鮮通信使（通信使外交）の歴史的な位置づけを参考とした。

大石は、本書でこれまで様々な研究者によって提示されてきた江戸期朝鮮通信使の外交的な意義として、以下5つを示している（大石 2009）。

- (1) 直前の豊臣秀吉による朝鮮侵略との対比から「善隣友好」の象徴。
 - (2) 「日本型華夷思想」、「朝鮮の中華思想の形成」。朝鮮の中華思想の形成については前述したので割愛するが、日本型華夷思想とは、簡単にいうと日本を世界（華夷秩序）の中心とする考え方である。
 - (3) 中世における幕府だけでなく、日本西部・九州地域の有力者（複数の）が外交権を有する状況から、徳川幕府による外交の統制強化、つまり一元化への移行段階を表している。
 - (4) 日本型華夷秩序論ではなく、武力による徳川主従制の論理・世界観に基づく大君外交を表す。
 - (5) 友好と緊張の二側面を有する国家間外交。
- （これらの見方については本論第1章でさらに詳しく紹介する。）

しかし、江戸期朝鮮通信使の外交的意義が、以上のような「日本型華夷思想」、「国家規模における朝鮮との対等外交の展開」、「一元化への移行段階」といったいずれか一つに絞れるものではなく（もちろんそうした見方も大変意義深い）、また上記5つの側面だけではない。

本共同研究では、もうひとつ重要な側面として、李王朝と異なる儒教文化、中華思想に対する日本の姿勢——日本における儒教文化の位置づけが何であったか——を理解する重要性にも目を向けている。江戸期に形成されはじめた日本型華夷秩序は、李王朝のようなアイデンティティ、国家としての正当性を表すものでもなく、また江戸期の日本にとって儒学は、李王朝のように儒学だけが政治において重んじられたわけでもない。さらに、儒学（特に朱子学）は、徳川幕府の安定・李王朝との関係改善のために重んじられるようになった思想であり、そのせいか江戸期には外来の思想として儒学や仏教から距離をとり、それらに影響を受けていないとされる国学などが誕生している。

このように日本で起きたような儒学の正当性を揺るがすほどの思想的転回が、李王朝が強固な主権を保持している間に見られなかった。今日にいたるまでの日朝関係を理解するために、こうした李王朝にとっての儒学の位置づけと、日本にとっての儒学の位置づけが異なることを、本研究で少しでも明らかにできればと思う。ただ、断っておくと、本研究は、学術的意義をねらいとしているのではない。朝鮮通信使に関する膨大な史料の分析が幾分足りなかったかもしれない。しかし、この研究成果が日本と韓国の相互理解や友好に貢献できるものとなれば幸いである。学校教育やマス・メディアがあまりきちんと伝えていない歴史に焦点を当てることで、少なくとも、朝鮮通信使に関する研究や試みが、日本という国を知り、また日本の外交を考えるのに非常に意義があり、また地域活性化を模索

する人々や教育に携わる人々にとって意義があることを伝えられたらと思う。そして、本研究が、政府の役割や責任、そして市民社会の対話と交流の重要性を照らすものとなれば幸いである。

4. 研究方法

本研究は、文献や、フィールドワークによる現地調査、そしてウェブサイトから朝鮮通信使に関する知識や情報を収集した。文献調査で、とくに参考にしたのは前述した寺島の論考および、大石学『江戸の外交戦略』、朝鮮通信使を専門とする辛基秀・仲尾宏の朝鮮通信使に関する書籍である。なお、フィールドワークは日本で最も朝鮮半島に近い対馬から、広島の下蒲刈、福山の福禅寺、近江八幡、高月、静岡の清見寺、日光東照宮で行った。

今回のフィールドワークは、現地の方々の協力を得ながら、江戸期朝鮮通信使の様子や事実を確認する作業となった。場所によってフィールドワークでの実りには差があり、とくに対馬、広島、静岡の清見寺、日光東照宮でのフィールドワークに重点を置いた。

限られた時間の中で確認できたことの一つは、これらの地域には朝鮮通信使を知ることができる史料が豊富に存在するという点である。それは自然なことかもしれないが、そうした史料を守り、歴史を後世に残す人々だけでなく制度が存在するからである。しかし何よりも江戸期の朝鮮使節団は重要な役目を担いながら、釜山から江戸、あるいは日光東照宮までの長く過酷な道程を旅したことである。本研究は、彼らの長い旅路を広く見ながら、彼らの体験に想いを馳せることにより、江戸期の日朝関係の理解を深めるのみならず、今日までの日朝関係を考えるものとなった。とくに、日本の学生には釜山から日光までの朝鮮通信使フィールドワークを、地方自治体にはこうした財産を育んでいくことを望む。

5. 本論文の構成

本研究は、第1章に徳川幕府の外交戦略と朝鮮通信使について扱い、第2章では朝鮮通信使の軌跡についてフィールドワークを通じた現代の視点から論じている。第3章では朝鮮通信使が近現代史へもたらした意味を扱っている。また各所に本研究への理解を手助けするために、朝鮮通信使に関する様々な図解や写真を掲載している。

第1章 徳川幕府の外交戦略と朝鮮通信使

1. 日朝関係

1.1 江戸時代の外交戦略～通信使の展開

朝鮮通信使とは

豊臣秀吉による二度にわたる朝鮮出兵以後、李王朝は日本に対する警戒心を払いきれなかったが、江戸期の日本と朝鮮半島の間に戦争が起こることはなかった。この平和な時代は、秀吉の死後、政権を握った徳川が、李王朝との関係改善に着手し、友好関係を堅持したことにある。その象徴とも言えるものが、「朝鮮使節」であった。

朝鮮使節は、室町時代に日本にやってきた朝鮮国王使に端を発する。室町時代に来日した朝鮮国王使は「報聘使」「回礼使」「回礼官」「敬差官」「通信官」、そして「通信使」といった様々な呼称がある。室町時代には朝鮮使節が日本に61回派遣されたと記録されている。「通信使」と称される一行は、室町時代に6回、豊臣政権時代に2回、江戸時代に12回、計20回派遣された。通信使が派遣された回数が最も多い江戸時代は、12回で約5,400名派遣されている。本研究はこの江戸時代の朝鮮通信使に焦点を当てている。

順次	年代(将軍謁見の年)			使命	総人員	(大阪留)	備考
	西暦	日本	朝鮮				
1	1607	慶長12	宣祖40	修好	467		回答兼刷還使
2	1617	元和3	光海君9	大阪平定日城統合の賀	428	78	同上、伏見行禮
3	1624	寛永元	仁祖2	家光の襲職	300		回答兼刷還使
4	1636	寛永13	仁祖14	泰平の賀	475		
5	1643	寛永20	仁祖21	家綱の誕生	462		
6	1655	明暦元	孝宗6	家綱の襲職	488	103	
7	1682	天和2	肅宗8	綱吉の襲職	475	112	
8	1711	聖徳元	肅宗37	家宣の襲職	500	129	
9	1719	享保4	肅宗45	吉宗の襲職	479	110	
10	1748	寛延元	英祖24	家重の襲職	475	83	
11	1764	明和元	英祖40	家治の襲職	472	106	
12	1811	文化8	純祖11	家斎の襲職	336		対馬行禮

(出典：：中村 1966)

ここでの「通信」とは信義と誠を通じるという意味であり、対等な友好使節を意味する。この通信使一行の楽団パレードは多くの日本人に衝撃を与えたと言われている。唐人行列、唐人踊、馬上才は今日の韓流ブームどころではない人気を博していたとのことである。そして現在に至るまで、各地の行事や芸能に影響を残している。

朝鮮通信使には、以下のように大きく分けて5つ規定があるとされている。

- (1) 朝鮮国王から日本に派遣されたもの。

- (2) 日本将軍に関する吉凶慶弔、又は両国間の緊急問題解決という目的を有し、回礼・報聘の意義を有しないこと。
- (3) 国王から日本将軍宛の書契(外交文書)及び礼單(進物)を携行すること。
- (4) 使節は中央官人の三使で編成されること。
- (5) 通信使又はそれに擬する国王使の称号を有すること。

このように、5つの規定が満たされた使節が朝鮮通信使である。そして、徳川家康が日本の実権を握るようになって、最初にやって来た朝鮮通信使の目的は、日本将軍に関する吉凶慶弔のためではなく、両国間の問題解決のためであった。その両国間の問題解決とは、豊臣秀吉による二度にわたる朝鮮出兵の戦後処理である。

秀吉の朝鮮出兵と李王朝との関係改善

この豊臣秀吉の朝鮮出兵にも、様々な呼称がある。日本では文禄の役(1592年)と慶長の役(1597年)と呼ばれ、朝鮮半島では文禄の役のことを壬辰倭乱、慶長の役を丁酉倭乱と呼ばれている。秀吉の目的は朝鮮半島および明の征服であり、これら二度にわたる戦争は朝鮮半島に甚大な被害をもたらした。この秀吉の野望は明と李王朝の連合軍に阻まれ、秀吉の死によって終焉したが、当然として日本は李王朝および明との関係が断絶した。

多大な被害を受けた李王朝の人々は、日本に報復することを考えなかったのかと思うほどである。しかし、秀吉死後、実質的に実権を握った徳川家康にとって、朝鮮使節の再開は重要な意味をもっていた。京都大学教授で日本近世史を専門とする横田冬彦は、「そうした「外交」主権の発動を通じて、国家主権が、秀頼にではなく、家康ないし幕府にあることを確認することに狙(ねら)いがあったといえる。」と述べている(横田 2002)。ゆえに、関ヶ原の戦い以後、徳川は断絶した李王朝および明との関係修復を企図した。

国交回復～対馬藩と朝鮮通信使の役割および李王朝の外交事情

徳川は、直接李王朝と交渉をはじめめるのではなく、李王朝と古くからつながりを有する対馬藩に李王朝との交渉を打診した。この打診は、耕地面積が一万石余りしかない対馬藩にとってもありがたいものであった。というのも、対馬藩は朝鮮との交易によって耕地面積の狭さを補っていたからである。対馬藩は朝鮮半島との距離が非常に近く、代々朝鮮外交を任せられていた豪族であった。当時、何の産物も持たなかった小島である対馬にとって朝鮮外交は生き延びるために必須のものであった。

この朝鮮出兵の戦後処理で、とくに問題となったのが、秀吉軍が朝鮮半島から連れ去った5万人に及んだとされる捕虜の返還と、戦争で王家の墓を荒らした人「犯陵賊」の引き渡しであった。今でいう日本と北朝鮮の拉致問題に近いことかもしれないが、その規模は比較にならないほどであることがこの数字からもわかるだろう。

「犯陵賊」の引き渡しについては、対馬藩はただ対馬で罪を犯し捕らえていた罪人2人を「犯陵賊」として引き渡し、李王朝はそれを見抜いていたが彼らの処刑でこの一件を落

着させた。そして、朝鮮側で捕虜の返還を担ったのが、回答兼刷還使と呼ばれた朝鮮通信使である。10 頁「朝鮮通信使一覧表」からもわかるように、江戸期の朝鮮通信使は 12 回日本にやってきたうち、最初の 3 回は、回答兼刷還使として捕虜を連れ帰るために、後の 9 回は將軍慶賀のために来た。そして、1636 年から 1811 年までの間、朝鮮国王が日本に派遣した朝鮮通信使は、日朝両国の平和・友好関係の象徴であった（大石 2009;96 頁）。

初期の朝鮮使節は、この捕虜として連れてこられた人々を朝鮮へと連れて帰ることを目的としていたのであって、徳川家家長の將軍就任を祝賀するものではなかった。しかも、連行された人々は定住し、地位を上げるものもいれば、奴隷として売られるものもいた。しかし、母国に帰ることを望まなかったものもおり、捕虜の返還は困難を極め、ついには母国に帰れなかったもの・帰らなかったものも多くいたとのことである。

そして、対馬藩による李王朝との交渉がはじまり、その結果生じたのが、のちに柳川一件（1633 - 1635）へと至る対馬藩による国書偽造であった。（ただ、1635 年に対馬藩による国書偽造が発覚し、その後幕府は再発防止のため京都五山の僧を対馬に送り、李王朝と幕府間の国書を確認させるようになった。）なぜ対馬藩が国書を偽造しなければならなかったか。そうすることなしに交易の再開がかなわないと判断したからである。朝鮮側からは、対馬藩が数百年の友好を裏切り秀吉軍の先導を勤めたことへの怒りと不信感を募らせていた。しかし、対馬藩の努力により、朝鮮側と、朝鮮通信使派遣の合意——国交回復——にいたった。

合意背景には、第一に両国の関係を不安定な状態にしていると、日本国内の情勢が解からず再襲の危惧があるということ、第二に明の存立危機と、後金の勢力拡大である（19 頁「近世における日本を取り巻く国際情勢」参照）。「日本との親交を求めた朝鮮王朝の本音には背後に迫る満州族の後金の圧力に配慮せざるをえない事情があり、対日関係を安定化させておきたいとの思いがあったことは間違いない。」と、寺島は李王朝の外交事情を指摘している。事実、李王朝は再三後金からの攻撃を受けた。ある意味で仕方なく朝鮮通信使派遣に合意したと指摘するものもいる。

朝鮮通信使の行程と日本の対応

朝鮮通信使の日本への派遣は、各回共に、幕府の意向を受けた対馬藩の宗氏が、藩の使いである参判使（差倭）を東萊府へ派遣することにより始まる（大石 2009;97 頁）。大石によれば、朝鮮通信使の行程は大きく分けて三つの区分がある（同;98 頁）。それは、漢城から釜山までの陸路と、釜山から京都までの海路と、京都から江戸までの陸路の三つである。陸路が二つと、海路が一つである。その往復は、5 ヶ月から 8 ヶ月費やしたといわれている（対馬市「善隣外交の華 朝鮮通信使」）。ここでは釜山から京都まで海路に着目をする。

通信使を迎えるにあたって、釜山から京都までの海路では各藩が港を整備し宿舎を改善するなどして、もてなしていたとされている。藩をあげて、通信使を迎える準備をしていた。藩によっては、家臣を派遣し、正使の好きな食べものなどについて調べるほどの力の

入れようであった。これには、江戸時代で情報インフラが発達していないにもかかわらず徹底したリサーチ力であると驚かされる。どのように情報を入手したのか疑問ではあるが、日本では朝鮮通信使を手厚く待遇していたと言えるであろう。また、これは昨今の日本でも注目されているような一種の「おもてなし」文化が既に存在していたのではなかろうか。日本には江戸時代から「おもてなし」の精神や文化が根付いていたとも考えられる。

【朝鮮通信使の行程】



出典：『朝鮮通信使の道のり展－交流の足跡－』（財団法人蘭島文化振興団 2004年）

しかし、この朝鮮通信使をもてなすにあたり、日本側の負担はとても大きいものであった。大石は『江戸の外交戦略』で、幕府の負担が、街道各地の休泊施設や、道橋の普請修復、人馬の負担、江戸滞在中の諸経費で1682年の通信使対応に、金2700両・銀99貫、1711年には金19万両・銀11匁・米5385石、1748年は金17000両・銀65貫かかったと記している（同;123-124頁）。諸藩の負担は通信使への馳走・海上、街道警備や江戸滞在の饗応などで、1719年福岡藩の場合、木屋設置等人足4.6万人・馬7300・銀6.9貫、1682年西国諸藩は九州～大阪瀬戸内海通航・大阪停泊中朝鮮船1艘あたり4艘の警備船、1719年幕府代官や大名は船橋作りも行っている（同;125-131頁）。村々の負担も幕領と私領関係なく、人馬から金納、次第に目的税化し、負担地域が全国規模となった（同;131-137頁）。船橋や警護については、たとえば以下のようなことがわかっている。

a. 船橋

伊豆国で酒匂川の掛船役が割当てられたのは、駿河湾に面した西伊豆の地域で、大部分が小規模な沿岸漁業を営む村々であった。船の規模も小さく、ほとんどが2～5人乗りの廻船や漁船・水揚げ船であったらしい。これらの村々では享保4年（1719）の使節来日時には77艘の船が酒匂川船橋掛船として指定されている。宝暦13（1763）年の馬入川船橋御用の請負に関する文書が、上記と同じ小塩家文書に残っている。この時の人足諸色入用は高1000石につき金6両1分であった。半金を9月10日、残金を同月20日までに支払い、それと引替えに本証文を渡す旨が記されている。

b. 警護

延享5年の来日時は5月12日から5月20日までの9日間、帰国時は6月11日から21日まで11日間同様に小田原宿に詰めている。使節の来日時13組あわせて1348人が朝鮮人御用で小田原宿に詰めていたことになる。

（参考：神奈川県 HP <http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f100108/p10530.html>）

幕府の負担は、現在の価値にして3億円以上となったといわれている。諸藩および道中の村々にも、通信使一行の往復とともに様々な負担が強いられたことは、例えば神奈川県のウェブサイトの資料にも詳細に書かれている通りである。なお、「来日の前年から先例についての調査が行われた」、「帰国後3年程は処理に追われた」という記述からは、通信使来日が準備から後処理までの前後数年間に及ぶ大イベントであり、負担が長期に渡ったことがわかる。一方で、この期間は世の中が浮き足立ち、様々な物が売れる特需を招いたことも確かで、文化的、経済的に日本が潤う機会でもあったことが窺い知れる。

朝鮮通信使と江戸

朝鮮通信使は目的地である江戸では馬喰町にある本誓寺には滞在したが、同寺の火災のため1711年からは浅草の東本願寺を宿舎とするようになった（同;103-104頁）。通信使の到着後、幕府の接待奉公が主催し歓迎の宴が東本願寺で開かれ、終了後には将軍からの上使として2人の老中が来て通信使を慰労したとされている（同;104頁）。そして数日後には幕府儒官の林大学頭が子息や弟子らとともに宿舎を訪れ、筆談し詩文の応酬を行い、事務官たちは贈り物の宛先、品目、数量等の確認や打ち合わせを行ったとされる（同;104頁）。

国書伝達の日が決まると、その前日に儀式の次第が届けられ、三使（正使、副使、従事官）や上々官（堂上訳官）などが点検し、三使は金冠、玉佩、朝服を身に着けて、軍官は軍服を、以下官位相応の官服を着て江戸城へ向かうという作法があった（同;104頁）。音楽隊が演奏し、東本願寺から大手門まで進んだ。大手門で上官らが下馬し、演奏が止み、その間士官は待機となるのである（同;104頁）。

最後の中御門の外で石垣の所で三使は輿から下りる（同;104頁）。国書は堂上訳官が捧げ

て歩き、老中が出迎える奥の柳の間には、三使と3人の堂上訳官と各1名の従者のみが入れるようになっている。そして、国書は部屋の西側に置かれて、三使は西面に座り、その後ろには対馬藩主や大名が並ぶのである。列席者は、数百人を越えたとされている。儀式が始まると堂上訳官が国書を奉じ、宗氏が取り次ぎ上段の間の将軍が饗側に置く。三使が国書の前で四礼拝を行い、続いて酒礼を行う。儀式が終わると将軍は饗会を開催し、三使の労をねぎらうのであった。数日後に将軍は、通信使の宿所に使いを送り、朝鮮国王への答書と礼物を届ける。通信使は接待役の大名や担当役人に贈り物を渡して、また接待役の大名らも通信使に地域の特産などの贈り物を渡すのであった。これらの行事とは別に馬上才の儀式があった。馬上才は、古来より朝鮮に伝わる乗馬の技術である。様々な演技種目があり、将軍、老中、奉公らに披露された。馬上才を描いた写生画や木版画も作られていた。

また、三代将軍家光の要請により、3回にわたり通信使による徳川家康を祀る日光東照宮への訪問が実現された。最初の訪問は家光が東照宮を完成させた直後、217名の通信使が3泊4日の行程で訪問した。その後、二回目の訪問に際し、幕府は家光の祖父家康に対する家光の孝行を顕彰する朝鮮国王の新筆、三具足、儒教式の祭文を朝鮮に要請した。そして、朝鮮はこれに応じ、日本に菓子職人を派遣し供物の朝鮮菓子を20種類も作った。当日は、国王仁祖の祭文が供えられ、正装の三使が着座すると、雅楽の奏楽が行われ、正使らが焼香・礼拝し読祝官の朴安欺が国王の祭文をハンゲルで読み上げた。3回目の訪問時には、その4年前になくなった家光の廟も訪れている。一行322人は朝鮮式の祭祀を行い、17代国王考宗筆額字と祭文が奉じられた。通信使の対応においてももうひとつ重要なこととして、幕府の管理体制があるが、それは以下のようになっていたとのことである(同:137-145頁)。

a. 通信使通行の優先

通信使が東海道や美濃路を通行する際、大名の通行は大人数で混雑するため禁止し、一般の旅行者も通行禁止、急用の者は脇道を通すことなどを指示した。幕府は通信使の通行を最優先させる体制を敷いたのである。

b. 通行地域の規制

幕府は通信使が通行する地域に対して、様々な注意や規制を加えた。例えば明暦元1655年に通信使が江戸に到着する前日、幕府は江戸の町民に次の様な法令を出した。すなわち、第一条では火の用心、第二条では江戸の家主たちが勤める自身番の任務、第三条では二階からの見物の禁止、第四条、第五条では行儀よく見物すること、第六条では庇の下側が見苦しくないよう、第七条では通行の前に道に水を打つなど細々と指示されている。

また、天和二(1682)年の通信使の際、幕府は次のような達を出している。

第一条では屋根や壁をきれいにすること、第二条は物干の見苦しいものは取り壊す

こと、第三条は表の溝や石垣、縁の下まできれいにすること、第四条は壁や垣根などにあてる腰板で見苦しいものは繕うこと。第五条は横町の見渡しのきく場所まできれいにすること、第六条では道を整備し中央に砂利を敷くこと、第七条では梯子や桶などが古いものは新調すること、などが指示され半年以内に終えるようにしている。

c. 文化交流の管理・統制

通信使の通行が、文化交流の重要な機会となったのは事実だが、幕府はこの文化交流も管理・統制した。例えば、宝暦一四（1764）年の通信使の際、幕府は以下のように達している。

幕府は(1)通信使と詩作贈答や筆談をする者は、対話の内容を一通り記して提出すること、(2)風雅をもって詩作贈答することは許可するが、わずかな学力で自らを誇り朝鮮をなじったり、朝鮮のことを学んだからといって日本を嘲ったりする筆談は国柄をわきまえず筋違いであること、(3)幕府儒官の林家はその弟子を出すときは詩作贈答だけとし、筆談を禁止したが、今回もそれに準じ詩作唱和は許可するものの、刻柄を誤解するような無用な筆談を禁止した。また詩作唱和や筆談の場には役人が立ち会い、林信篤に全て報告すること、更に筆談を願った者のほかに給仕として出席したり、出願できないものが出席者に頼んで詩作贈答したりすることを禁止する、ことにも触れている。

このように幕府が通信使外交において摩擦や対立を回避すると共に、林家を通じて文化交流を管理・統制していたことがうかがえる。以上、通信使外交について、幕府は「被対外国へ候御大礼」と国家的儀式・儀礼との認識のもと、様々な管理・規制・注意を行っていたのである。

d. 近代的国家間外交の前提

通信使外交に関する対馬藩や幕府の史料から、通信使外交が、幕府の国家的儀式・儀礼という認識のもと、公共的・国家的な負担体系に支えられ、管理・規制・注意を伴って展開されたことを明らかにしている。このことは、従来指摘された日本型華夷思想、朝鮮中華思想という意識面とは別に、近代日本が国家規模で、朝鮮と対等外交を展開していた示すものと言える。

こうした江戸時代に 200 年余りも続いた朝鮮通信使派遣の歴史が閉じてしまったのは、財政や政情において困難な国内情勢を抱いていたことに加え、それを乗り越えてでも派遣を継続させようという積極的な気運が生まれなかったからだと推測される。一方で、朝鮮にとっては清との関係は安定しており、日本との友好関係も保たれていたために、再侵略の恐れも遠退いたであろうと考えられ、差し迫って通信使を派遣する必要がなくなったのであろう。しかし、長い歴史を持った「朝鮮通信使」の日本への派遣は幕を閉じていってしまったわけだが、今日にいたるまでの日本と朝鮮半島の関係において様々な意味があったであろう。近年、近世史研究の分野においては、近世国家・社会を近代国家・社会の前

史として捉える視角・方法が模索されつつあるが、以下の考察により、さらに通信使外交が日本にとって、どのように位置付けられるかを整理したい。

1.2 江戸時代の外交戦略～通信使外交の歴史的位置

李王朝との友好と緊張～大石学『江戸の外交戦略』より

大石は、『江戸の外交戦略』で、序論でも述べたように、江戸期朝鮮通信使の外交的な意義として、以下5つを挙げている（大石 2009）。

（1）直前の豊臣秀吉による朝鮮侵略との対比から「善隣友好」の象徴。これは直前の豊臣秀吉による朝鮮侵略との対比から「善隣友好」の面が強調されてきたとのことである（同;116頁）。

（2）「日本型華夷思想」、「朝鮮の中華思想の形成」。日本型華夷思想とは、簡単にいうと日本を世界（華夷秩序）の中心とする考え方である。この日本型華夷思想は、「信を通わすことを目的とする使節」を意味する通信使が、17世紀から19世紀の日朝外交において、両国の対等外交の象徴的な役割を担ったとする見方へのアンチテーゼである。しかしながら、この背景には、日本を中心とする華夷秩序の中に朝鮮を位置づける江戸幕府と、自らを中華文化の継承者とする朝鮮王朝の、互いに対する優越感が存在していた（同;96頁）。

（3）中世における幕府だけでなく、日本西部・九州地域の有力者（複数の）が外交権を有する状況から、徳川幕府による外交の統制強化、つまり一元化への移行段階を表している。通信使外交を中世における幕府以外の日本西部・九州地域の有力者と朝鮮の遣いととの重層的かつ多元的な外交の段階から、近世における朝鮮王朝（李氏王朝）と対馬藩宗氏を介した徳川幕府との一元的な外交への移行と捉える見方である（同;117頁）。例として、大石は、李存熙が、「外交文書の往来は朝鮮前期には多元的、重層的に行われたが、後期には朝鮮－対馬藩－幕府間で一元的に行われていた」「幕府が全国的に完全に掌握出来なかった朝鮮前期には朝鮮との一元的な外交の通路をつくることができなかった。朝鮮としても幕府のみと外交関係を持つのは困る立場にあったため、重層的な多元的外交関係を持つことになった」と一元的な外交の成立として捉えていることを紹介している（同;117頁）。

（4）日本型華夷秩序論ではなく、武力による徳川主従制の論理・世界観に基づく大君外交を表す。以上、4つは大石以前からいわれてきたことである。

そして、（5）友好と緊張の二側面を有する国家間外交。これは（1）の善隣友好のみを強調することに対する異論で、大石が新たに提示した側面である（同;116-123頁）。大石がいうには、通信使外交は、両国が友好関係を維持するために、日朝間の文化や風習の違いを認識して展開された。一例として、正徳元年（1711年）の通信使の際、対馬藩の年寄中は藩の担当役人に対して、「朝鮮人は、物之善悪多寡等を論候、下々必口論いたし候事有之由に候、随分道理を立候て、通詞を以申達、不及諍論様に可被相心得候」と朝鮮人が物の善し悪しや多少のことで文句を言っても、道理を立て通訳を間にして、争論を起さぬよう指示

したという史実を挙げている（同;120-121 頁）。

他方、通信使外交が示す緊張関係の一例としては、幕府役人が文化5年（1808年）の通信使が延期されることになった際、報告書に、「対州之迷惑不首尾」が、国家の浮沈に関わることを述べたことを挙げている（同;119 頁）。大石によれば、「すなわち、対馬藩や幕府は外国との接点、対馬藩を外国から日本を守る防衛の拠点として認識し、位置付けていたのである（同;119 頁）。」ゆえに、大石は、日朝外交は友好と緊張の二側面を持って展開されたと主張する。

儒学を取り入れた徳川の外交

この大石が新たに提示した側面をはじめこれら5つの側面はどれも今日に至るまでの日本と朝鮮半島の関係を理解する上で重要だが、江戸期の朝鮮通信使から、もうひとつ重要な側面がある。それは日本と朝鮮半島における儒学と外交、儒学と政治理念の関係である。幕府側は、李王朝との外交関係をよくするために、対馬藩に任せきりだったわけでも、何ら努力をしなかったわけでもない。仮に当時の日朝国交回復は、対馬藩を中心とする「実利優先」と、東アジア情勢の変化によるものであったとするなら、明治になって、何故西欧の北東アジア進出に対して明治新政府と李王朝は協力できなかったのか、という疑問は不可解であろう。

日本近世儒学の勃興と李王朝における儒学の歴史的位置

この徳川幕府が重用した儒学（とくに朱子学）は、秀吉死後、奇しくも、捕虜の中にいた姜沆という儒学者の貢献が大きい。というのも、姜沆は、日本に連れてこられてから、のちに日本で近世儒学の祖といわれる藤原惺窩（1561 - 1619）と出会い、惺窩に多大な影響を与えた。惺窩門弟には、林羅山（1583 - 1657）や、那波活所（1596 - 1648）、松永貞徳の子である松永尺五（1592 - 1657）、そして堀杏庵（1585 - 1643）がいる。

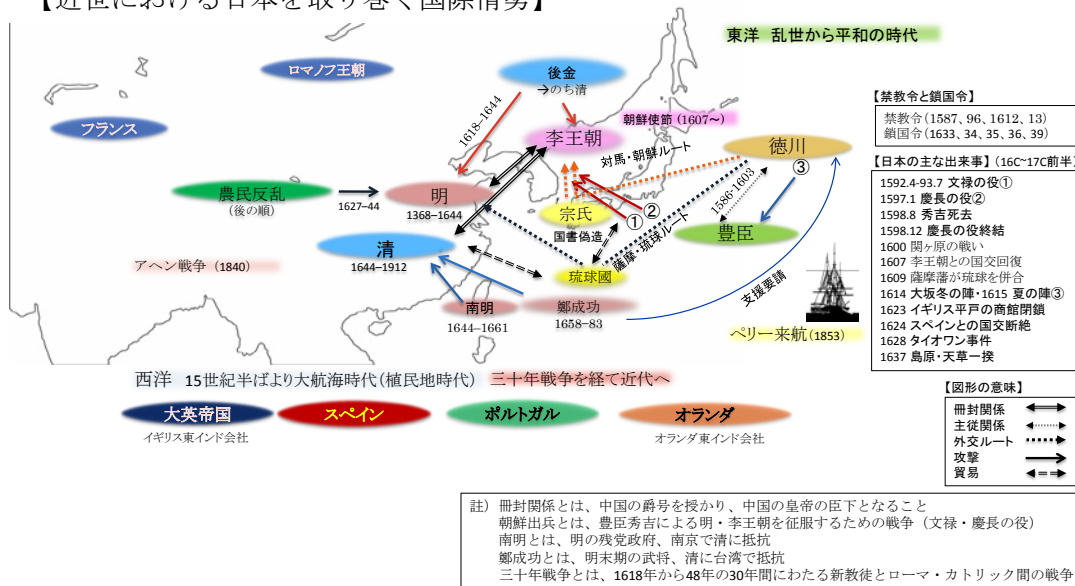
家康、秀忠、家光三代の将軍は、羅山を登用し、朱子学にもとづく外交文書の起草や朝鮮通信使の対応を整えさせた。大石によれば、羅山は、江戸幕府の法制や文教政策にもかかわった（同;45 頁）。また、尺五の門弟には、木下順庵がおり、その門下には対馬藩で李王朝との対応に務めた雨森芳洲と、朝鮮使節対応を簡素化した新井白石がいる。いずれにせよ、羅山や、芳洲、白石によって形作られた朱子学にもとづく日本の外交様式は、江戸期の日本と李王朝の国交を取り結び、長きにわたる日本と李王朝との友好関係を築くのに大きな貢献を果たしたといえる。しかし、徳川幕府と李王朝との間に儒学に対する位置づけが異なっていた。

そもそも姜沆のような人物を輩出した李王朝で、儒学が重んじられていたのは、14世紀に王朝を建国した李成桂にまでさかのぼる。韓国史専門の李成茂によれば、「李成桂を補佐して朝鮮王朝を建てた参謀たちは儒教知識人だった。」とのことである（李 2006a;83 頁）。李王朝の国王の中には儒教と抗うこともあったが、決してそれが主流になることは

なく、儒学は李王朝の正統性を表すものとして役割を長らく保ち続けた。国王世祖にいたっては、甥の端宗を廃位させて王座についたゆえに、儒学の立場から許すべからず王とされ、その正統性を仏教に求めなければならなかったほどである（同;262 頁）。たとえ、ヨーロッパ列強が進出してきても、そうした儒学の位置づけが揺らぐことはなかった。

しかし日本で儒学は、徳川幕府にとって、政体の維持に都合のよいもので、李王朝との関係を改善し、友好関係を堅持していくためであって、国学の登場、天皇崇拜、西欧の思想・知識によって儒学の位置づけは、とくに明治維新以降相対化され、明治政府ではそれほど重視されなかった。つまり、李王朝では儒学は建国の当初から統治を正統化する学問であり、規範的な教えであり続けたが、日本での儒学は、広く伝わったのが江戸時代からである。しかも統治を正統化するものとしての儒学が占めていた地位が国学などによって揺らいだことは、その位置づけが相対化され、近代化への対応がより迅速に進んだひとつの所以なのではないか。いずれにしても、日本と朝鮮半島での儒学に対する位置づけが異なるということも重要な側面であり、今後ともこうした研究を深める必要がある。

【近世における日本を取り巻く国際情勢】



参考:寺島実郎「朝鮮通信使」に見る江戸期の日朝関係——17世紀オランダからの視界」脳力のレッスン、世界(岩波書店、2014年4月号)。

(出典: 筆者作成)

江戸の外交戦略

加えて、外交とは外国との交際に関わるさまざまな政治的活動の総称といわれている。ハロルド・ニコルソンの『外交』によれば、外交は外交戦略に基づき立案される政策としての「外交政策」(政治的側面)と実際に二国間ないし多国間で行われる具体的な国家間交渉としての「外交交渉」(技術的側面)の意味合いに大きく分類されている。その諸活動は、国家による国際社会の軍事・経済・政治・文化など諸問題に関する交渉活動に対して、互

恵関係を原則としており、江戸時代の日朝間の文化交流においても、日朝の外交戦略(文化交流政策)の位置づけの中で、国家を代表する対等の友好使節(朝鮮通信使)が外交交渉のアクターとして重要な役割を果たしてきた。

江戸時代の朝鮮通信使を中心とした日朝文化交流の歴史は東アジアの情勢変化の中で、日本と朝鮮との間には幕末に至るまでの江戸時代 200 年以上平和を保持し続けてきた。その際、大きな要因となるのが世界のパワーバランスの中でのアジア海禁政策(日本においては鎖国)下の中国冊封体制からの日本の離脱とキリスト教をはじめとするヨーロッパ文明との離脱であると共に、平和の礎となった思想として、儒教・朱子学があったとする上垣外憲一『日本文化交流小史』は示唆的である。上垣外は「朱子学は戦国時代の争乱で、宗教的な結集点を失った日本人に「人道」という観念を教え、人間中心の普遍的な理に対する信念を与えたという点で、大きな役割を果たした。特に朱子学の持つ普遍的な人間性への信頼に基づく平和主義は、戦争につぐ戦争に荒れすさんだ世相を体験した江戸時代初期の日本人にとって大きな魅力をもつものであった。」としている。

他方で、朱子学 of 思想の中には、為政者の権威誇示や体面を最優先する考え方がある。朝鮮王朝は飢餓で苦しみ農民や税収不足による国内財政逼迫の中でも、徳川幕府からの新将軍の祝賀使節派遣要請を拒めない国家としての体面や前例主義の立場から莫大な予算を費やして派遣に応じている。対外的(タテマエ)には対等な文化交流の体裁を整えていたようだが、本質的(ホンネ)には片道交流の実相が見受けられる。

したがって、こうした体面を重んじる儒教・朱子学の影響が色濃い両国の思想・思考が当時の東アジア情勢の変化の位置づけの中で、両国の外交戦略として結びつき、日本と朝鮮の間には幕末に至るまでの江戸期 200 年以上平和を保持してきたように感じる。現在社会の中の思考では考えられない政策決定であるが、今日に至る複雑に屈折する日韓関係を考える視座として改めて一視点として考えてみることの意義を感じる。次に、かつてインターゼミ多摩学班が研究した八王子千人同心が、どのように朝鮮通信使あるいは徳川幕府と関わりがあるか検討したい。

1.3 日光東照宮と八王子千人同心～多摩学より

八王子千人同心とは

三代将軍家光の要請により、3回にわたり徳川家康を祀る日光東照宮を訪れた朝鮮通信使であるが、ここで日光東照宮と通信使の訪問に関わりのある、八王子千人同心について触れておきたい。

八王子千人同心の始まりは、甲斐国(現在の山梨県)である。9人の小人頭とその配下の人々で、武田信玄で有名な武田氏の家臣であった。千人同心と武田氏のゆかりが深いのはそのためである。

しかし武田氏は織田信長の攻撃により天正 10 (1582) 年に滅亡してしまうこととなり、新たに甲斐国を治めたのが、後に徳川幕府を開いた徳川家康であった。小人頭と配下の同心たちも家康の下、新たな道を歩み始めるのである。

各地で大名による争いが続いた戦国時代も、豊臣秀吉による天下統一へと進んでいった。この頃、関東で強大な勢力を誇っていたのが、北条氏である。八王子も北条氏の領地であった。秀吉が関東に侵攻し、天正 18 (1590) 年に北条氏を降伏させると、徳川家康が関東を治めることとなり、八王子も家康の支配下となった。やがて八王子地域の治安維持を主な目的として、9人の頭と 250人の同心が八王子に移されることとなった。彼らが最初に住んでいたのは、落城まもない八王子城下であった。以降、千人同心の組織が整えられていくこととなる。

天正 19 (1591) 年、小人頭を 1人増やして 10人、同心は 500人に増員され、文禄 2 (1593) 年には八王子城下から、現在の八王子市千人町を中心とした地域に屋敷地を拝領して移転してくることとなった。さらに関ヶ原の戦いが行われた慶長 5 (1600) 年頃、同心は新たに増員されて 1,000人となり、文字通り「千人同心」となった。

八王子千人同心は、小人頭を起源とする千人頭 10人に率いられた同心 1,000人からなる。頭 1人に 100人の同心がつく構成である。ところで、千人頭と同心の間には明確な格差があった。千人頭は将軍にお目見えが許される旗本格で、知行地を与えられていた。一方、同心はお目見えない立場にあり、幕府から手当(米)は支給されていたが、武士としての役目を勤める時以外は八王子周辺の村に居住し、年貢も納めていたということである。後述するが、これが八王子千人同心の特徴である、武士でありながら農民でもあるという、極めて稀な身分形態である。

千人同心の位置づけ

千人同心の基本的な性格は、緊急時の対応にある。大きな役目は、前述の通り八王子城落城後の治安維持、いわば落城により不安定になっていた人心を安定させることであった。しかし実際には、軍事的な側面が極めて強く、身分は武士階級であった。関ヶ原の戦いで家康の警護、朝鮮出兵、大坂夏の陣への出陣、家光の日光参拝の警護などを行っていた。また、千人同心たちの暮らしの特徴として、拝領屋敷地の組頭の家は、周辺の農家と比べると広くはなかったが、式台付きの玄関など、格式の高さを示していることが分かる。

前述の通り、身分は武士であるが、通常は高持ちの百姓として耕作にあたっていた。また、千人同心は苗字を公称することが許されておらず、帯刀についても公務中のみと制限されていた。そして同心の家族であっても帯刀は許されず、引退した同心経験者であっても同心職を退いたならば帯刀は出来なかったようである。このように農兵分離のもとでは、士族身分と農民身分を併せ持つ、極めて稀な身分形態であった。

日光東照宮の火の番

千人同心に命じられた重要な役割が、慶安5（1652）年から勤めた日光の火の番であった。日光東照宮には家康が祀られており、幕府の精神的な拠り所であった。千人同心は日光東照宮の防火と警備にあたり、境内や町内を見回り、いざ出火となれば消火活動にあっていたのである。八王子から日光までは、当初は江戸に出て千住から向かうルートを通っていたが、多くは八王子から拝島方面へ向かい、松山（埼玉県東松山市）、佐野（栃木県佐野市）を経るルートを利用していた。

当初は千人頭2人と100人の同心が担当し、50日で交代する体制であったが、その後何度か変更され、最終的には寛政3（1791）年に千人頭1人と同心50人で、半年交代で務める体制となった。この役割は江戸時代を通じて勤められ、慶応4（1868）年に千人同心が解体するまで続くこととなった。この年、既に幕府は瓦解し、新政府軍と旧幕府勢との間で戦いが始まっており、やがて新政府軍は日光にもやってくることとなった。

この時、日光の火の番を勤めていた千人頭が、石坂弥次右衛門義礼であった。義礼は、刀を交えることなく板垣退助ら新政府軍に明け渡し、東照宮を戦火から救うこととなった。しかし八王子に戻った義礼は、戦う意志のあった同心たちにより非難を浴び、その責任を取って帰京した夜に切腹した。このような関わりから、昭和49（1974）年に八王子市と日光市は姉妹都市となった。文字通り命を賭けて日光東照宮を守った石坂弥次右衛門義礼の墓は、菩提寺の興岳寺（八王子市千人町）にあるが、墓前の香台は日光から送られたものである。

千人同心の武士としてのアイデンティティ

日光東照宮の警備を命じられた八王子千人同心は、どのような気持ちであったのか。ここからは推測の域を出ないが、おそらくは嬉々としてその大役を拝命したのではなかろうか。というのも、そもそも八王子千人同心の始まりは徳川家康によって組織されたものであるが故、家康に対する忠誠心のようなものは人一倍強かったであろうと推測できる。その家康が祀られている日光東照宮の警備という任務は、彼らにとっては本望であったのではなかろうか。石坂弥次右衛門義礼が自らの命を賭けてまでも守り抜いたという事実からも、家康に対する忠誠心が見て取れる。そしてもう一つは、武士という身分である。

士農工商という身分階級があった当時、武士は文字通り上級の身分であった。然し乍ら、八王子千人同心は武士でありながら農民であるという特殊な身分にあったため、武士として扱われている時は、農民としてのそれよりは、優越感のようなものがあつたのではなかろうか。ちょうど日光の火の番が命じられた頃は、ある程度幕府の体制が整い、世の中が安定して平和な時代が到来していたので、千人同心が武士として扱われる機会も一時に比べて減っていた時期であったと推測される。したがって、八王子から日光への3泊4日の工程や、極寒の真冬の日光での夜を徹しての見回りなど、かなりつらい勤務も、武士として扱われるという優越感のもと、アイデンティティを鼓舞されるような感覚の中で務めて

いたと思慮される。

朝鮮通信使と八王子千人同心

千人同心が日光の火の番を命じられた3年後の明暦元（1655）年、朝鮮通信使が3度目の日光訪問を行っている。その際、千人同心が通信使の警護を担ったという事実がある。通信使に対する幕府の対応から、その重要性は一目瞭然であり、その通信使の警護にあたるという任務も、千人同心は嬉々として、誇りをもって遂行していたのではないかと推測される。

蝦夷地の開拓

千人同心の活動としてもうひとつ挙げられるのが、蝦夷地（現在の北海道）の開拓事業である。18世紀も後半になると、江戸幕府はロシアの進出による防衛強化の必要から、蝦夷地の一部を直接支配することとなった。こうした動向に呼応して、千人頭の前半左衛門胤敦は蝦夷地の開拓と警備を幕府に願い出たのである。寛政12（1800）年に幕府の許可を得て、胤敦は弟の新介とともに、千人同心の子弟100人を率いて北海道に渡ることになる。胤敦は白糠（現在の白糠町）、新介は勇払（現在の苫小牧市）にそれぞれ向かったが、現地の気候の厳しさは彼らの想像をはるかに超えるものだった。開拓による収穫も乏しく、病人や死者が続出したことから、開拓事業は終了せざるを得なかったが、こうした胤敦らの事業がゆかりとなり、昭和48（1973）年、八王子市と苫小牧市は姉妹都市となった。

文化への功績

前半左衛門胤敦は蝦夷地から戻ると千人頭に復帰したが、しばらくした後、幕府から多摩郡の地誌調査を命じられることとなる。胤敦は植田孟縉や塩野適斎ら他の千人同心とともに多摩の村々の調査を行った。こうして文政5（1822）年『新編武蔵国風土記稿』多摩郡の部が完成し、幕府に納められた。他にも植田孟縉は『武蔵名勝図絵』、塩野適斎は『桑都日記』を著すなど、千人同心は文化事業にも貢献したのである。

また、彼らの一世代あとの松本斗機蔵は、海外事情に精通した千人同心であり、頻りに外国船が姿を現すようになった時代を受けて、『猷芹微衷』と題する海防政策の提言書を著すなど、世界に目を向けていた。このように千人同心は、学識に秀でた者を多数輩出していたのである。

幕末の千人同心と、千人同心の解体

幕末になると、国内外の政情不安を背景に、幕府は軍制改革を行い、千人同心も西洋式軍隊への近代化が図られることとなった。慶応2（1866）年には名称も「千人隊」と改称され、長州出兵、横浜の警備、将軍が京都へ行く際の御供などに動員された。慶応3（1867）年、徳川慶喜の大政奉還により、幕府は政権を返上、明治維新を迎えると、新政府軍は旧

幕府勢力の討伐のために関東へと進軍した。慶応4（1868）年3月、板垣退助の率いる軍隊が八王子にやってきた際、千人隊は礼装で官軍を迎え、徳川家への寛大な処置をしたためた嘆願書を提出するとともに、武器を差し出して恭順した。このことから、徳川家に対する彼らの忠誠心を伺うことが出来る。同年6月、新政府から去就を迫られ、徳川家に従い静岡に移住するもの、新政府に仕えるものもいたが、大多数が「脱武着農」、すなわち武士の身分を捨てて、農民になる道を選んでいった。こうして千人隊は解体され、八王子千人同心は終わりを迎えることとなった。

1.4 民間交流としての通信使外交

はじめに

朝鮮通信使は江戸期の日本と朝鮮の間に、長い平和をもたらす大きな役割を担った。しかし、他の外交がそうであるように、通信使実現の裏には当然ながら日朝両国の様々な政治的思惑が交差しており、必ずしも仲良し外交というわけではなかった。

朝鮮出兵により暗い影を落とした両国関係は、政情の変化と互いの懐事情により、また各方面の様々な人の努力が実り通信使の派遣という形で前進する。その情勢の下で日本へやって来る使節団は、当時の先端技術や学問を持つ儒学者や画家、医師などで構成され、技術と文化両面で非常に高度な集団であった。これは文化先進国を自負する朝鮮が、国を挙げた一大政治イベントで日本に侮られることのないように、そして先の朝鮮出兵による日本の武力による蛮行に対し、文化でもって報復をするという意識の現われでもあった。

そのなかでやって来る通信使は、鎖国下の日本の民衆にとっては異国人、文化に触れることのできる数少ない機会であり、当然行く先々で民衆と通信使は文化交流の嵐を巻き起こすことになる。

本項ではそのような出来事を踏まえ、通信使の来訪を政治的な側面だけでなく、民衆との文化交流の側面から見えていく。

通信使の実像

（1）通信の国としての関係

通信使は日朝両国の平和を長く支えたすばらしい外交事例として今日評価されている。

通信使が実現する前の日朝関係は、秀吉の朝鮮出兵によって関係が途絶え、戦争の傷が癒えぬままであった。そのような関係の両国が通信使外交を実現できた裏には当然互いの「実利」が見え隠れしている。

当時の朝鮮にとって、明朝の治める中国が北方勢力により脅かされたことによる政変の余波は自身の統治する半島にとっても無視できないものであり、また日本側も徳川への政権移行に伴い国内統治を磐石とするための権威付けとして、海外の情報を手にするために

も、何より長期的に安定した平和が互いに必要だったようだ。

17 世紀江戸政権は中国とオランダを通商の国と位置づける一方で、朝鮮と琉球を通信の国と位置づけ、外交関係を構築していくことになる。オランダ、中国とは外交ではなく交易関係を主とするため、大規模な使節団が来日することはなく、そのため長崎など限られた場所でないと異国文化に触れることはできなかった。一方で通信の国朝鮮とは外交関係にあり、通信使が定期的に来日し日本各地を巡りながら江戸を目指す、数少ない異国の使節であり、且つ日本を縦断するという条件は西日本に住まない人々にとっても格好の異文化交流のチャンスであったと考えられる。

また、日本の民衆にとって通信使が文化交流の貴重な機会であったのと同様に朝鮮においても見識を深める貴重な機会であったろう。

当時の朝鮮は海外渡航を禁止しており、例外的に海外へ行ける機会は日本への通信使と中国への燕行使の二つのみであった。朝鮮の人にとって、まだ日本との戦争の記憶が尾を引いていた通信使外交開始初期のころであっても、海外への知見を深める限られた機会は少なからず魅力あるものだったはずだ。

(2) 通信使の陣容

朝鮮通信使は慶長 12 (1607) 年から文化 8 (1811) 年までのおよそ 200 年間に計 12 回来日したが、そのすべてが同じ目的というわけではない。200 年を通して日々変化する世界潮流の中で通信使の役割もその都度、変化していった。

一言に通信使と言っても最初の 3 回は回答兼刷還使として、その主たる目的は先の朝鮮出兵の戦後処理という意味合いが強く、慣例行事として通信使外交自体が安定期に入るのはその後の話であり、本格的な文化交流を担う使節団となるのは天和 2 (1682) 年に来日した第 7 回目の通信使からである。

当時の朝鮮は小中華思想に立脚し、中華たる朝鮮が国家間のやり取りにおいて日本に侮られることのないように、また相手に自国の文化的優位性を示すため、優秀な儒学者、医師、漢詩家など一芸に秀でた人を多く含んだ非常に高度な技術、文化集団を組織した。使節は毎回 400 人から 500 人前後の人員で構成され、そのなかには踊りを踊る青年団や音楽を奏でる楽隊も加わっており、行く先々で聴きなれない異国の音楽、踊りなどに引き寄せられ民衆が波を作った。

実際の記録を見てみると、寛永 13 (1636) 年の第 4 回目の通信使来訪を江戸で目撃したオランダ商館長のニコラス・クーケバッケルはそのときの様子を刻銘に記している。多数の武士に警護された通信使の行列は先頭に楽隊を置き、多くの人に担がれた内に赤のビロードをはった輿が続く。輿の中には漆塗りの箱があり、その箱には将軍への国書が納められている。輿が過ぎると今度は再び楽隊が演奏しながら歩き、騎馬が続く。そして最後に朝鮮人とその荷物を運ぶ馬 1000 頭が続くこの行列は、彼によれば一行が通り過ぎるのに約 5 時間かかったと記録している。

文化の交わり

(1) 本格的な文化交流の始まり

朝鮮通信使は最初3回目までが戦後処理のための使節団として、その後の第4回から6回目の来訪で日光の参拝などを通し徳川幕府は強固な統治体制を内外に示した。そして第7回目からは第4次通信使来訪の際に徳川家光の求めで特別に参加した医師や、曲馬上覧(馬を使った曲芸)が慣例化するなど、7回目を境により文化交流の色合いが強まった。

(2) 知識人と通信使と共通の文字

当時の日本では儒教や漢詩が教養とされていたため、先端の技術と文化を持ち合わせた通信使は行く先々で現地の学者や文人、僧侶などに歓迎され、文化交流の嵐を巻き起こした。

享保4(1719)年の第9回目の通信使来訪の際、使節に随行した製述官申維翰は「海遊録」において、大阪の西本願寺別院に宿泊した際に夜遅くまで学者や文化人が押しかけるので「時に鶏鳴まで眠れず」(明け方になるまで寝ることができなかった)という言葉を書いた。申維翰はほかの場所に赴いた際にも熱烈な歓迎と熱心な文化交流に忙殺され、食事もとれずに疲労困憊し「文字の厄」だと嘆いたという。学問を探究する人にとっては外の文化、知識を持った文化人を前にして、話すチャンスがあるならいくらでも話してみたいというのが本音だったのだろう。

これらの文化的な交流は、当時の日本の教養とされていた「漢文」という共通の文字の存在が大きいだろう。当然両国の言葉は日本語と朝鮮語であり、通訳なしに互いが意思疎通を図る術はないが、共通の文字を共有していたために筆談で交流を深めることが可能であった。現代でもネイティブの英語は話せなくとも、簡単な英文と片言英語で意思疎通できることの意味が大きいように、当時言語も文化圏も違う国同士が筆を交えることで理解しあえたことの意味は重要だと感じる。

(3) 民衆と通信使とアイドル

知識層が異国の使節に熱狂したのと同様に、各地の一般の民衆にとっても通信使来訪はまさに一大イベントであった。

残された記録を見ると、接近を禁じられていたはずの通信使一行の船に、近づこうと船で並走し転覆、近づきすぎて通信使の船に吸い込まれ転覆など、この手の話には事欠かず、通信使の人気的一端を垣間見ることができる。

その中でも、当時の絵画や逸話を見聞きすると、通信使一行と共に来訪した舞を踊る小童への人気が高かったことが伺える。

小童とは正使たちの付き人で、主に未婚の青年たちのことである。ひげを蓄えず髪を伸ばし三つ編みにしているため、絵画では女性のように描かれる場合もある。小童以外の人間は立派な髭を蓄え、赤や青など派手な衣装に身を包んでいるため、異国の人間であることも相ま



(出典：朝鮮揮毫図 英一蝶)

ってか、なかなか強面な風貌で描かれることが多い。その中でまだ年若き異国の青年は、現代の「イケメンアイドル」のように見えたのではないだろうか。

絵師英一蝶の朝鮮揮毫図には小童と町人の交流の様子が活写されている。通信使の行列の中に飛び込んだ町人が小童に求書し、それに応えて小童が馬上から紙に筆を走らす様子を写した一枚である。小童が馬に乗っていることから分かるように、通信使一行が行進中の出来事である。幕府から近づいてはいけなと御触れが出ていたはずだが、そんなことは上の空で目当ての小童に近づき、凶々しくも大胆に頭上に紙を広げる町人の顔はなんともいえない自慢気な顔に見える。その一方で左側の馬を引く男性はあまり楽しそうな顔をしておらず、やれやれといったところなのだろう。現代に当てはめると、空港に到着したアイドルグループに、ファンがセキュリティーの制止を振り切ってサインを求めに行くようなものだろうか。予定に沿って行進中の行列を遅延させてまで求書を求めるのは、なかなか勇気のいることだったと思うが、当時の民衆のたくましさと小童への注目度が窺い知れる絵である。

また、通信使への接待の様子を事細かに書き留めた尾張藩の下級武士朝日文左衛門重章の日記には、正徳元（1711）年の通信使一行が江戸で代任を果たし名古屋へ寄った際の出来事が記録されており、その中には「世中花と云小童を町人口吸いしに喜悦す」と、町人が小童に接吻するというあまりにも大胆な場面も記録されている。小童は訪問地で町人からの書の求めに応じるなど、ほかの使節のメンバーに比べ民衆との接触の機会が多かったが、さすがに町人が接吻してきたことには驚いたはずだ。

もちろん日記を書いた重章自身も通信使の来訪に相当興奮していたようで、通信使が宿泊した惣見寺で書画を求めてしつこくうろつき回り、「遠慮すべし」、と目付けから注意を受けたりしてはいる。それと比べても町人の直接的で大胆なコミュニケーション方法には驚かされる。隙あらば接吻を、というほど異国の青年たちは羨望のまなざしで見られていたということなのだろう。

このように知識層と通信使の漢詩の応酬など、まさに文化的交流といえる交わり方に比べ、対面で使節と交流する機会の少ない民衆の少々の無茶な覚悟のワイルドな接触の仕方は、民衆のたくましさを感じさせるのと同時に通信使や小童への強い関心を表している。

（４）通信使の各地への文化的影響

対馬から始まり江戸までの間に各地で文化的交流を巻き起こした通信使の帰国後も、各地の民衆により朝鮮の文化は継承され、独自の形で地域ごとに根付いていった。

ひとつの例を挙げると、現在も続く岐阜県大垣市の大垣の秋祭りの目玉は朝鮮山車の曳山行列であるが、この祭りの始まりは古く、慶安元（1648）年である。通信使の行列に強烈な感動を受けた竹嶋町の大黒屋、河合治兵衛の祖先が通信使の行列に付いて名古屋まで同行しながら衣装や装飾品などの詳細をスケッチし、それをもとに京都の西陣に衣装、装飾品を特別注文したことが元となり祭りが始まった。

わざわざ通信使に名古屋まで追隨しながらスケッチしたというのだから相当の感動と衝撃があったのだろう。そのような経緯で始まった祭りも徳川幕府が倒れ明治政府に変わる

ころ「国家神道に反する」として禁止され、朝鮮服を模した衣装や装飾品は山車の収納庫の最上部に隠すようにしまわれることになる。その後再び衣装や道具が見つかるのは昭和47（1972）年になってからである。

これだけの祭りがたった一度の断絶により、人々の心から100年も忘れ去られたという事実は文化の積み重ねの尊さと後世への伝承の大切さを感じさせる。

現代へ繋がる文化の軌跡

秀吉の朝鮮出兵など両国の大きな問題を乗り越えて実現した通信使は200年にわたり両国間の経済的、政治的そして文化的発展に寄与した。一方で国家間の外交に視点を移せば、互いが交流しているだけでは決してよい関係は生まれないだろう。外交的友好関係とは互いの実利と、対処しなくてはいけない現実の問題があって初めて成立するものであり、国益を度外視した友好は存在しないからである。

しかし、民衆にその制約はなく、国籍やイデオロギーに囚われることのない活力ある交流が可能であったことが分かる。ひとつの視点として、外交的視野から離脱し一人間として外を見ることの大切さを感じる。

今こうして朝鮮通信使をきっかけに日朝のさまざまな出来事に触れることができたのも200年の文化交流と、その結果が有形無形の文化として継承された結果である。現在でも日本各地に通信使の行列を模した祭りや唐人人形など、数百年の文化の蓄積が息づいており、その歴史の層に私が触れることの意味の重さに気づかされる。

明治期に入り日本は帝国主義を掲げ、国民の意識をひとつに集約していく過程で払われた歴史的、文化的犠牲は大きく、現代まで続く日韓の国民の相互の断絶の大きな原因のひとつになっている。明治以降の文化的断絶と民衆の朝鮮に対する意識の変化は大きなもので、対馬においても明治以降朝鮮に関連した建物や施設があまり大切に保全されていない現状から強くそのことを感じた。

しかし、逆にいえば明治期から近代までの短い断絶期をのぞき、江戸末期までの日本と朝鮮はいくつもの問題を抱えつつ長い間上手く付き合っていたといえる。近代日本と朝鮮の問題を見ることも大切だが、近代の関係よりずっと長く安定的に付き合ってきた明治期以前の歴史には先人の知恵と、そこに生きた人々の文化、人の交わりがあった。国家間の問題に対して、外交的あるいは政治的視点のみに留まり埋没しないよう、イデオロギーや国籍、人種に囚われることなく当時の人々が現代に残した文化の軌跡から未来の両国の可能性に目を向けたい。

2. 日中関係と中朝関係

中国の存在

中国は、1840年のアヘン戦争から始まる中国の没落まで間違いなくアジアの中心的国家であった。アジアを語る上で中国の存在は必要不可欠な存在であり、朝鮮通信使派遣の背景にも中国の姿が見え隠れする。本章では中国と日本、中国と朝鮮の関わりを記していく。

2.1 日中関係

中国と日本

江戸幕府が成立すると徳川家康は朱印船貿易を開始した。取引相手はほとんどが明の商人であった。しかし明との関係は、倭寇による中国沿岸部の襲撃や、豊臣秀吉の朝鮮出兵時に朝鮮の援軍に來た明との一戦など、必ずしも良いものではなかったため、明側の險悪感は拭い切れず、明への日本船の入港は禁止された。そこで、日本の商人は朱印状を持ち、明の目の届かない東南諸国に取引に行った。東南アジアには明の商人の往来もあり、日本の商人は東南アジアで取引をする出會貿易を展開していく。これが成功し、その後、明の民間人の來日が増加し、九州を中心に唐人屋敷を形成していくこととなる。

徳川家康から徳川秀忠の時代になると、幕府は朱印船による出會貿易から明との直接貿易である勘合貿易を再開させようと目論む。朱印船による出會貿易の欠点は、明の商人と東南アジアで出會えない可能性があることである。現代のように海上インフラは安定的でなく、東南アジアへの航路の長さに加え、天候の不順で旅程が変更されるため、次回取引日程を決めることは困難であった。確実に明の商人と取引をするためには、直接貿易の必要性を迫られた。しかし、明の險悪感は相当なものだったのか、この勘合貿易による直接貿易計画は失敗に終わってしまった。

中国はその後、漢民族国家の明から満州人国家の清へと変わる混乱期に突入する。この頃、明の殘党勢力の鄧成功は台湾に逃れ、4度にわたり日本に対して救援要請を行っていた。鄧成功の母親は長崎出身の日本人であったため、母親の母国の日本を頼り、救援要請を出したのだ。しかし、江戸幕府はこの要請に応じることは無かった。ただし、江戸幕府は、清に接近することも無かったのである。当時、幕府は明朝に同情をする一方で、清朝に対する評価を定めていなかったことが背景にあるようだ。明朝と清朝に板挟みとなった江戸幕府は、国交を結ばずに清朝と付き合うことを選択するしか道が無かったのだろう。清朝とは「国交なき交易」関係を築いていくこととなる。

この「国交なき交易」関係は古くから政治制度、文化、宗教を中国から受容してきた日本にとって文化的、精神的自立を果たしていくきっかけとなった。中国から直接教わるのではなく、書物や人伝えに中国の文化などが伝来することにより、日本独自の文化や日本人としてのアイデンティティ形成に成功する形となった。直接教わらなかった事で日本人が考え伝わったものを試行錯誤して改良し、自分たちのものへと変質させ、そこからさら

に自分たちだけの文化などを誕生させたのが、中国と「国交なき交易」関係にあった江戸時代であったと考えられる。

国交無き交易関係

江戸時代、日本は「鎖国」という体制下にあった。つまり、外国とは交通を禁じ、貿易や外交を制限するという考え方である筈である。しかし、この間にあっても実際には「交易」を通じて海外から多大な影響を受けていた事実は非常に興味深い。我々が現代日本から江戸時代を振り返ると、この時代の日本の立ち位置として、政経分離という言葉がしっくりくる。政治的関係は薄いが経済的関係は強い結びつきがある、政冷経熱の関係でもあった。そして、この交易を通じた外国との微妙な関係が、日本が独自の道を生み出す重要な要因となっているのである。

江戸期より以前から長い間、日本は中国から大きな影響を受けてきた。「鎖国」という政策は、その中国からの「文化的・精神的自立」を醸成するための期間であったとも考えられる。距離的にも近い関係にある日本と中国の、その長い歴史が辿った関係性から日本が自国の「自覚と自立」を手に入れたとしたら、その背景には何があったのだろうか。

中国も明朝の時代では 1586 年まで海禁政策という鎖国体制を行っていた。その後、清朝の時代になると海禁政策を解除し、1684 年に展開令を制定し積極的に海外と交易を持っていくが、1757 年には対外貿易を広州一港に限定しており日本と似たような鎖国体制となっている。互いにこのような体制となっていたにもかかわらず交易は活発化していた。

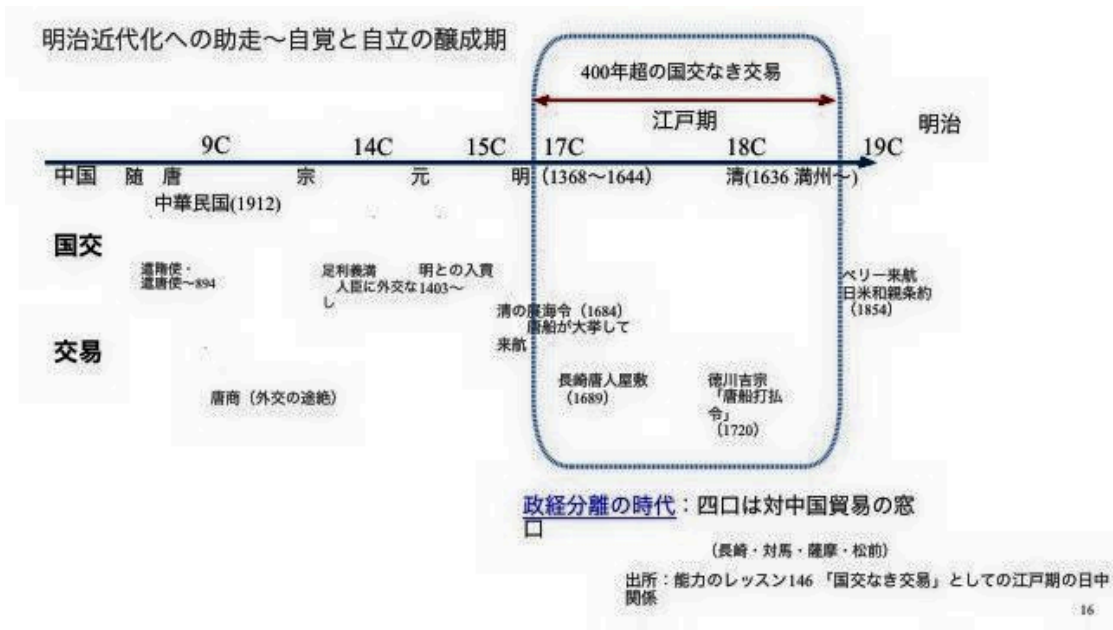
交易が活性化するには、旨みが必要である。日本と中国の貿易品の中心は、日本から中国へは 1765 年までは銀であった。その後国内の銀流出を抑える為に銅や倭物が輸出の中心となっていった。銀や銅は、日本での価値よりも中国国内や海外での価値のほうが圧倒的に高く、中国側には膨大な利益が上がった。また、倭物は中国国内において中国料理の高級食材であったため、輸入品として非常に魅力的であった。他方、中国からの日本への輸出品は絹や綿布、薬材、書籍など多岐にわたっている。日本の一番の旨みは、当時の日本よりも進んでいた中国の法や制度といった情報であっただろう。事実、徳川吉宗は明、清の法制度に習い国内に似た制度を導入していたり、朝鮮や明の儒学者を召抱えていたりする。当時の行政や法の書籍としても「大明会展」や「大清会展」といった書籍の和訳本が多く輸入されている。また、法や制度だけではなく、海外の情勢も鎖国中の日本にとっては重要な情報であった。幕府は、オランダ商館長からヨーロッパ情勢や日本までの航路での出来事を記すオランダ風説書を提出させていたが、中国から来た商船の船長にも唐人風説書を提出させていた。内容はオランダ風説書と似て、中国の国内情勢や航路での出来事が主であった。日中間交易においては、中国は物資面で、日本は情報の面で、大きな利益があったことが活発な交易が行われた理由なのであろう。互いの国が国の面子や過去の遺恨を脇において実利優先で付き合っていたからこそ、この時代の活発な交易が実現できたといえる。中国も日本もこの後、貿易を制限していくが、制限を越えた密貿易が行われ

ていくこととなる。しかし、中国も日本もこの密貿易については黙認していた。このことから実利優先で両国が付き合っていたらしいことが伺える。

互いに国の門を閉ざしつつ、一方で貿易船が行き来すれば国家間の情報はやり取りが可能である。国交がないことは、何も交流が無かったということを意味しない。中国という大国は海の向こうに存在し、船でやって来る際には新しい文化、学問を運んでくる。伝えられるものから、日本は大国を意識し自らの位置を自覚せざるを得なかったであろう。江戸期の日本が、多大な影響を中国から受けながら自らの位置を確認したように、現在の日本の位置を確認するためには、日本から見た中国、アジア観だけによらない視点も必要である。ポイントは、鎖国下の日本と中国の結びつきであろう。国交はないが交易はあるという当時の非常に緩やかな関係は、中国という国が否応なしに隣国であることを感じさせるものであり、そのような情勢が日本の「自覚と自立」の環境を生み出したであろう。

江戸期を 800 年ほど遡る、隋・唐の時代は日本と中国との関係は、戦略的な国交を持つ関係であった。9 世紀の頃の日本は、遣隋使・遣唐使を派遣することによる国交維持を選択していたのだ。中国と対等に付き合い、互いの文化を取り入れることがはっきりとした目的であり、それに日本は成功していた。この時代に取り入れた仏教建築や平安文化は日本文化のベースとなり、今に伝わっている。しかし、この後、両国は正式な国交を持たないままに交易を続けるという、緩やかな関係に移行する。事実、明朝との国交が始まるまでは日本は正式な外交団を送ることがなく、従って国家間外交と認識できる関係を持たないでいた。室町幕府が遣明使を派遣し、国交と通商関係は実現することになるのは 1401 年である。足利義満が、洪武帝に使者を送るが「人臣に外交なし」とする明の方針により、「国王でもない陪臣」として 2 度も無視された後のことである。ただし、強固な中華思想から朝貢貿易を求める明朝の思惑通り、足利義満は貿易による実利を取るため、明皇帝に対して朝貢する形を取ったのだった。銀の混入した日本の銅が、そこから銀を抽出する技量のある明において高値で売れたことなどもあり、貿易による利益は多大であったと言われている。この、倭寇と

【江戸期の日中関係】



山本悌二郎『長崎の唐人貿易』（吉川弘文館 1995）横山宏章『長崎 唐人屋敷』（集英社 2011）「国交なき交易」としての江戸期の日中関係文中のポイント

区別するために勘合符を使った、勘合貿易と呼ばれる明との貿易は、明代後半、1500年代半ばまで続いた。そして今度は、その後、明治期に国交を樹立するまで、日本は中国と外交関係を結ぶことはないのである。

日本は江戸期に鎖国をしていた。しかし、アジアの大国であり、地理的に近い国でもある中国との関係が、「国交なき交易関係」であり続けたのは、江戸期に留まらない。歴史的に、両国は正式な国交を結ぶことを避けていたとも考えられる。国交のあった時期の関係も、その本質は朝貢関係だという史実を思い起こせば、対等な日中外交関係の樹立が歴史的に見て容易ではないことにも頷けるのである。

日中食文化交流

交易が相手国の文化に様々な形で影響を与えることは周知の事実であろう。芸術や建築、宗教、国の体制など影響を受けるものは多岐にわたる。日中間の交易で影響を受けた様々な文化の中で、ここでは食文化に注目したい。

【対中交易図】

中国文化の流入と浸透



（出典：筆者作成）

上図のとおり、日本から中国へ渡ったものには、銀・原銅が代表であるが、中華料理を変えた食材もある。俵物三品（煎海鼠・乾鮑（干鮑）・干貝柱）と言われた俵物の多くは、江戸期に日本から中国に輸出されたものである。この俵物は中国料理の高級食材とされ使用された。現在では、中華料理の代表的な料理として挙げられる。対する日本でも、中国以上に食文化に多くの影響を受けてきた。お茶やお酒の製法、蒸し餃子、肉饅頭、ハムの製法なども日本に入って来た食文化で、今も日本に残るものである。

中国から本格的に日本に入ってきた食文化として卓袱料理が挙げられる。それまで日本の料理は、複数の皿に一人分ずつ取り分けられた料理が、膳に乗せられて提供される形式であった。大陸から渡ってきた卓袱料理は、大皿に載せた料理が順番に提供されるコース料理の形式である。



この卓袱料理について記した書籍も多数ある。例えば『八遷卓燕式記』1761年、『新撰会席しっぽく趣向帳』1771年、『普茶料理抄』1772年、『卓子調烹法』1778年、『卓子式』1784年、『新編異国料理』1861年などがある。書かれた書籍量からは、江戸時代の人々がまったく新しい食文化に大変興味関心を抱いていたこと、書かれた年代の幅広さからも、一時的ではなく、比較的長期にわたって興味関心を抱いていたことが伺える。この卓袱料

理は現代まで受け継がれ、今では卓袱料理は長崎県発祥の食文化といわれる。長崎県を中心に店があり現代では卓袱料理と京料理を融合させたものまで出現し、日本に溶け込んでいる。

鎖国体制下の日中関係から見えてくるもの

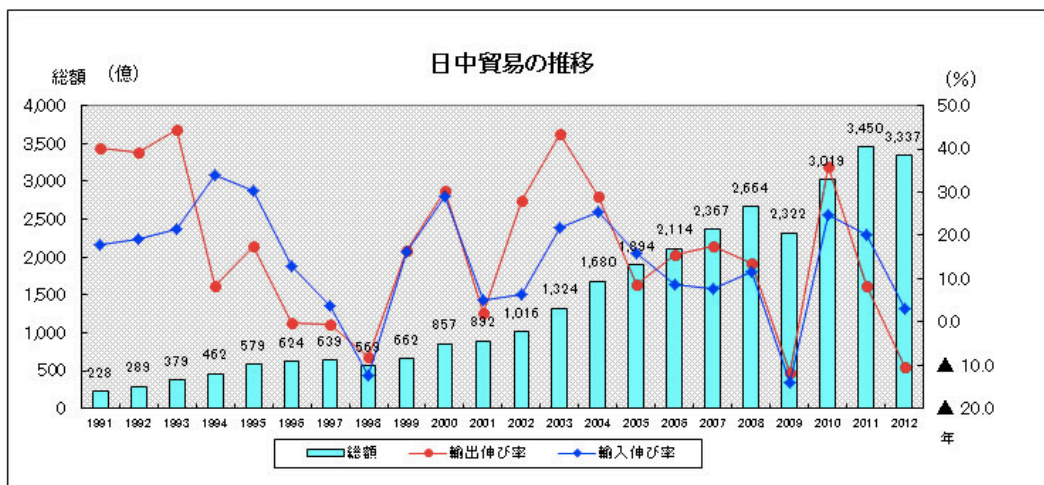
この江戸時代の日中関係は現在の日中関係と非常に酷似していると言えないか。政治関係は上手くいかないが経済的關係は深まっていく。単純に江戸時代と現代を比較することは出来ないが、この時代の両国の関係に現代の問題を解決するヒントを探したい。政治的に解決しようとするとう困難さが増す。この時代は政治的に日中関係を構築しようとはせず、両国が実利を取り民間交流により友好関係を築いている。現代でも民間から発信する友好関係の構築を模索するべきかもしれない。それが、現在の日中間の相互不信解消に繋がると考えることは可能であろう。

特に江戸時代の食文化交流からのアプローチは参考になる。日本と中国は、和食と中華という、それぞれに個性ある全く別の食文化をもった国同士であるが、それが過去に影響しあって作られたものであると考えると感慨深い。歴史を遡って、日中が交わった食文化をクローズアップしたり未来に向けて日中合作料理を作ってみたりすれば、なにかきっかけにはなるのではないだろうか。日本産の食品は今、放射能、中国産食品では毒物や有毒物質などの不安を抱えている。食の質の信頼回復から取り組んでいく必要もあるだろう。

「鎖国」政策は、日本が大きな影響を受けてきた中国からの「文化的・精神的自立」と言える。中国という国は海の向こうに確かに存在し、国を構えており、国交がなくとも、その情報は絶えず船を通してやって来る。そのような状況で、日本は自らの位置を自覚せざるを得なかった。政治的にも軍事的にも中国に掌握されたことのないという、緩やかな関係が、中国を手本としながら、日本という国の立ち位置を確認させ独自の路線へと導いた重要な要素であろう。仮に、中国から政治や軍事的に直接的な影響を受けていた場合、自覚と自立は難しかったかもしれない。

交易による国家交流という構図は、現在の日中関係に何処となく似ている。現在の日中関係は国交正常化以来最悪といわれるほど冷え込んでいる。しかし、依然として対中貿易は大きなウェイトを占め、今後もその規模は拡大するであろう。また、観光にあつては増加の一方である。2014年9月17日に日本政府観光局（JNTO）の発表した数値によると、日本を訪れる中国人観光客は最近でも増え続けている。

「中国は7月に続き8月も最も訪日旅行者数の多い市場となったほか、1月から8月の累計で154万2千人となり、年間の過去最高（2012年：142万5千人）を既に上回った。」（JNTO：2014年9月17日付プレスリリース 訪日外客数8月推計値）



(出典：財務省貿易統計よりジェトロ)

歴史認識の問題（価値観外交）における日中の相互不信や、領土問題で悪化しているとする様々なメディアの報道の裏で、人や文化の交流は脈々と続く。現代の日中の関係性は、江戸時代の政経分離という期間を経て、互いの文化を自国の文化に取り入れてきた歴史そのものであると見える。

2.2 中朝関係

朝鮮通信使の背景

朝鮮通信使が継続的に派遣されたのは数々の理由があるが中国方面の情勢の変化も理由に挙げられる。豊臣秀吉による朝鮮出兵の際に朝鮮を救ったのは明による援軍であった。この明の援軍は日本軍が平壤を制圧しようとしたときに朝鮮側からの援軍要請に応え、平壤を「朝鮮の地であるが、明の領内でもある。」として援軍を送り日本軍を押し返した。朝鮮は地理的に中国と接しており長年国家レベルの朝貢貿易と民間レベルの私的貿易を中国歴代王朝に対し続けてきた。そして、朝鮮は政治的にも経済的にも中華思想の影響を受け続け、藩属関係が不平等な朝貢関係により根深く維持されてきた。朝鮮は「小中華」と呼ばれる事大主義を抱き、明朝の時代には「天朝父母之報」と称するほどになっていた。それほど朝鮮は漢民族の中国王朝、明と接近していた。だからこそ衰退しつつあった明も朝鮮からの援軍要請に応えたのだ。

しかし、この朝鮮出兵の援軍を行ったことによりただでさえ衰え始めていた明朝の力はさらに衰えてしまった形となった。この明の衰退と同時期に頭角を現し始めたのは女真族を中心とし満州地域で活動していた後金であった。後金は明を討ち大陸進出を図っていた。

その際に障害となりうるのが朝鮮であった。明と強い藩属関係にあり後金が明へと攻撃を開始すれば朝鮮から横槍が入る可能性が非常に高い。そのため後金は朝鮮を先に攻めることとなった。この朝鮮への出兵は2回にわたり行われ朝鮮は敗れてしまう。後金は新たに清王朝と王朝名を改めて朝鮮と藩属関係を結んだ。

だが、朝鮮の中華思想は完全に根をおろしており清王朝と藩属関係を結んだ後も明側を支援する動きが行われ続けていく。朝鮮は清王朝の中枢の人間は漢民族でないため野蛮人であるという考えが中華思想の影響を受け持ち続けていた。朝鮮には、この時期に出来た言葉として「抗清援明」という言葉がある。字の通り清王朝に抗い明王朝を応援または援護していくという言葉である。

しかし、この考えの通りに清王朝に対抗して行こうとすると1つの問題が発生してしまう。朝鮮から見て北に清王朝が存在するが気がかりなのが南にある国である。日本である。清王朝に対抗しようとするれば清王朝と日本と2正面作戦を展開しなければならない。それは朝鮮としても避けたい状況であった。そのようなときに日本側から打診があったのが朝鮮通信使であった。清王朝に対抗するためには日本からの再びの侵攻の脅威を取り除いておかなければならなかった。だが、ここで素直に通信使を送らないところに中華思想が朝鮮に根ざしていた証拠になるのかもしれない。中華思想では漢民族の中国王朝がトップであり朝鮮はその一番弟子の弟分である。日本は朝鮮よりも格下の存在出るため日本の要求を素直に呑んでしまい朝鮮通信使を派遣してしまっは国として面子が立たないのである。そこで朝鮮は通信使の派遣に伴い日本の江戸幕府に2つの要求を行う。

1つ目が「犯陵人犯送」である。犯陵人犯送とは、豊臣秀吉の文禄の役、慶長の役のときに朝鮮の国王の墓を荒らした犯人を捕縛し朝鮮側に引き渡すこと。

2つ目が「家康致書」である。徳川家康が豊臣秀吉による朝鮮出兵に関して朝鮮に謝罪すること。

この2点を日本側へ要求してきたのである。そして、この過程で対馬の宗氏による国書偽造事件が発生する。北方に清王朝の脅威が存在するのにこのような幕府が到底呑めないような条件を提示するのはいかななものなのか。少なくとも1つ目は良いとしても大阪の陣にて豊臣氏を完全に滅ぼして家康に対して2つ目の要求は必要だったのだろうか。条件を提示するにしても相手の呑めるレベルの条件にしなければならないところであったであろう。もし仮に日本側が条件を呑まなかった場合は本格的に2正面作戦の展開を余儀なくされていたところである。逆にこの条件提示を良い方向に解釈した場合は日本側、特に対馬藩の朝鮮に対する経済的依存度、日本の朝鮮の必要性を正確に把握していたとも読み取れるが真意は不明である。結果的には対馬藩が偽造するという形で条件を日本側が呑み、朝鮮は偽造であると知りながらも国家の面子を保ち朝鮮通信使の派遣が達成されたので、結果的には朝鮮は中国本土のほうに集中することが出来た形となった。

朝鮮燕行使

朝鮮が清王朝に破れた 1673 年から朝鮮は清王朝の北京に外交使節団を派遣する。この外交使節団を朝鮮燕行使と呼んだ。朝鮮通信使は表面的には国家間の上下関係が存在しない対等な外交であるが、朝鮮燕行使は朝貢使節団である。明確に清王朝が上の立場である。この朝貢使節団は日清戦争により清王朝の冊封体制下から開放される 1895 年までの約 250 年間続けられた使節団である。その派遣回数は 500 回以上という数である。派遣され始めた当初は毎年 4 回、1644 年以降は年 1 回ずつ派遣されている。朝鮮通信使が江戸時代には 12 回の来日回数であるので圧倒的回数である。他の清朝の冊封を受けていた国々では琉球が 2 年に 1 回、タイ 3 年に 1 回、ベトナム 4 年に 1 回など他の冊封を受けていた国々と比べても多い数である。なぜここまで派遣回数が多いのか。朝鮮と北京が地理的に近かったというのもあるのだろうが、当時朝鮮には外国とのルートは日本への朝鮮通信使と中国への朝鮮燕行使、この 2 つのルートしか存在しなかった。そのため外国へ行くにはこのどちらかの使節に参加するしかなかった。朝鮮燕行使は毎年派遣される冬至使（年貢使）のほかに、必要に応じて謝恩使、奏請使、進賀使、問安使など名前を変えて派遣された。これだけの派遣回数、派遣の種類があったのだから朝鮮の人々は嬉々として外国の文化に触れる為に参加していったのかと思いきや違ったのである。

まず、この朝鮮燕行使は 1636 年に清王朝に朝鮮が敗れ派遣させられた使節団であり、もともとは北方の野蛮人の国家に朝貢に行かされる屈辱の使節団であった。そのため、これは朝鮮通信使でも同じことが起きたが使節団のメンバー選びで難儀することとなる。清王朝には自身の先祖や親子供を殺されている。そのような国家に朝貢に行きたい者などいず、誰も行こうとしなかった。このメンバー選定には 100 年近く難儀することとなる。

だが、その状況も変化していくこととなる。当時鎖国的な状況にあった朝鮮の人々としては外国とはどのような場所なのだろうという知的好奇心にくすぐられることとなる。外国に行くためには朝鮮燕行使か朝鮮通信使のどちらかに参加しなければならない。そこでどちらに参加するかであるが朝鮮通信使は日本に到着してから行動が厳しく制限される。しかし朝鮮燕行使は比較的自由的な行動が出来る。通信使と燕行使を比べた話がある。通信使では書店にて買い物をするにはおろか、書店に入ることも出来ない。自身の見たい場所にも自由にいけず、知識人との会合も監視が付いているほどであった。燕行使は書店めぐりの時間が設けられ事由に買い物をする事が出来た。観光も比較的自由に周ることが出来る。知識人との会合は監視などももちろん付かず知識人の自宅に泊まることさえ出来たという。燕行使は現代の観光ツアーのようである。ここまで違ってくると燕行使に参加したくなって来る。また、当初は清王朝への朝貢に抵抗感があったが、清王朝は明王朝時代の制度を使うことや明王朝時代のようなやり方を推進していった。周辺諸国や国内の漢民族に抵抗されないようにするため女真族では無く自分たちは漢民族であるということ国をあり方としていたのである。そのため朝鮮としても中華主義の中心が明王朝から清王朝へと変化していった。

このような状況から朝鮮燕行使自体の地位も上がっていくこととなる。それと対応して朝鮮通信使は朝鮮燕行使と比べられることが多く朝鮮通信使は朝鮮燕行使よりも下の地位であるとされ、朝鮮通信使は敬遠され朝鮮燕行使の人気はさらに高まる形となったのである。

朝鮮燕行使と朝鮮通信使の対比

	朝鮮燕行使	朝鮮通信使
派遣回数	500回以上	江戸期 12回
両国の関係	朝貢関係、上下の関係	対等な外交関係
朝鮮国内での地位	高い地位	燕行使よりも低い地位
現地での行動	比較的自由に行動可能	自由な行動不可
文化人との交流	自由な交流が可能	交流は可能だが監視付き

(出典：筆者作成)

第2章 朝鮮通信使の軌跡と文化交流 ーフィールドワークを通じた現代の視点から

今ではソウルから日光まで、航空機や鉄道、旅客船、自動車といった交通機関の発達によって、短時間でより安全な行程で行くことができる。しかし江戸期の朝鮮使節団の行程は、最長で漢陽（今のソウル）から日光までおよそ 3000 キロ、半年におよんだといわれている。こうして朝鮮通信使は様々な軌跡を残し、現代に連なる文化交流をもたらした。

本章では、これら「朝鮮通信使ゆかりの軌跡と文化交流」について先行研究とフィールドワークを通して叙述する。朝鮮使節団の足跡は今でも各所に残っている。しかしながら、ここでの「朝鮮通信使の軌跡」とは、まさにその足跡だけでなく、近年作られた朝鮮通信使を学ぶ上で重要な場所を紹介している。というのも朝鮮使節団が日本に来て見たであろう広い景色と視野を読者とともに辿りたいからである。ただ、ここでは主にアジアダイナミズム班が主にフィールドワークを行った地に限定して「朝鮮通信使の軌跡」と合わせて朝鮮通信使がもたらした文化交流を紹介する。誤解がないよう断っておくと、本章は決して歴史を無視するものではなく、現代の視点から歴史を紐解くことを目指している。

アジアダイナミズム班は朝鮮通信使と関係が深い 23 市ゆかりの地 62 カ所（57 頁「朝鮮通信使ゆかりの地一覧」参照）の中から、対馬、下蒲刈、鞆の浦、（大阪、）京都、近江八幡、高月、静岡、そして日光でフィールドワークを行った。ゆえに、これらの地を中心に、朝鮮通信使が辿ってきた順に説明する。そうすることによって、読者の方々に朝鮮通信使が長い道りを辿る様子も、江戸期の日本にいた人々が彼らを出迎え、あるいは拝見した様子をより容易に想像できるような知となるのではないかと考えたからである。

また、本章での説明で心がけたこととして、読者がこれらの地を訪問したときに、ここでの内容によって得たその土地へのイメージと、実際に訪問して見たものとの間に差異が生じないように努力した。と同時に、とくに多摩大学とゆかりの深い東京都多摩市と比較しながら、訪問をより楽しめるような基本的な情報を付した。論文の最後には、フィールドワークのスケジュールなどを添えてある。

1. 対馬、広島

アジアダイナミズム班夏期のフィールドワークとして2014年9月4日から7日までの4日間にわたり、歴史的に朝鮮通信使と非常に関係の深い長崎県の対馬、広島県の下蒲刈と鞆の浦を訪問した。

1.1 対馬

対馬、下蒲刈、鞆の浦のいずれの地も通信使が江戸へ向かう際に通る場所である。対馬は釜山から日本へ向かう際の中継地点であり、また平時における朝鮮側と日本との外交窓口であった。対馬は、日本で最も朝鮮半島に近い島で、一般社団法人対馬観光物産協会（以下、対馬観光物産協会）は「国境の島 対馬」と呼称している。

韓国から対馬までは約49.5キロメートル、対馬から九州本土までは約132キロメートルと、韓国のほうが約2.5倍近い。福岡県に最も近いにもかかわらず、長崎県に属している。その近さゆえに、主に明治維新まで対馬藩は半島側との外交や交流において先頭に立った。

島の面積は南北82キロ・東西18キロ、面積は約708平方キロメートル（属島ふくむ）で、沖縄本島と北方四島を除けば、佐渡島・奄美大島に次ぐ大きさ（対馬観光物産協会「対馬ってどんな島？」）で、国土交通省国土地理院によると東京都の約3分の1、多摩市の約33倍の面積をほこる。そしてシンガポールとほぼ同じ面積である（外務省「シンガポール共和国基礎データ」）。

意外な一面を有する対馬

しかし対馬の人口は約3万3000人で（2014年、対馬観光物産協会）、多摩市は約14万7000人、シンガポールは約540万人（外務省）と、島の大きさの割に人口が少ないことがわかる（外務省）。また、長崎県によると、県平均10パーセントと比べて過去20年で他の離島地域と同様に人口が約25パーセント減少している（長崎県「長崎県の離島における道路の成果指標」）。対馬に来たことがないひとは、日本的ではあるけれど異国風情のある島を想像するひともいるかもしれないが現在の対馬はそうではない。あるいは、海に囲まれた小さな島に古い街並みが残り、あまり道路が整備されていないところをイメージするひともいるかもしれない。

ところが対馬に足を踏み入れ、着いた際の最初の印象はごく普通の島で、本土よりも韓国に近いと言っても横田米軍基地周辺のようにアメリカナイズされた商店が軒を連ね、まるで異国の雰囲気があるようなことは対馬においてはなく、せいぜい看板がハングル併記といったところ。むしろ、自衛隊員が原付バイクで移動しているのが目に付いたとき、あらためて自衛隊の国境警備の基地が島に点在することを考えさせられる場所である。

また、対馬の厳原港から対馬空港までバスで、島の中心から北部まで車で移動すると、

対馬は日用品に事欠かないとても広い島であることがわかる。また、古い街並みもなく、本土でも見られる小さな漁港とあまり代わり映えがなかった。道路も険しいところはあってもあまり凸凹した道もなく比較的整備されている。

狭く、近くて遠い対馬

しかしこの島の耕地面積の狭さと朝鮮半島に近いという地理条件は確かである。まず、自分の肌で対馬と半島との近さを体感できるスポットとして韓国展望台がある。ここ韓国展望台は対馬の北端に位置し晴れた日には向こう側に釜山の街並みが見える。訪れた際も幸い晴天であり、うっすらと向こう側に島影が見えた。日本に住んでいて海を挟み向こう側に「外国」が見えることに、なぜか非常に不思議な感覚を抱いたが、それだけ近いのだという実感も得られる。

しかし、その韓国展望台には向こう側との「近さ」だけでなく「遠さ」を感じさせる歴史的出来事が記憶されている。「朝鮮国訳官使殉難之碑」のことである。この碑は 1703 年に朝鮮の訳官使（対馬藩が釜山から招聘した朝鮮の使い）を含む 108 人と対馬藩士 4 人が釜山から対馬に向かう中、対馬の鰐浦を目前に遭難し全員が亡くなった出来事を記している。1991 年に日韓友好の証として設置された碑石は、当時海を命がけで渡り亡くなった人がいることを後世に伝え、日韓の友好を願っている。

また、「狭さ」とは島の広さのことではない。島土の約 89%が山地で、農地に適した場所が極めて限られているということである（対馬観光物産協会）。関ヶ原の戦い後、対馬の宗氏が徳川家康に命じられて李王朝との国交回復へ向けた交渉に力を尽くしたのも頷けるほどであった。そしてその地理条件だけでなく、対馬には固有の歴史が豊富に存在し、それを守り、掘り起こすひとがいること、また韓国からの観光客も多く、市として観光に力を入れようとしていることもわかった。

観光地へ向けた取り組みと可能性

対馬観光物産協会は、「福岡市（125 万人、2009 年）と長崎市（44 万人、2009 年）、釜山（370 万人、2004 年）の間に位置し、長崎とは空路で、福岡とは空路・海路で、釜山とも海路で結ばれており、観光物産の振興と交流人口の拡大による島の活性化を目指しています」とホームページ上で述べている。たしかに好条件で韓国からの観光客は多く、2013 年には対馬の人口の 6 倍近くになる約 18 万人が対馬に来島した（阿比留、尾上、上水流ほか 2014: i 頁）。現代においてはセオル号事件のような悲劇はあったが船舶が長い道のを安全に航行できる技術が比較的確立されている。釜山と対馬を繋ぐフェリーターミナルには韓国人が多く、ここに限ってはまるで韓国にいるようだった。ただ、旧金石城庭園をはじめ復元を進めているが、観光目的で来るひとを外見的に満足させることは困難であろう。しかし対馬の歴史と日朝関係を学ぶのには最適な場所である。

対馬と江戸期の朝鮮通信使

対馬は、朝鮮半島との近さゆえに、古来より朝鮮半島との交流がある。長崎県によると、対馬には、この交流によって得た数多くの書物や、仏像、建造物、朝鮮式山城の金田城跡や古墳などの文化財が残っている（長崎県「対馬市のプロフィール」）。何より朝鮮通信使や宗家の歴史を筆頭に、それらを観光資源として重要視しているため、実際に島を周ってみると朝鮮に関連した歴史的建造物や石碑を多く目にすることができる。「朝鮮国訳官使殉難之碑」をはじめ、万松院や、旧金石城庭園、西山寺、そして対馬歴史民族資料館などである。

万松院は対馬藩主宗家の墓所であり日本三大墓所のうちのひとつで、山の中腹に木々に囲まれた墓所は荘厳な雰囲気醸し出している。墓所の入り口は 100 数十段ほどもある石造りの階段で、一番上まで到達するのになかなかの体力を要する。階段を上がりきるといくつもの墓石がそびえ立っていた。そのほかにも万松院には朝鮮王朝から寄贈された三具足も安置されている。しかし、三具足はガラスケースやカバーが掛けられることもなく埃まみれになっていた。朝鮮王朝からの寄贈の品というものは、文化的にも歴史的にも相当の価値がありそうなものだが、あまり大事にされているようには見えず、少し意外に感じるほどである。

そのほか、ゆかりの地として対馬滞在中の宿泊に利用した西山寺がある。このお寺は 18 世紀から明治期以前まで対馬藩の対朝鮮外交機関で、半島側との外交における外交文書の確認を行っていた場所である。また、通信使来訪の際には使節の宿泊の場所としても利用されていた。現在は宿坊として誰でも宿泊することができ、内部は改装され小奇麗な民宿といった佇まいになっている。さらに、対馬における江戸期の朝鮮半島とつながりの深い場所として、厳原港や比田勝港が挙げられよう。この二つの港は、古来より朝鮮との交易港で、対馬と博多、壱岐、五島列島をつなぐ港の一つである。

交通網が発達した現代でさえ東京から対馬へは少なからず苦勞が掛かることを考えると、いくら対馬が地理的に朝鮮と近いとはいっても、蒸気機関もない時代に朝鮮から日本へ船が往来することは大変な苦勞であったことが安易に想像できる。そんな中でやってきた通信使にとって日本本土への中継地点としての対馬と西山寺はひと時の安息の場所だったことであろう。

対馬の台所事情

対馬を訪れ感じることで、過去と現代の対馬の台所事情は非常に似ているのでは、という点であった。今まで対馬は近さと遠さが混在していると書いてきたが、年間の韓国旅行者数を見れば明らかなように現代的感覚で見れば韓国人にとって対馬という外国は確実に「近い」部類に入るだろう。

現在の対馬は漁業の衰退などにより主たる基幹産業がない状態で、そのため繰り返しになるが豊富な歴史遺産などを元に観光業に力を入れている。その主な顧客は本土との距離

より半島との距離の方が近いこともあり日本人ではなく韓国人である。対馬の観光業は現状では韓国の人によって支えられている面もあり、それについて島民の方の中には、本当は外国人ではなく本土の人に来て欲しいという声も耳にした。対馬に住む方々それぞれに喜びや、不満など様々な思いがあり、その中で朝鮮は切り離せない存在なのだと感じた。

現代の対馬がそのような状況の一方で、通信使外交を行っていた当時の対馬にとっても朝鮮は欠かせない存在であった。というのも、本での知識と訪れて改めて実感したことが、対馬は耕地面積が非常に限られているという点だ。車で移動していると、山岳地帯が多く平野が少なく常に山の中腹の狭い道を走っていた印象が残る。

耕せる面積が少ないということはよそに依存しなくてはならない弱みを内包することになる。そんな対馬にとって朝鮮との貿易で得る外貨は生き残る、またより豊かに暮らすためには欠かせないものだった。そのため対馬にとって朝鮮との外交を一手に引き受けることは、朝鮮外交の窓口としての立場により自分の身を守ることに繋がるのだらう。

対馬にとって、好きか嫌いかは別として朝鮮との関係は切っても切り離せないものだった。今も昔も対馬は日本の国境の最前線であり、古くは対馬藩が、現在は陸海空自衛隊と海上保安庁が基地を構える国防の最前線であるといえる。しかし一方では朝鮮に、または韓国に頼らざるおえない過去と現在の対馬の台所事情には通ずるものがあり、対馬の穏やかな海にも少しの緊張感を感じた。

現代の交流

現代の交流では、長崎県対馬市で毎年八月初旬に行われる「対馬厳原港まつり」において、「朝鮮通信使行列」が一つの目玉イベントになっている。それゆえ、「厳原港まつりーアリラン祭り」と朝鮮半島に因んだ名称が付けられていた。ところが、2013年、対馬市内の寺社から盗まれた仏像が韓国から返還されない問題が起き、「朝鮮通信使行列」は中止となった（朝日デジタル、「朝鮮通信使行列、中止に 対馬の祭り、仏像返還問題で」、2013年8月4日）。祭りを主催する振興会会長の山本博己氏も中止を支持した。ネットの電子掲示板にも、盛んに中止を支持する意見が表出した。この問題によって、お祭りの名称も、「厳原港まつりーアリラン祭り」から、「対馬厳原港まつり」に変更された。

この仏像問題がもつれ、「朝鮮通信使行列」はしばらく行われ不会再行かと思われたが、朝鮮通信使行列振興会は、同年5月15日夜の総会で14年度の実施を決めた。朝鮮通信使行列振興会の会長稲田充氏は、「市民から開催を要望する声も寄せられ、会員の反対もなかった。今年は胸を張ってできる」と話したと、伝えられている（読売新聞、「対馬の朝鮮通信使行列再開へ、仏像問題で昨年中止」、2014年5月16日）。ただ、お祭りの名称は、「対馬厳原港まつり」（実行委員会は対馬商工会議所厳原支所）のままとなっている。朝鮮通信使行列の実行委員会は市役所にあるとのこと。今年は、8月3日の本祭の日に行われる予定であったが、天候に恵まれず中止となった（読売新聞、「対馬で日韓交流イベント、朝鮮通信使行列は中止」、2014年8月4日）。

この朝鮮通信使行列再開のために、対馬のひとと韓国のひとと多くの時間をかけて準備したことであろう。しかしその中止を喜ぶ声というのがネット上にはある。誰が発しているかわからないこの「喜びの声」は何であろうか。たしかに韓国における「反日運動」への反応であるかもしれない。あるいは孤独感を埋めるためなのかもしれない。しかし若いひとたちが何らかの苛立ちをただ発散しているように思えてならない。このように朝鮮通信使をテーマにすると、地理、歴史、文化、社会のあり様を幅広い時間軸で考えさせられる。

1.2 松濤園

広島の下蒲刈と鞆の浦はどちらも蒸気機関を持たず風と潮、そして人を動力としていた当時の船の風待ち、潮待ちの要港として栄えた場所である。

松濤園の構成

対馬に9月5日まで滞在した後、一路広島へ向かい6日からは呉市下蒲刈町にある松濤園を訪れた。

下蒲刈は古くから瀬戸内海の海上交通の要所として栄えた町であり、江戸時代に来訪した朝鮮通信使が計12回のうち11回立ち寄った歴史ある街である。

松濤園はそれらの地域の歴史を伝えるための施設である。日本庭園が整備された館は瀬戸の海に面し、通信使来訪の歴史を伝えるための資料館「御馳走一番館」に始まり、西洋のランプから日本の古い灯火器を収集展示した「あかりの館」、柿右衛門様式の伊万里焼きが数多く展示された「陶磁器館」の3館で構成され、いずれの建物も伝統ある日本建築であり現存する各地の日本家屋を移築したものだ。

日本で最もおいしい

私たちアジア班が下蒲刈に到着したのは昼下がりだった。事前に松濤園内に御馳走一番館という建物があることは調べていたので、ここで食事を取る予定だったが、いざ訪れてみると御馳走一番館内には食事を済ませられる場所はないことが判明した。

なぜ食事処でないのに御馳走という単語が資料館の名前に使われているのか。この名前の由来は通信使の歴史と深く関係しており、実は通信使が江戸に到着し旅はどうだったかと聞かれた際「安芸下蒲刈御馳走一番（下蒲刈の御馳走が一番だった）」と、下蒲刈の食事について言及したといわれている。御馳走一番館という館名はそのような出来事に由来した言葉だったのだ。

当時の漢城から江戸までの旅は往復に最低でも5ヶ月はかかる。通信使たちが背負う重大な任務への責任とその遂行には、異国という土地柄もあり大変な苦勞を伴うものだったはずだ。そのなかでお腹がすくこと、食べ物をたべるという人間の基本的楽しみは旅の活

方に繋がっていたのではないかと感じる。

御馳走一番館内資料

御馳走一番館内には通信使に関する資料が多く保存、展示されていた。入り口すぐには当時の通信使が乗っていた朝鮮舟が実物の数分の一の大きさに復元、展示されていた。また、下蒲刈での通信使応接の際に出された料理の再現模型が展示してあり、その豪華さは資料で見るとよりも迫力がある。

そのほか私が印象に残ったこととして、当時の民衆が書き残した通信使の絵がある。当時の民衆も外国人の来訪には興味津々だったようで、多くの絵が書き残されていた。それらの中には、自分や友人に見せるための絵や、商売のために描かれたであろう絵など様々な種類がある。

特に印象深いのは、絵をよく観察すると、実は絵の情報に明らかな齟齬があるパターンである。本来なら乗っているはずのない地位の人物が位の違う船に乗っていたりする絵が存在するのだ。これは職員の方によれば、その場で書き写したのではなく自分が見聞きした船や人物、外の情報を混ぜ合わせ想像で書かれたものだという。それらの絵はどんな目的で描かれたのか、自分の思い出のためか、または自慢用の証拠として描かれたのかもしれない。いずれにせよ当時の人々の関心の高さが伺える事例だった。

長雁木

松濤園は瀬戸の海に面する場所に整備された施設だが、そのすぐ近くの海岸線には雁木と呼ばれる階段状に石が積み上げられている場所がある。雁木とは石を階段状に作ることで、船が潮の満ち引きに合わせて上下してもそのつど海面の高さに段を合わせて橋を掛けることで、水平に船から陸へ降りられるようにした上陸地点のことだ。

下蒲刈の長雁木はもともと 113m の長さがあり、現在は 55m が現存している。この雁木に下蒲刈へやってきた通信使一行が実際に上陸したのだ。

石はとても丈夫だ。木材と違いなかなか劣化することもなく形が残る。その長雁木を目の前にして、当時ここに通信使が訪れたのだと考えると教科書の中に入り込むような感覚になる。

1.3 鞆の浦

鞆の浦は広島県福山市に位置し、日本で最初の国立公園のひとつとして指定された、瀬戸内海国立公園に代表される景勝地などを有した港町である。瀬戸内海の中央に位置し、古くは潮待ち、風待ちの港として栄えていた歴史を持つ。蒸気



機関を持たない頃の船にとって鞆の浦は瀬戸の重要な海上交通の要所のひとつであり、朝鮮通信使や坂本竜馬など歴史の表舞台に登場する様々な人物や出来事とも縁が深い。また、現在でも江戸時代の建物が多く残る非常に風情のある町並みが人気の観光スポットとなっている。

鞆の浦の観光スポットの中でも、通信使ゆかりの地へのフィールドワークを計画した我々にとっての目玉は福禅寺対潮楼であった。

福禅寺とは平安時代の天曆4(950)年頃に建設されたと伝えられる真言宗の寺院である。また、福禅寺の本堂に隣接する対潮楼は、江戸時代の元禄3(1690)年頃に本堂が改築された際に新しく建てられた客殿で、通信使来訪の際は高官の迎賓館として利用され、学者などの知識人の交流の場として賑わった。



(筆者撮影)

対潮楼の座敷から望む海の眺めは非常に素晴らしく、1711年、朝鮮通信使の李邦彦は「日東第一形勝（朝鮮より東で一番美しい所）」と賞賛し、その後延享5(1748)年には洪啓禧が客殿を「対潮楼」と命名し、書を残した。

現在福禅寺は国の史跡に指定されており、300年の月日が流れた今も通信使一行が残した言葉は福禅寺の看板となっている。

実際に畳の上に腰を落ち着けて眺める景色は、写真で見るとはるかに雄大で、波ひとつない瀬戸の海は、関東圏に住む外海しか知らない者にとってはとても印象深いものだろう。

蒸気機関もない時代に風と潮の流れだけを頼りにソウルから対馬海峡を越え、はるばる日本へやってくる通信使一行にとって、楽ばかりでなかっただろう旅の道すがら対潮楼から望む瀬戸の内海は大きな癒しになったのではないだろうか。対潮楼で通信使の見た景色を通し、彼らの思いや残した言葉の意味を迫体験するよい機会となった。

2. 京都、滋賀

2.1 京都

京都は794年に日本の首都となってから、平清盛が1180年福原に遷都、1467年から1477年までの10年間にわたって続いた応仁の乱によって荒廃した。今の京都市の面積は、約827平方キロメートル、人口は約146万人で対馬市の約50倍の人口をほこる。しかも、太平洋戦争では戦火に見舞われず今でも新しい街とともに数多くの文化遺産を有し、情緒ある街並みである。応仁の乱の後、上京と下京の町人たちの努力と、織田信長、豊臣秀吉、徳川の治世に戦火に会うこともなく、戊辰戦争においても大きな打撃を受けなかったからであろう。

ここ京都も江戸期の朝鮮通信使とゆかりが深い。中でも印象深いのは、耳塚と朝鮮使節団との出会いである。耳塚は京都東山方向寺門前に朝鮮出兵で秀吉の軍によって戦功の証明として切り取られた朝鮮の軍民の鼻が埋められた小高い塚である。耳塚の前を通りがかった通信使の馬上の一人が思わず馬の手綱を右に引き、輿を止め険しい表情で見ている様を描いた「朝鮮通信使耳塚見物絵図」がある（辛 2002:76 頁）。1624年の副使の姜弘重は、耳塚の由来を聞き「聞き来たりて痛心に勝えず」と記したそうである（同:76 頁）。

2.2 近江八幡

近江八幡も朝鮮通信使ゆかりの地である。江戸期の朝鮮使節団は大津、守山を経てこの近江八幡へとたどり着いた。市の面積は約177平方キロメートルと対馬の4分の1の広さで、人口は約2.5倍の8万8千人である。今では京都駅から近江八幡駅まで電車で30分ぐらいあれば行くことができる。近江八幡駅から小幡町通りを歩くこと20分、小幡上筋の信号を右に曲がると、「近江商人の町並み」を散策することができる。しかしこの町並みを維持するのは町の人にとっても、地元の行政にとっても大変なことのようである。この境界のある喫茶店の店員によると、家を建てるのにも、リフォームをするのにも町の景観を維持するための厳しい条例があり、条例に沿っていないとよく家主と役人との間で言い争いになることもあるそうである。

ここ近江八幡に来たのは、朝鮮通信使とゆかりの深い「朝鮮人街道」や、近江八幡での朝鮮通信使の様子を学ぶことができる「歴史民俗資料館」と「旧伴家住宅」を見るためであった。朝鮮人街道は、近江八幡―安土町―能登川―彦根に入り、鳥居本町で再び中山道に合流するまでの長い40キロメートルの道である。近江八幡で「朝鮮人街道」は、一部分が「近江商人の町並み」の中に今でも「京街道門前通り」という名前で地元住民に親しまれながら残っている。1600年関ヶ原で勝利した徳川家康は、上洛の折金台寺（本願寺八幡別院）に宿泊している。また三代将軍家光も宿泊している。金台寺は「近江商人の町並み」

の中にある京街道沿いにあり、朝鮮通信使が来るたびに昼食所本陣とされた由緒あるお寺である。

2.3 高月

長浜市高月町は朝鮮通信使の行路にはない。彦根から琵琶湖湖岸を北へ約 240 メートル上ったところに高月町はある（同:83 頁）。長浜市の面積は対馬市より若干狭く琵琶湖を入れて約 680 平方キロメートル、人口は 12 万 4 千人と対馬市の約 4 倍である。ここ高月は 18 世紀前半に対馬藩の対朝鮮外交に貢献した雨森芳洲の出生地で、非常に長閑なところである。長閑ではあるけれど寂しさのない田園風景を楽しみながら歩くこと 20 分ぐらいのところに「雨森芳洲庵」という東アジアの交流ハウスがある。

途中「向源寺」に立ち寄り、国宝「十一面観音立像」拝観することをお勧めする。井上靖『星と祭』の小説にも登場する場所で、境内には井上靖の言葉が石碑に残っている。何より、そこへ行くと 1570 年織田信長と浅井長政の「姉川の戦い」によって寺は兵火に見舞われ、住職と住民たちが観音立像を土の中に埋めた歴史を知り、高月という町への魅力は形容しがたいものになる。雨森にとって、「姉川の戦い」という歴史はどんな意味を持っていたのだろうかと思わざるを得ない。

「雨森芳洲庵」は自然と共にあり人の心が届いた町並みの中に存在する。平日月曜日は休館のため、庭しか見ることができなかった。滋賀県と地元高月町と雨森地区が創建費 8 千万円を分担して建てたものである。

3. 静岡

3.1 静岡（シンポジウム）

我々アジア班の第一回目のフィールドワークとして、6月19日に静岡県静岡市を訪問した。目的としたシンポジウムは、静岡商工会議所、大韓民国駐横浜総領事館、静岡県日韓親善協会が主催し、徳川家康顕彰四百年記念事業として、秀吉の朝鮮出兵後、冷却した日本、朝鮮の関係を修復した家康公を顕彰するために行われたものである。

シンポジウムの内容としては「日韓における交流拡大と平和増進に果たした朝鮮通信使の役割」と題した基調講演の他、徳川宗家第18代当主の徳川 恒孝氏をはじめ通信使にゆかりのある4名のパネリスト、京都造形芸術大学 客員教授 仲尾宏 氏、比較文化学者・評論家 金両基 氏、静岡県立大学 名誉教授 岩崎鐵志 氏によるディスカッションも実施された。

そこで朝鮮通信使が果たした歴史的な役割は特筆されるものとして、漢詩文に代表される非常に高度な学術・文化交流の進展、世界史的にも稀な、江戸期 260 年に及ぶ友好「交隣関係」の歴史的価値であったと言える。また、今回の成果として、仲尾 宏氏をはじめとする朝鮮通信使に関する第一線の研究者の見解を聞くことができたこと、現在、朝鮮通信使に対する歴史的再評価がなされているということを理解出来たことである。

また、とりわけ興味深かったのは、NPO 法人「全国朝鮮通信使 ゆかりの地 連絡協議会」によるユネスコ世界記憶遺産、文化遺産への登録を目指し、目下、全国で活動を推進中であるということである。

シンポジウム内で行われた基調講演「日韓間における交流拡大と平和増進のための朝鮮通信使の役割」（講師、韓国江原大学 教授 孫承喆 氏）の骨子は以下の通りである。

- (1) 今日、「朝鮮通信使」が我々に与えてくれる歴史的メッセージ
- (2) 「朝鮮通信使」の始まり、倭寇による掠奪の時代から共存の時代へ
- (3) 江戸期「朝鮮通信使」の復活、朝鮮出兵-侵略の時代から友好の時代へ
- (4) 「朝鮮通信使」の日韓関係における歴史的意義
- (5) 今、改めて問われる誠信の友好「交隣関係」とは？

3.2 清見寺（静岡市清水区）

今回の静岡シンポジウムへの訪問により、朝鮮通信使の始まりと徳川家とりわけ徳川家康との関わりが深いことを我々は理解した。ここ静岡は徳川家とゆかりが深く、朝鮮通信使も何度も立ち寄り滞在した土地である。静岡シンポジウムへの参加に合わせ、静岡市内の朝鮮通信使ゆかりの史跡である清見寺を訪問した。

清見寺は臨済宗妙心寺派の寺院であり、山号は巨鼈山、正式には『巨鼈山 清見興国禅寺』

と称している。江戸時代には徳川氏の庇護を受けたほか、東海道の目の前にあることから、朝鮮通信使のみならず、琉球使の接待などもこの寺院で行われた。広島県福山市鞆町にある福禅寺、岡山県瀬戸内市牛窓町にある本蓮寺と共に、朝鮮通信使遺跡として現在、国の史跡に指定されている。また庭園も国の名勝に指定されているものである。清見寺には朝鮮通信使の遺した詩文が大量に残っており、方丈にはそれを木板に彫った懸板が掛けられている。また、境内の各所では、通信使が揮毫した扁額を見ることができる。

実際、第1回朝鮮通信使が立ち寄った際にも住職の漢詩に対する知識は深く、他国文化の受容、関心を持っていた。当時の文化交流は漢詩を通じた交流が盛んに行われていたことが随所から垣間見ることができる。つまり、漢詩という両国の共通の知識が、文化交流を活発化させたと言えるし、その影響から清見寺内には扁額や詩文など、貴重な遺物が数多く見ることができる。代表的なものとして、朝鮮通信使員の一人である玄徳潤 筆の「東海名區」の扁額である。「東海名區」とは、朝鮮半島の東の海にある日本において、最も景色の良い所という意味である。

朝鮮通信使と徳川家康との関わり

今回の総括として感想として感じたことは、江戸期の日朝交流は豊臣秀吉による文禄・慶長の役後、断交していた李氏朝鮮との両国関係を修復すべく、徳川幕府から朝鮮側に通信使の派遣を打診したことであり、そこで関係回復に尽力した徳川家康の存在である。今回、静岡市を訪問しシンポジウムへの参加と、古くから徳川家の庇護を受け、東海道の沿道に位置し文化交流の場として重要な意味を持つ清見寺を訪問したことで、徳川家とその初代将軍である家康との関わりを深く感じ取ることができた。

関係回復を意図した徳川幕府は、西日本の大名に先んじて朝鮮との関係を復活させるため、主として対馬藩に徳川幕府と李氏朝鮮の仲介を行わせた。これは対馬の土地は山が多く、耕作に向いておらず朝鮮との貿易なくては経済が窮乏することは明白であり、徳川幕府と正式な国交を結ぶことで貿易を復活させることも狙いの一つであった。国交回復を確実なものとするために、対馬藩は国書の偽造まで行ったことは他の章で触れた通りである。

一方朝鮮では、文禄・慶長の役が終わり、国内で日本の行った行為や李朝の対応に対する批判が高まると同時に、日本へ大量に連れ去られた朝鮮人捕虜の返還を求める気風が強くなっていった。こうした中、対馬藩の努力によって1607年（慶長12年）、江戸時代はじめての通信使が幕府に派遣され、6月29日（5月6日）、江戸にて将軍職を継いでいた秀忠に国書を奉呈し、帰路に駿府で徳川家康に謁見した。

ただし、このときから3回目までの名称は回答兼刷還使と呼ばれている。日本側からの国書による回答（文禄・慶長の役に対する謝罪）を求め、日本に連れ去られた儒家、陶工などの捕虜を、朝鮮へ連れ帰るのを目的とした使いであった。この求めに対し徳川幕府が国書を送った形跡はないが、上記のように対馬藩は国書の偽造を行ってまでして関係を修復しようとした。日本国内の朝鮮人捕虜のうち、儒家はほとんどが帰国した一方、陶工

の一部は日本にそのまま留まったとされる。これは当時の日本社会が技術を持った職人を高く評価していたのに比べ、李氏朝鮮では儒教思想による身分制において陶工は最下層の賤民に位置づけられていたことも背景にあると言われる。徳川家、徳川家康と朝鮮通信使との関わりについては、日光東照宮へのフィールドワークの中でも触れていくこととなった。

4. 日光

第6期アジアダイナミズム班最後のフィールドワークは、朝鮮通信使が3回（1636年、1643年、1655年）にわたり訪れた日光東照宮である。今回のフィールドワークは多摩学班が2012年度の論文で八王子千人同心を研究していたこともあり、インターゼミ始まって以来初となるアジア班と多摩学班による合同フィールドワークであった。10月4日土曜の夜に日光に到着し、前日泊をして翌日の5日の朝よりフィールドワークを開始した。

4.1 日光東照宮

日光東照宮ではガイドの土屋様のお話を聞きながら東照宮内を視察した。

そもそも日光東照宮は徳川家康の霊を東照大権現として祭る神社である。これは徳川家康の遺言、「自身の亡き後1年が経過した後にその遺骨を掘り起こし、日光山に神として祀ること」つまり家康を神格化させる目的で建てられたとても豪華で、壮大なものである。日光東照宮が建てられた当時は神仏習合であったため、五重の塔や神社などが境内にあるのが最大の特徴である。幕府を中心に総力を挙げて建てられた日光東照宮は、全国に散らばっていた各藩の藩主からそれぞれ特産品や当時最先端であった技術を使用して日本で始めて製作された青銅鳥居などが献上された。家康が眠っている日光東照宮は徳川幕府にとって内面的には彼らの精神的支柱であったと同時に、対外面では幕府の権威をみせるための格好のものであった。

最初に朝鮮通信使が訪れた1636年は、それまでの東照社が現在の東照宮の社殿に作り替えられた時であり、幕府を中心に総力を挙げて造った日光東照宮を通信使一行に見せたかった幕府側の強い思いがあったと想像が出来る。幕府の権威ともいえる日光東照宮を直接通信使一行に見せることは大変効率的且つ影響力をもつ方法であったと思う。通信使一行に言葉にできないほどの豪華さや大きさを直接目の当たりにさせる、まさに百聞は一見に如かず。現代のような写真もインターネットもない時代では、実際にそのものを見た人々の感想ほど有力で説得力のある情報はないだろう。

そして同時に、幕府は通信使に朝鮮出兵を指示した豊臣秀吉を討った徳川家康を神として祀っている幕府の態度をはっきりと示すことに成功したのではないだろうか。つまり、朝鮮王国が憎んでも憎み切れない豊臣秀吉、その仇を討った徳川家康を大切に思っているという態度が幕府と朝鮮王朝を強く、そして長く結びつけたのではないだろうか。

通信使使節団も幕府側の狙いに気付いていたようである。特に1回目の日光訪問時は国王の命に家康への参拝はなかった。そのため東照宮には訪れるが、丁度雪が降ってきたのを理由に参拝をせず下山する。その後「関白（家光）は一国の君長として、その祖父を仏寺の後ろにある荒山の仲に祭り少しも恥とせず、かえって隣国の三使臣に自慢しようとするが、その愚かで知識のなさには、責むるに足らざるものがあつた。」と書き記してい

たのである。参拝に訪れる態度を取ることで幕府側の面目を保ちつつ、国王の命令にはない参拝を回避し無用な衝突をさせたのだ。

朝鮮鐘

日光東照宮に入り、青銅鳥居をくぐるとすぐ陽明門に続く階段がある。その階段を上ると、陽明門前にある中庭に着く。その向かって右手に1643（寛永20）年に運ばれた朝鮮国王からの鐘が吊るされている。青銅で出来た鐘であることから「青銅の鐘」、また朝鮮国王から送られたので「朝鮮鐘」、朝鮮独自の製法で作られており、龍頭（鐘を吊るすための上部の突起）に虫食い穴のような小さな穴があるなど、日本で作られた鐘にはない特徴があることから「虫蝕の鐘」など、様々な名称がつけられている。

陽明門の前にあるだけあり、東照宮に訪れる多くの人々の目にとまるこの鐘だが、青銅自体は対馬のものである。朝鮮王朝は対馬から取り寄せた青銅でこの鐘と三具足を鑄造し、釜山にて受け取りにいった日本側の者に渡されたとされている。幕府に献上したのである。この鐘の側面には「朝鮮国王が東照宮におさめるために作らせたもの」という意味の文章が書かれている。

朝鮮王朝と江戸幕府の交流を話す上で必ず登場するこの朝鮮鐘であるが、文献で呼んでいるときに私が想像していたものより実物は大きく、ずしりとした重厚感があった。現代ほど便利な交通機関も発展してない当時、鐘を受け取った釜山からこの家康の眠る日光の地までこの鐘を運ぶのに一体どれほどの期間を有し、そしてどれだけの人々が運ぶのに携わったのであろうか。しかしこの鐘を見物している時はそんな些細な疑問すら感じなかったのだ。朝鮮鐘がその鐘楼に吊るされていることが運命で決まっていたかのような存在感があった。

だが、文献によると2回目に朝鮮通信使が日光に訪れた時、すでに渡してあったはずの鐘は鐘楼に吊るされていなかった。「石門の内の広い庭の東に、楼閣が一つ建てられており、此処に我が国から送った鐘を掛けるのだという。しかし、この時はまだ掛けられていなかった。」（原文「広庭之東、建一楼、将懸我国所送之鐘云、而時未懸」）

明治元年の第3回訪問時には、朝鮮鐘は立派に掛けられていた。

実際に足を運んでみて、この朝鮮鐘が陽明門前にあるというのは意味があるように思った。朝鮮鐘やオランダ燈籠を置く位置は幕府によって決められたようだ。陽明門前に向かって左側の中庭に置かれているオランダ燈籠と、その右側に掛けられている朝鮮鐘。私はこの2つと陽明門の関係がまるで見えないピラミットであるかのように感じた。中庭から陽明門まで数段の階段がある。陽明門＝幕府と見立てると、朝鮮とオランダが幕府を支える木の役割をしているように見えた。同時に反対に見方をすると、階段を上りきった陽明門の前から中庭を見下ろせるので、幕府が朝鮮、オランダ両国を上から見下ろしているよ



（筆者撮影）

うな印象があった。

三具足

三具足とは花瓶、獅子の形をした香炉、鶴と亀の形をした燭台のことを指す。徳川家康の墓「東照宮奥宮宝塔」の前に置かれている。朝鮮鐘と同じく、対馬から取り寄せた青銅で鑄造されたものであるが、本物は1812年（文化9年）の火災で焼失した。現在東照宮奥宮宝塔前に備えられている三具足は後に幕府神宝方で複製したものである。



(筆者撮影)

第2章の対馬フィールドワーク報告書において、対馬にも朝鮮王朝から寄贈された三具足があることは既に触れた。対馬では床にじかに置かれていたが、奥の院宝塔の前に置かれていた三具足は石の台の上に三具足が置かれていた。対馬と同じく特にカバーやガラスケースなどで覆われていなかったが、悠然と家康が眠る奥の院宝塔の前に置かれていた。

対馬ではただの置物にすぎない扱いがされている三具足だが、この日光にある三具足は下に敷かれている石の台とともに国の重要文化財に登録されている。それゆえに、同じ朝鮮王朝から寄進された対馬の三具足が同じように重要文化財に登録されておらず、床にじかに置きにされているのがにわかに信じがたい。

恐らく1812（文化9）年の火災で本物が焼失したにも関わらず、精巧に複製をしてまでも朝鮮王朝との友好の証ともいえる寄贈された品々を持ち続ける幕府側態度。この外交関係上必要なものであったのではないかと考える。そのことが重要文化財登録時にも評価されたのではないだろうか。

現在においても家康の前に置かれている。私たちは奥の院宝塔の周りを歩きながら遠目に三具足を見ることができた。天候のせいもあるが正直に言って、院宝塔の回りを囲む低い壁のぎりぎりまで近づかないと三具足がどのような形なのか分からなかった。豊臣秀吉による朝鮮出兵による国交断絶があったという歴史的な部分をしっかり分かっている人ではないと、あそこに三具足が置かれているという重要さ、幕府と朝鮮王朝の間に友好関係が確かに当時あったという重要さがわからないのではないかと感じた。

八王子千人同心記念碑

八王子千人同心の功績を永く顕彰するとして昭和33年に建てられた碑。石碑の近くに八王子千人同心について書かれた標示があった。以下は全文

「日光火之番八王子千人同心顕彰乃燈（銘文）

日光は、千二百年前に開かれた、天下の霊場であります。日光廟が造営されてのち、承応元年（1652）幕府は武州（東京都）八王子の千人同心に日光火之番を命じました。千人同心は、遠い八王子から、交代でその任につき、父子あい伝えて、明治元年（1868）まで実に二百十余年に及びました。その間、寒暑を問わず、日夜警備につとめました。特に、貞享元年（1684）の大延焼や、文化九年（1812）の大楽院炎上などの際には、日光奉行に協力し、身を挺してよく守りぬきました。また、戊辰の役（1868）には、勤番頭石坂弥次右エ門は、帰郷ののち、日光より戦わずして引き上げた責任をとわれ、自刃しました。東照宮、輪王寺、二荒山神社の壮麗な殿堂は、こうして護持されたのであります。ここに、千人同心の功績を永く顕彰いたします。



昭和三十三年十月十七日建立

（筆者撮影）

題字 徳川家正 撰文 佐々木耕郎

書 菅原栄海 撰文 野口義造

この表示に乗っている千人同心頭石坂弥次右エ門は日光東照宮を救った人として有名な千人同心である。幕末、討伐を掲げ幕府の精神的支柱であった日光東照宮を焼き払おうとする板垣退助らに石坂は戦いもせず、東照宮をそのまま明け渡し焼き討ちの危機から救ったのである。

第1章で既に述べたが、八王子千人同心は幕府直属の足軽のことである。幕府のために力を尽くすのが千人同心の仕事であり、当時の士農工商という絶対的な身分制度があった時代において、半士半農という極めて稀な存在であった。

半士半農といっても、通常は農民として八王子で過ごし年貢を納める。幕府からの仕事を手伝う時だけ刀の携帯と武士としての身分を与えられるのである。それを考えると、幕府のために力を尽くすこと＝武士として振舞える数少ない機会であったはずである。幕府のためを思うならば通常は命がけで戦い抜き、東照宮を討伐派の手から救うことが最善であるように誰もが思う中、彼は仲間の犠牲を最小限にするために武力を使わなかったのである。

しかし、その石坂は戦わずに東照宮を明け渡したことについて仲間から糾弾され、八王子に戻ったときに自刃している。彼が活着している時には非難されたが、現代になって彼の功績が称えられたことが幸いである。

特定の地域での存在であったからなのか日本の歴史に表立って紹介されることのない八王子千人同心であるが、彼らはまさしく徳川幕府を影から支えていた真の縁の下の力持ちであった。

輪王寺三仏堂宝物殿

三仏堂の宝物殿見学では学芸員の佐々木様よりお話を伺うことができた。丁度通信使関係のものを展示していたため、貴重なものを見ることができた。朝鮮通信使に直接関係しているとされる展示物は、公式行事を行うために朝鮮王国から持参した楽器4点と仁祖に代わった子の李考宗 17代朝鮮国王から送られた額字である「朝鮮国王考宗親筆額字」、朝鮮通信使の参拝記録の写しである「朝鮮人参詣記録写」、そして「鳳凰宝相華唐草紋紗」。

また、千人同心頭で日光勤番に一番多く行ったとされる植田孟縉による著「日光山史」(1824年(文政7年)全10巻)の一部も展示されていた。

4.2 大猷院

大猷院は3代将軍徳川家光が祭られている場所である。この大猷院は家光の遺言に「祖父である家康を祭る日光東照宮より派手にしてはならない」と控えめに作られたという話だが、最初に足を踏み入れた時はどこにそのような配慮がしてあるものなのかと不思議に思ったぐらいとても立派なものであった。細かく見ると、境内の広さ、建造物の数は日光東照宮に比べて圧倒的に少ないことに気付く。また建物の中の装飾も東照宮に比べると派手さはそれほどなかった。建物の外観に関しては、東照宮のものと引けを取らないのではないかと思った。

朝鮮通信使は3回目の日光訪問の時に、大猷院を訪れている。この時、一行322人は朝鮮式の祭祀を行い、現在輪王寺三仏道宝物殿に保管されている「17代国王考宗筆額字」と祭文が奉じられた。朝鮮式の祭祀には朝鮮独自の楽器を使用するため、朝鮮の楽器が10種日光まで運ばれた。そのうち4点が現在輪王寺三仏道宝物殿に保管されており、また大猷院唐門前に置かれている銅燈籠もこの時に朝鮮から日本に送られたものである。

4.3 朝鮮通信使・今市客館跡碑(杉並木公園)

朝鮮通信使が日光まで参拝すると通信使一行が泊まった宿として有名なものに今市客館がある。今市客館は通信使のために新築され、大変豪華な客館であったといわれている。日光フィールドワーク最後の訪問地は、2007年に最初の通信使来日から400年を記念して建てられた朝鮮通信使・今市客館跡碑を訪れた。

石碑のある杉並木公園が広く、石碑を見つけるまで時間がかかったが、無事見つけることができた。碑の周りには碑を建てた経緯及び、朝鮮通信使とは何かが文章は日本語と韓国語で分かりやすく、そして簡潔に書かれていた。以下は日本語全文。

「江戸時代に徳川幕府の要請により、新将軍就任の慶賀のため、朝鮮国王が「信(よしみ)を通(かよわす)」善隣友好の使節「朝鮮通信使」を十二回派遣しました。

その内日光には初期の頃三度訪れております。

第一回目は、東照宮が現在の社殿に作り替えられた

寛永十三年（1636）

第二回目は

寛永二十年（1643）

第三回目は

明暦元年（1655）

通信使は、東照宮・大猷院に国王からの進物を贈り、
公式行事を行いました。



(筆者撮影)

この3回とも、将軍社参並みの扱いを受け、盛大な行列立てをして日光に参詣しており、幕府は通信使のためだけに、此の所に一万余両を掛け豪華な客館を新築し持て成しました。

そこで、今年江戸幕府に最初の通信使（慶長十二年 1607）が来日して四百年になるのを記念し、この歴史的経緯を永く後世に伝え、日韓両国民の更なる相互理解と友情を深めるため、日光市の協力の元、小平ユネスコ協会と地元歴史研究家、在日大韓国民団栃木県地方本部等はそれぞれ善隣友好を第一に考え、率直な意見を交え、ここに碑を印すこととなりました。

平成十九年（2007）十二月吉日

朝鮮通信使今市客館跡碑建立実行委員会」

400年も前に始まった朝鮮通信使。その後200年余りにわたり300人を超える大人数で日本に来日し、朝鮮の文化と交友を結んできた。お互いにそれぞれの国の内情を抱えつつも、最善を尽くし交友関係の維持に挑み続けてきた。今回、朝鮮通信使の功労を称えると同時に、日本と韓国の相互理解と友好を深めるために日韓様々な団体がこの石碑を建てるのに協力した。1つの目標を互いに協力し合うことで達成し、そして通信使とゆかりの深い杉並木道に沿った場所にこの朝鮮通信使・今市客館跡碑が建つことが出来たのである。

日韓の関係が冷えきっている現代の私たちであるが、わずか7年前この碑を建てた時のように1つの目標を相互協力することで相互理解につなげていきたい。特に「協力」をすすめるために互いが歩み寄る「相互理解」や相手を理解しようとする「姿勢」が、政治だけでなく個人レベルで1人でも多くの人が出来ればまた違った道が見えてくるのではないだろうか。

5. まとめ

対馬から日光までという朝鮮通信使が、対馬の西山寺にはじまり、日光東照宮まで、いかに様々なところを訪れたかがわかる。そして、現在こうしたゆかりの地を中心に、朝鮮通信使にまつわるイベントが行われている。2007年には、朝鮮通信使400周年を記念して、「朝鮮通信使再現行列」、日韓各地で記念行事が開催された（一覧表参照）。

最後に本研究でのフィールドワークを通して、少なくとも日本と朝鮮半島の近世から現代を学ぶ学徒には、ソウルから日光までのフィールドワークを勧めたい。朝鮮通信使は一つのテーマとなるであろう。多摩大学としてもそうしたプログラムがあってもいいのではと思う。

しかし朝鮮通信使が道中様々な文芸や景色を楽しんだように、朝鮮通信使を追ってもテーマに雁字搦めにならずに歴史の流れと景色を楽しむことがより幅広い理解を深められるであろう。また、大学生にとって望むらくはそうしたフィールドワークによって単位を得られるのを望むかもしれないが、この行程によって得られる実りというのは単位以上のものがある。

また、これら朝鮮通信使ゆかりの地から、2つの点について注目した。

- (1) 宗教的施設が、朝鮮通信使一行を歓待する場所としての重要な役割があったということ。寺院は朝鮮からの国賓をもてなすのに格好の場所となった。江戸期の政治と宗教の関係は、キリシタンへの弾圧はあったが互恵的な側面があったということである。
- (2) 幕府や藩にとって、朝鮮使節団の接遇は多大な財政負担であったが、新たな文化が生まれたのも事実であろう。

【朝鮮通信使ゆかりの地一覧】

釜山	草梁倭館跡（対馬藩の出先機関） 約條制札碑（釜山博物館内） 豆毛浦（倭館接地場所）
対馬	厳原（府中）、万松院、西山寺（以酌庵）
下関	赤間関、赤間神宮（阿弥陀寺→赤間宮→赤間神宮）、引接寺
上関	御茶屋跡、超泉寺、旧上関藩所
呉	松濤園
福山	福禅寺
瀬戸内	本蓮寺、御茶屋跡
たつの	室津海駅館（饗応料理復元、朝鮮人来朝図）
大阪	難波橋、尻無川（唐人濤）、九条島、竹林寺
京都	淀城址、大徳寺、本法寺、相国寺慈照院、本能寺、本國寺跡、唐人雁木、耳塚
近江八幡	朝鮮人街道、本願寺八幡別院、琵琶湖
彦根	宗安寺、大信寺、明性寺、蓮華寺、江国寺
大垣	桃源山全昌寺大誓院、竹島町（朝鮮山車）、十六町（豊年踊り）*大垣市郷土館

名古屋	名古屋東照宮、興正寺、崇覚寺、蓬左文庫
静岡・	清泉寺、善原寺、真珠院、牛欄寺、海岸寺、萬象寺、常円寺、龍潭寺
藤枝	大旅籠「柏屋」
清水	清見寺
三島	長円寺
小田原	大蓮寺、小田原唐人町
藤沢	藤沢宿
東京	皇居（旧江戸城）、東禅寺、浅草本願寺
日光	日光東照宮

【朝鮮通信使再現行列イベント一覧表】

順番	日付	地域	イベント名	行列人数	再現行列備考	情報源
1	4月15日	ソウル市	文化使節団漢陽大出発	170人(出発式)、50人(行列)	ソウル昌慶宮(チャンギョングン)明政殿(ミンジョンドン)で出発式。正使役:朴振(パク・ジン)朝鮮通信使国会議員連盟議員(ハンナラ党)、朝鮮国王役:中堅タレントのキム・ギソプ氏。仁寺洞(インサドン)で朝鮮通信使行列。	韓国・中央日報、NHK
2	5月5日	プサン市	朝鮮通信使平和の行列	2000人	通信使行列の他、日韓のお祭りパレードを含む。日本からも対馬市、山口県下関市、島根県浜田市、静岡市、長崎県、山口県といった自治体から160人が行列に参加	共同通信
3	5月19日	静岡市葵区	大御所四百年祭／朝鮮通信使400周年記念事業	330人	石川嘉延静岡県知事と正使役駐横浜韓国総領事館朴鍾吉(パク・ジョン Chol)総領事が国書交換。行列には韓国の大学生、公募の県民や県内の朝鮮学校生徒などが参加。	静岡市
4	5月20日	静岡市清水区	大御所四百年祭／朝鮮通信使400周年記念事業	280人	小嶋善吉静岡市長と正使役の在日本大韓国民団静岡県地方本部姜再慶(カン・チュエキョン)顧問が国書交換	静岡市
5	5月20日	福山市	福山ばら祭2007・ローズパレード	100人	福山祭委員会主催。市民有志や同市友好都市の韓国浦項(ポハン)市、在日本大韓国民団。正使役:徐榮振(ソヨンジン)駐広島韓国総領事。通信使船の花車。	山陽新聞
6	8月5日	対馬市	厳原港まつり対馬アリアン祭	400人	正使:第8回通信使正使・趙泰億(チョテオク)の9代目子孫・趙東鎬(チョドンホ)氏、宗対馬守役:江口正昭・県対馬地方局長、国書交換	読売新聞
7	8月25日	下関市	馬関まつり	340人	正使役:釜山市国際諮問大使鄭海文氏、長州藩主役:下関市江島潔市長、信書交換。「21世紀の日韓こども通信使2007」の韓国こども通信使の小中学生約80名、「挑戦!ゴールデンベル」出演の韓国側高校生45名が参加	読売新聞
8	9月29日	東京都千代田区	江戸天下祭	140人	二十三台の山車や神輿(みこし)、巡行全体6000人。	東京新聞
9	10月8日	彦根市	国宝・彦根城400年祭／日韓交流フェスタin彦根	200人	国宝・彦根城400年祭実行委主催。正使:呉榮煥・駐大阪大韓民国総領事、井伊家第18代当主の井伊岳夫さんと国書交換。	京都新聞
10	10月14日	長野市	善光寺・表参道祭り／本堂再建300年	130人	善光寺、民団長野県本部共催。民団長野県本部と青商のメンバー、日本人ボランティアが参加。正使:民団中央本部呉公太副団長、副使:梁聖根長野本部監察委員長	民団新聞
11	10月	ソウル市	日韓交流おまつり	160人	日韓交流おまつりには、日韓の62団体約1800人が参加。	毎日新聞

	20日					
12	10月21日	堺市	第34回「堺まつり」	220人	堺コンベンション協会主催。民団大阪・堺支部(呉時宗支団長)協賛。安土・桃山時代をおもわせる鉄砲隊を先頭に56団体が参加。農楽隊と通信使行列で220人。	堺観光コンベンション協会、民団新聞
13	10月21日	呉市下蒲刈	朝鮮通信使来日400周年記念再現行列	270人	地元住民約270人と韓国・富明情報産業高校の民族音楽演奏	毎日新聞
14	11月3日	京都市	朝鮮通信使京都再現行列	340人	民団京都府本部主催。正使役:呉栄煥・韓国大阪総領事、京都所司代役:二之湯智・参院議員(地元選出)。	読売新聞
15	11月10日	岡山市	日韓善隣友好フェスティバル in Okayama	200人	韓国の中学生や岡山、瀬戸内市民ら。正使役:李(リ)昌熙(チャンヒ)韓国慶尚南道政務副知事、徳川家将軍役:石井正弘知事とが国書交換	山陽新聞
16	11月11日	川越市	復活!唐人揃いー朝鮮通信使ー多文化共生・国際交流パレード	360人	種々の団体の行列の総計。	毎日新聞
17	11月11日	瀬戸内市牛窓	牛窓エーゲ海フェスティバル2007	170人	正使役:駐神戸大韓民国総領事館イ・ギョンファン総領事、瀬戸内市立岡脩二市長と国書交換。「唐子踊」(岡山県重要無形民俗文化財)が10/28、地元の疫(やく)神社に奉納(山陽新聞)	瀬戸内市

(出典) 社会実情データ、<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/3999.html> (2014年5月30日アクセス)

第3章 朝鮮通信使の近代的意味と現代的意義

1. 江戸期朝鮮通信使の活躍

江戸期 265 年にわたる長い平和の背景には、世界のパワーバランス中のアジア海禁政策下で、中国冊封体制からの日本の離脱とキリスト教をはじめとするヨーロッパ文明からの離脱とともに、平和の礎となった思想としての儒教があった（上垣外 2000）といわれる。

日朝の共通利益である国家の平和と安定のため、本稿の主役である「朝鮮通信使」という朝鮮からの外交使節団が具現化される。外交活動のみならず庶民間でも活発な文化交流がなされた。こうした中で、両国の思惑を優秀な「グローバル・コーディネーター」として歴史の黒子役として取り纏め、両国の長い平和に大きく貢献した対馬藩の存在を忘れてはならない。

1.1 徳川前史の日朝

江戸期の「朝鮮通信使」には先駆けとなる時代があった。本論の江戸期・朝鮮通信使に触れる前に、室町期から安土桃山期の日朝両国の外交使節が平和交流に努めてきた歴史を概観してみたい。

15 世紀に室町幕府と朝鮮王朝は、外交使節の相互交換による交隣外交が展開され、対馬藩は両国政府の交流の仲介役としてその役割を果たした。この時代に登場する「李藝」（朝鮮王朝前期の外交官）は、江戸期の朝鮮通信使のさきがけとして、中世の日朝外交史上注目される人物である。足利将軍との交渉や倭寇対策などで多くの功績を残し、韓国政府より 2005 年文化人物、2010 年外交人物に選定される一方、日本においても、2005 年に通信使李芸の功績碑が対馬市円通寺に完成され、両国を通して時代の人として関心を集めている。長い歴史の中で静かに両国の友好の輪は育まれている（嶋村 2010）。

他方、16 世紀、豊臣秀吉の朝鮮出兵は、朝鮮や中国侵略を企図し、統一国家の野望を目論んだ無謀な戦として知られる。朝鮮全域で放火、殺戮、略奪が繰り返され、拉致や耳塚に象徴される行為は、朝鮮人民に「万世不忘之讐」として語り伝えられる。同時に日本軍 15 万のうち 5 万人の兵が戦死・飢餓・疾病等によって人命を失っている。

こうした史実を明治期以降の政府は、戦争拡大とともに豊臣秀吉を英雄として祭り上げて人気を作り上げる。秀吉の侵略戦争を美化して排外思想に結び付けるためである。近代に入って急速に作られた英雄・秀吉に対して、逆に家康は陰性なものとして位置づけられる。秀吉と家康の人物評価は、朝鮮と日本で決定的に異なり、両国の複雑によじれた関係の一つの現れとなっている。

1.2 徳川日本の外交戦略

「外交は内政の延長線」と言われる。秀吉の朝鮮侵略後、短期間に日朝国交回復を実現し背景には、日朝双方の内政の「共通利益」（国家の平和と安定）が合致したことに因る。

歴史の表舞台では、朝鮮通信使を友好の騎手又は誠信外交の鑑と形容しながら和解ムードを演出する。しかし、それはあくまでも隠れ蓑としての表現であり、内実、内政の延長として外交を利用する両国の心算（胸算用）があったことに注目すべきである（鄭 2006）。

明治期、ビスマルクは面談した岩倉使節団に、「世界は親睦礼儀をもって交わっているように見えるが、それは表面的なことで、内実は強弱相凌ぎ、大が小を侮るのが実情」（寺島 2014d）と国際情勢の内実を絶妙に描写している。

こうした中、徳川家康の外交戦略は、江戸幕府の権威誇示と交易に伴う利益と国際情報収集にあったと考えられる。中華文明及び欧州文明（キリスト教思想）の強国に対しては、日本が呑み込まれないよう一定の距離を置きつつも、外交の中心を朝鮮に定めて国際関係の「間合い」を計る戦略である。このような結果によって、徳川は国内外に権威を誇示しながら 260 年の国家の繁栄を享受することができたといえる。

また、東アジアに共通する「儒教文化」の視点を見逃すことができない。284 年の儒教の公式伝来以降、近世に入ると日本独自の発展を遂げ、日本人の道德意識や心のあり方に大きな影響を及ぼしていく。江戸時代の儒学・朱子学は、幕藩国家のイデオロギーとして官学となり、幕府の文教政策を司る地位を占める（68 頁「主な宗教比較」参照）。

ここで特筆すべきことは、江戸初期「人道主義・平和主義」の性格を持つ儒教・朱子学は、戦乱に明け暮れた武士の心を癒し、社会の安寧を貢献したことにある。

徳川幕府は、朝鮮との交際に際して、神国意識又は「日本書紀」的史観（三韓朝貢史観：古代の朝鮮三国は日本に朝貢した）を抑制（仲尾 1997）した。日本からの返書・応答文にも優越意識は影を潜め、むしろ儒教的名分論による互譲相敬の文言が連ねられている。こうした外交配慮のもとで通信外交は成り立ち、文人相互の交流にまで発展することができたといわれる。

また、儒教の「権威誇示」や「体面最優先」の性格においては、朝鮮通信使を通じて国内体制（天皇家、各藩等）を盤石にする権威誇示の面で必要な思想であった。さらに、年間の国家予算以上の莫大な予算を費やして国内の西半分を往復して江戸に入り、更に、家康を祀る日光東照宮を訪問させた意味合いもそこにあったと考えられる。

1.3 李氏朝鮮の外交戦略

李氏朝鮮が豊臣秀吉による朝鮮侵略直後、日本との国交再開を踏み切った背景には以下の 2 つの大きな要因があったと考えられる。

第 1 は、外的要因としての明と清への侵入防御策の視点である。秀吉侵略戦争への支援の後も明軍は居座り続け、蛮行を重ね朝鮮王朝を困らせた。また、北方満州の女真族（後

の清国)は、朝貢要請を拒否する朝鮮を攻め、王族の人質を差出す屈辱を与えた。

こうした事情の中、中国側に対し「日本と我々は一体である」と日本を防壁策として利用する戦略(三宅 1993)と「北虜南倭」の過去の歴史を踏まえた上での決断であったと考えられる。外朝鮮半島は、地政学的位置から北方勢力と南方勢力がぶつかる橋梁地帯であり、文化交流や善隣外交をいう前に、常に国家の安全を保つことが重要課題である。

また、江戸期の朝鮮通信使の全12回(1607年~1811年までの約200年間)のうち、第1~3回目の使節団は、「回答兼刷還使」(拉致者奪還等を目的)を使い、第4回目の使節団以降は、「通信使」(友好親善等を目的)という名称を使用している。

この突然の名称変更は、上述のとおり、北方の女真族(後の清)の侵略などに起因する北東アジアの変動に伴う朝鮮王朝の危機が背景にあった。大きな危機を感じた朝鮮政府は、泰平祝賀という名目により日本に通信使を派遣し、南方・日本との安定を図ろうとした。

第2は、内的要因としての儒教思想に基づく体面重視と前例主義の事情である。朝鮮側は、儒教文化の未熟な日本を啓蒙するとの考えの下、儒教思想に基づき外交を国内より優先し朝鮮通信使の派遣を続けた。不作による国庫税収入の急激な減少、疫病による死者続出の状況においても、国家の面目に関わる大事として、儒教国家としての体面を内政より優先した。

さらに、清朝から大搾取や辱めを受けながらも恭順の意を示し続けた背景には、朝鮮国内の「両班(やんばん)の特権階級制度」を維持目的があったといわれる(中西 2013)。なお、両班とは官吏貴族のことで、李氏王朝時代には、良民(両班、中人、常人)と賤民(奴婢、白丁)の身分階級があった。こうした国内の社会・政治秩序を維持するためには、社会全体に強固な儒教イデオロギーに基づく上下関係を作り出し、その上に地主・官僚エリートが支配する上下関係を維持する。そのためには、対外的な中国との上下関係を利用しなければならなかった。

1.4 日朝の窓「対馬藩」の知恵

日朝国境最前線の島・対馬は、日本本土よりも朝鮮半島に近い地理的位置(対馬・韓国間50キロ、対馬・九州間130キロの距離)にある。古くから対馬は、朝鮮との交易で生計を営んでおり、国境の海の平和が対馬の生命線であり、今日においても変わらない。人口3.4万人を年間18万人韓国人観光客が対馬を潤している。

日朝の思惑の狭間で、対馬藩が払い続けた努力は並大抵のものではなかった。数多くの無理難題をつきつけられる中で、日朝双方の文化的慣習や思惑等を勘案し、間合いを保ちながら要領よく外交の橋渡しを行って結果を出すことが唯一生き残る道であった。秀吉の朝鮮出兵命令時は、これまで馴染みの交易相手が一転敵方となり、しかも先陣として日本軍の道案内をしなければならなかった。その後、関ヶ原の戦いでは西軍(豊臣方)について敗軍となったが徳川家康に許された。

徳川幕府にとって対馬藩の存在意義は、幕府が国内支配に適合する形で、朝鮮との関係を実現させられるかどうかであった。対馬藩は、手段はともかく結果を果たし、幕府に「朝鮮のことは対馬をとおして」との信頼を得ることができた。

その後、対馬藩は朝鮮との交易窓口や朝鮮通信使の運營業務一切を引き受ける中で、富を蓄え、一時は「西国一の長者」と呼ばれるほど豊かな時代を迎えることにある。一行の通過に5時間要したとされる朝鮮通信使の行列の絢爛豪華な様子は、対馬藩の繁栄を象徴している。

また、日朝貿易は17世紀日本の対外貿易全体に枢要な位置を占めていた。対馬藩の貿易利潤は、最盛期には大阪の全人口を養うに足りる（当時の米価に換算）ものであったといわれている。徳川時代の日本経済が、朝鮮貿易という一要因抜きには成り立ちえなかったことを示している（トビ 1990）。

他方、繁栄の影の部分として特記されることは、藩の存亡をかけた「柳川一件」の国書偽造問題である。問題の根幹には、朝鮮王朝と徳川幕府との国交回復条件にあった。朝鮮が示した条件は、日本国から国書先出し（低い地位のから先出しする儀礼）と、朝鮮王家の墓荒らし罪人の送致であった。徳川幕府は国書先出儀礼を到底容認できる状況にないことや、本当の罪人を捕らえて問題を解決することが困難な中で、二重偽造を選択せざるをえなかった対馬藩の深い苦悩が滲む。

国書改ざんを巡るお家騒動は、1636年、将軍家光の前で家老柳川氏と対決させられた宗義成の勝利で幕を閉じた。お家騒動は、喧嘩両成敗に落ち着するのが通例であるが、この異例の判決は、対馬藩の置かれた外交上の特別な位置に対する幕府の格別な配慮を証左するものであった。

また、対馬藩は、朝鮮王朝に対する朝貢儀礼（朝鮮国王への肅拝儀礼の義務）を行っていた。これは朝鮮との交易継続が死活問題である対馬藩でなくては行えないものである事情を認識していた幕府は見て見ぬふりをする。日朝関係の安定保持のために対馬藩の存在は不可欠な立ち位置にあった所以である。

こうした困難を経て対馬藩は、朝鮮通信使に関する外交一切を取り仕切る役割（儀礼、接待、警備等）を果たす。韓国・釜山での出迎えから始まり、対馬から藩主宗氏が随行して江戸までの往來を警護・随行した。道中、何事もなく当たり前、事が起こると両国の関係に大きな影響を及ぼすだけでなく、大事業を任された対馬藩の存亡に大きく関わる。

しかも、道中の宿舎は風光明媚で格式の高い建物を選び、食事は食習慣の異なる食事（縁起の良い「七五三饗応料理」）や食材手配（当時日本人は食しなかった肉類、鯛・サザエ・クラゲ等の海鮮主体等）など企画・運営の業務全般について、数年前から綿密に計画を練り、国家事業を司る優秀な「グローバル・コーディネーター」として、対外交渉から滞在中のおもてなし全般に至る全行程を見事に取り仕切って見せたのが対馬藩であった。今日でいう国家間どうしの礼典を司る国際儀礼（プロトコール：外務省所管）の実務から警護（警察庁所管）、企画運営、関係機関との連絡調整（主催機関等）までを含んでいる。

明治維新後の日朝外交は、両国政府と対馬の体面と利害の合致点を見出せなくなる中で日朝間の外交は一元化され、対馬藩の役割は終焉を迎えることとなった。対馬の人々は「日朝関係で対馬が関与していたときはいつも平和であった。」と語る姿が印象深い。

1.5 対等使節「朝鮮通信使」と朝貢使節「朝鮮燕行使」の意味と意義

日朝間の対等関係にある「朝鮮通信使」と中朝間の主従関係にある「朝鮮燕行使」の実態を踏まえて地政学的視点（ゲオポリティカル）から整理をしてみたい。

朝鮮通信使の外交使節団は、正使（外務大臣級）を筆頭に、朝鮮使節 300～500 人（12 回合計 5,352 人、1 回平均 446 人）で構成され、随員の中には学者・文人・書家・画家など国内 27 分野から一流の人材を抜擢された一大文化使節団であった。

日本側の使節受入体制は、通信使の案内・警護として対馬藩から 800 人、道中の諸藩から 2000 人が対応したと記録が残っており、日朝総勢で 3500 名/回の一大行列であった。

日本の学者・文化人は、このような朝鮮通信使との国際文化交流を「終身の栄」とし、日本各地から使節団の泊まる宿に大勢詰めかけて、詩の応酬、書画の依頼、学問上の質疑等を盛んに行い、庶民の交流による文化交流で賑わった。

こうして朝鮮通信使は外交使節の面だけでなく、文化交流使節として日本の文明化を高める意味合いも非常に大きいものであった。オランダ商館長が参府の際に、日本人の耳目に入るのは、ヨーロッパ南海の奢侈品か嗜好品が主であったのに対して、朝鮮通信使との文化交流においては、朱子学・漢詩などの観念的学術や文学だけでなく、医学・暦学など実用的な学問も流入されている（仲尾 1997）。

こうした外交使節団を徳川幕府は、当時の国賓待遇として使節団 1 回につき 100 万両（約 558 億円、国家予算より大）という莫大な予算を投じ、国内の西半分を半年から 10 ヶ月かけて往復する庶民を巻き込んだ一大イベントを執り行った。1 回当たりの人足は 23.5 万人、駄馬 4 万頭の他、各藩の費用は別途であったと言われる。

これに対して、朝鮮王朝から中国・清の皇帝に派遣される朝貢使節団は、「朝鮮燕行使」と呼ばれ、合計で約 500 回（1637～1894 年までの約 250 年間）を数える。年平均 2 回の派遣であった（吉田 2009）。これは、日朝間の朝鮮通信使の合計 12 回と比べると約 40 倍も多い回数にもなり、東南アジア諸国との朝貢使節団と比べてもかなり多い。

こうした特別な関係は、地政学的な視点と歴史的視点から整理することができる。朝鮮半島は、その国体が整う以前から、中華文明の長い歴史の影響を大きく受けてきた。思想面での中華・儒教思想とともに、地理的に近接した国土は地政学的に見て他国とは比べられないほど依存度が大きい。政治・経済・文化などあらゆる面で離れられないこの関係は、こうした歪な中朝関係の実情としてうかがい知ることができる。

こうした日中朝の知的三角測量の視点から世界を捉えて見ると、朝鮮通信使を基軸とする日朝外交は、底流に相互認識の祖語や思惑への自己優越意識を持ちながらも、朝鮮燕行

使の「朝貢外交」とは異なり、前近代的儀礼に基づく「対等外交」を展開することの意味合いと意義が浮かび上がってくる。

他方、朝鮮側では、儒教思想と小中華意識の視点をもって対日交渉に望み、儀礼を整序する。中世以降の日本文化に対する無理解、日本文人知的レベルへの軽蔑感、商品経済の発達と消費文明は理解を超える異文化であり、時には嫌悪感を伴うものであったが、全体を通じて文化摩擦はほぼ抑制され、記録に留められることが多かったといわれている。

2. 朝鮮通信使が「近代」に与えた影響

近代は文明の衝突の時代であったといわれる。東アジアの近代においても、儒教文明と欧米文明の間での衝突が起こった。結果は周知のとおり、儒教文明の完敗であった。それから1世紀を経て、東アジアの儒教文明圏の諸国は、目覚ましい経済発展を成し遂げ、今日ではアジアダイナミズムの時代を射程に入れる時代の勢いとなって世界を席卷している。

2.1 日本近代史の意味

近代史の発端は、徳川の長い平和が西欧の衝撃（外圧）により覚醒させられ、徳川・明治日本は、強い危機意識を持つことから始まる。

1840 - 1842 年アヘン戦争での中国敗退の脅威を始めとする、欧米列強によるアジア地域への勢力拡張によって、日本は、日本植民地化への大きな危機意識を持つことによって大きく変わることとなる。それは、西欧の外圧と対外危機意識に支えられた日本国のナショナリズムが旧体制変革への原動力であった。

近代日本の国家目標は、「国家の独立維持」と「強化」であり、欧米列強に対抗し得る強国の建設でもあった。この基本的国家目標は、政府はもとより反政府勢力の間でも共通の国民課題として認識されていたため、他国の宗教間対立や民族紛争等の経験のような大きな国内の内乱に悩まされることなく、日本植民地化の危機を回避することができた。

その反面で、同時に、性急な近代化の副作用が増殖することによって、急速な強国化によって生じた国際的な摩擦や軋轢は、日本の国際的立場を次第に困難なものにしていった。欧米列強から日本は新しい危険な競争相手として警戒され、近隣諸国からは欧米流の帝国主義国家の出現として民族運動の矢面に立たされ、日本の国際的な孤立と戦争への道を準備することになる。

2.2 近代化と日中朝関係

明治維新以来、日本の対アジア外交の中心は朝鮮にあった。日本政府は、朝鮮が欧米列強、特にロシアの勢力下に入れば、日本の国家的独立も危うくなると恐れた。そこで、日本主導で朝鮮を独立させ、日本の影響下に置くことによって欧米列強に対抗しようと考えた。

1869（明治2）年、明治政府は、朝鮮王朝を江戸幕府（対馬藩の外交戦略）のような特別扱いをせず、西欧諸国並みの外交関係を迫ったため、前例を規範とする朝鮮王朝の反発を買うことになる。従来使用してきた朝鮮国王から与えられた印を使わなかったことや、中国の皇帝以外使うことを許されなかった文字を使用するなど、明治政府は従来慣行を大きく逸脱した行為を行ってしまう。

これに対して朝鮮王朝は、天皇の称号変更等の行為は対等儀礼の建前が崩壊することを意味するため、従来の外交形式を継続に固執して外交文書の受け取りを拒否し、日朝の断行状態となる。こうして日朝関係は悪化していく中、征韓論の高まりとともに明治政府は対馬の朝鮮外交権を取り上げ、外務省官僚を派遣して事態の收拾にあたらせた。こうして、17世紀以来続いてきた通信使外交体制下の二重構造のうち、対馬を媒介する日朝外交ルートは終焉を迎えることとなった。

一方で、近世中国においては、西洋社会から科学・技術の合理主義やキリスト教信仰の影響により、中国人の世界認識をある程度影響があったものの、中国人は、中国は文明の中心（中華思想）という自負心から、西洋より劣るという意識がなく、逆に、利ばかり求める人種とみなし、尊敬すべき対象として見ていなかった。このように、中華思想の固定観念から抜け出すことができなかつたため、アヘン戦争による敗退まで世界の現実を正確に捉えることができなかつた。

こうした東アジア情勢下において、明治政府は脱亜入欧の路線をひた走り、アジア諸国に対して西洋植民地と同じような振る舞いを行っていく。この時代の日本人指導者は、西洋の視点でしか世界を見て事を選択して判断をすることができなかつたようである。近代化日本は、目の前の利権に目を奪われて、真の意味での文化国家の建設を怠ったこと、アジアへの視点の欠如が、その後の時代の混迷を一層深めていくことに繋がっていくことになる。

2.3 歴史の内在的理解

日本近代史は、西欧諸国との比較において、日本の遅れ・歪み・不十分さ・封建的性格とともに、日本の侵略性が力説され、日本近代史をほとんど否定的に理解したり評価したりする傾向が主流であったように感じられる。先行した時代への否定政策が古今東西を問わず歴史の様々な個所で見受けられるからである。

現在、一般的な江戸時代観は、明治期以降に旧体制を否定するために作られたもの、すなわち、江戸期を鎖国の灰色の時代として否定する政策であったことを述べた。朝鮮と日本の友好のシンボル＝「朝鮮通信使は日陰の史実」として忘却されてきた事実を指摘することができる。我々は時代の状況を無視して今日的な価値により歴史を裁断する傾向を反省しなければならない。しかしながら、他方で、最近、時代状況を度外視した今日的価値を基準とする理解・評価への疑問視する存在もあつたようである。それぞれの時代に生きた人間の価値基準に基づいて、何を考え、何を目標に行動したかを歴史状況に即して理解（内在的理解）することが大切である（島海 2013）。

このように、日本近代史に関して欧米からの積極評価が見られる。非西欧社会において近代化に成功した数少ない例として積極的に日本を評価する見方もある。近代日本を遅れ・歪みとしてではなく、西洋の衝撃（外圧）に対して、日本が独自の歴史的・文化的条

件を踏まえ、異文化を摂取・吸収して近代化を進めていったことを重要視する文化的な相対主義史観は重要な視点である。

主な宗教比較

起源はB.C.10~8世紀に中国、中東、アフリカで人間が神や宗教を創造、死への超自然的不安や自然の猛威への恐怖が動機、宗教の本義は「エトス」(人間の行動を導く無意識/無意識に動かす行動様式)原理で、合理的世界の科学とは対岸関係の非合理的の世界(=宗教は信念の体系)。「畏敬の宗教」では死後の世界を考えるとそれに伴う行動的意。人の価値観や行動には宗教が多岐にわたっているため、宗教を数教にまとめた社会現象の解明(宗教社会学)は世界観を固める意味で大切。

形態	ユダヤ教 (1500万人/0.2%)	キリスト教 (22.5億人/33.4%)	イスラム教 (15億人/22.2%)	参考: 日本人の宗教観 (日本教)
形態	◎一神教 (絶対神ヤハウェ=唯一神)	◎一神教 (神God=愛の神)	◎一神教 (アッラー=寛大な神)	◎多神教 (宗教のカクテル)。「天皇教」は一神教
分類	啓蒙宗教 (旧約聖書)、集団教済	啓蒙宗教 (新約聖書)、個人教済	古典宗教 (コーラン)、個人教済	非啓蒙宗教、集団教済
時期、開祖	B.C.5世紀、ユダヤ人共通神話が基礎 (旧約聖書)。預言者 (アブラハム、モーゼ、イエス)	AD397年、新約聖書 (神と契約更改)。ユダヤ人キリストが自分の命を担保に神の許し(原罪)と愛を勝ち取る。預言者 (アブラハム、モーゼ、イエス)	◎104年、アラブの預言者ムハンマド、神の啓示を受け、最後の預言者 (十最後の審判の弁士)として宣教師開始。	◎仏教的雰囲気、神道的雰囲気(長い間、神仏習合)、近世以降は儒教的雰囲気(何となく混在。宗教たる独自の信念(行動様式)=日本教。
根本原理/重要教義	◎存在論 (神の存在)。 ◎戒律宗教 (613の厳格な戒律)。教義に平等思想はなく、神は絶対で正しい	◎「予定説」(誰が救済され、されぬかは神が決定) ◎「三位一体説」(神=神の子キリスト=精霊(魂))	◎神への絶対神性(六信と五行)。三位一体説を否定(イエスは預言者、神=アッラー=ただ一人) ◎ Sharia(神の法が社会の法)、O Umma(平等の共同体)概念、O 最後の預言者、O 偶像崇拝の全否定	◎神でなく人間中心の和の思想(「人間神後」(ます人間ありき)論理) ◎神仏習合が基本。神道と仏教を合わせて一つの宗教観。「神との契約」は日本人には無い思考。
(政治と宗教) (法律と宗教)	◎神と人間の契約は「片務契約」。神との契約により宗教が成り立っているため宗教=法律。	◎「政教分離」(政治権力と宗教的権威を分離) ◎「神前法」(神が先で後に神が強い神の命(法))	◎宗教の戒律=社会の規範=国家の法律が完全一致。種の契約は希薄 ◎平等な共同体ウマを現世に作る	◎明治政府は天皇を神とした天皇教(一神教)を考案 ◎徳川幕府の檀家制度により宗教が政治の手段として体制完成
(経済と宗教)	◎利子禁止(労働の対価でない)。キリスト教は異教徒なので利子をとることはかまわない(宗教法の例外)。	◎プロテスタント主義の倫理と資本主義の精神(行動的禁欲)、予定説。 ◎マタイ効果(成功の言はるまじ景観理論:マタイ伝)	◎利子は禁止 ◎マホメドは最後の預言者⇒改訂不可能なため、中世の伝統主義に反する立法は不可能	
その他の主な内容	◎ユダヤ民族一括契約 ◎ユダヤ教:カナン(ユダヤ)の永く所有権=神の約束の地 ◎特別待遇、排他性、◎死後の世界は考えない ◎偶像崇拝の禁止、◎隣人とユダヤ人	◎民族起源神と個人契約(イエスを媒介) ◎聖(無差別の愛)の宗教、◎戒律なし ◎原罪、死後世界、最後の審判あり ◎偶像崇拝禁止、◎隣人は信者(異教徒隣人でない)「自分にして欲しいことを人にする」(マタイ伝7章)	◎心中の信仰でなく行為。儀式と礼拝重視。偶像崇拝禁止 ◎6信(アッラー、天使、啓典、預言者、来世、天命)と5行(信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼) ◎シーア派(後継カリフはムハンマド血統)、スンニ派(教えを順守する人)	◎宗教伝来:儒教(284年)、仏教(552年)、景教(キリスト教)(738年/1949年ザビエル) ◎日本古来の「八百万の神」を崇拜(「古事記」) ◎遠く来たるカ「仏教や儒教の規範を取去り面目を相対化する)
形態	ヒンドウ教 (9億人/13.5%)	仏教 (8.8億/5.7%)	儒教	道教
分類	◎多神教	◎多神教	◎無神論的宗教	◎多神教
時期、開祖	◎自然発生的なもので宗派の集合体。 ◎「ラマ」教はヒンドウ教の初期形態、国民の85%信仰 (インド教)	◎非啓蒙宗教、個人教済	◎非啓蒙宗教、集団教済	◎非啓蒙宗教、個人教済
根本原理	◎時間超越、「ダルマ」(宇宙の法則、規範の意) ◎原典「ヴェーダ」(本義は「礼座」) ◎因果律(原因は結果を招き結果は原因に繋がる)	◎ブッダ (B.C.563?-483)、ヒンドウ教は仏教の母	◎黄河流域の共同体で発生した自然宗教。孔子 (B.C.550年)が大成。 ◎祖先崇拝、血縁者以外との区別(差別の道徳律)	◎老子、莊子、隋、唐の時代に完成(陰陽五行、神仙思想、不老長生、仏教繪巻を取り入れ)
(政治と宗教) (法律と宗教)	◎自己と宇宙の同一性。死により魂は神(ブラフマン=宇宙=神)に帰る ◎「我我一如」(自分と宇宙が一層になると永遠に幸せ=解脱。対立事象の究極的統合)。輪廻転生を回し究極目標の人生設計	◎空の論理。小教はこの世は無常無常、大乗は空の宇宙観。仏教の形而上学上の矛盾を超越し、空の概念を生成。空は有と無を超越した次元。 ◎「法前仏教」(法が第一で仏はその次)構造 ◎絶対的なものは「法(ダルマ(道徳法則))	◎天のイデオロギー(天を絶対化する自分を絶対化) ◎高感官察を作るための教義を与える宗教。「科學」の官僚制と官制の官制が存在(チェンク、アムト、ハラン)	◎無為自然(万物の根源は無であり、無の性格は自然)。 ◎道(宇宙と人生の根源的真理との一体) ◎家や友人と「本言」として道教を語った
その他の主な内容	◎宇宙には無も有もない。無限の時間の連鎖。 ◎「我我一如」(我=ブラフマン)「宇宙の根本原理/創造神(梵天)」と「我=アートルマン」(人間の本质、霊魂)の一体で解脱 ◎業:人間が生前に行った行爲の総体 ◎寛容性と吸収性(他の宗教教義を自らの教義へ)	◎「中道」主義(極端で孔極端ある「ラノスのとれた生活」) ◎我がの否定と人正道(欲望や愛着を絶つて苦から開放) ◎小乗仏教(個人修行による解脱)、釈迦のみ仏、仏は現在・過去・未来存在 ◎大乘仏教(全ての人が悟りを開き仏陀になれる)。新達以外も仏。現在は家存、過去未来は無常	◎現実社会の人間を脱ぎ、身を修め、家を治め、国を治めて家族主義を基礎とする家制国家の実現を目指す。 ◎「不可知論」(死後の世界を考えない)。この世の「道徳」と「積善」のみを論じる ◎「自分に欲しくないことを人にしない」(論語)	◎「怒みに報いるに徳を以て為す」(老子63章) ⇒「目には目を、歯には歯を」(旧約聖書)、「直をもって怒みに報い、徳をもって徳に報い」(論語)

(出典: 筆者作成)

終章

多摩大学インターゼミ（社会工学研究会）の一翼を担うアジアダイナミズム班は、これまで、日本の歴史・文化・価値等を深く掘り下げることにより、世界と日本の位置関係を再認識する共同研究に取り組んできた。同時に、インターゼミは、多摩大学及び多摩大学大学院の全学的な横断型課題解決ゼミという特質を活かして、寺島実郎学長及び各班複数の指導教員との重層的かつ複合的な人的ネットワークを構築し、多摩大学の発展型ゼミナールのビジネスモデルとして成長し続けている。

こうした中において、6年目を迎える平成 26（2014）年度のアジアダイナミズム班は、11名の学生（学部生6名、大学院生等5名）によるアクティブ・ラーニング（能動的な学修者の参加学習）を通じて互いに学び合いながら、共同論文の作成に向けて総合設計力を養ってきた。

この1年間を振り返ると、共同研究の課題解決に向けた道のりは、決して平坦ではなかったが、文献調査及びフィールドワーク調査の他、寺島実郎学長の定例講義や多くの教員等からの指摘・助言等によって、「時代認識」と「歴史観」を踏み固める思索の旅を満喫することができた。通信使のゆかりの街を歩き、「歴史の叡智」に学ぶ真の楽しさを体感した。総じて、本研究は新たな発見と再認識の実り多き1年であった。

朝鮮通信使が活躍した、江戸期 200年以上（1607年の第1回使節～1811年の第12回使節まで）にわたる平和の歴史は、これからの「日本のあり方」を考える上で、多くのヒントを示唆している。「歴史は現在・未来を照らす鏡であり、教訓となる」と言われるように、朝鮮通信使が残した軌跡は、現在及び未来にわたって日韓交流を考える上での手本となるであろう。

また、こうした朝鮮通信使は、人との交わりを大切にしながら、まちおこし、地域振興、そしてユネスコ世界記憶遺産登録に向けた日韓共同提案など、現在の日韓の国際交流を支える多様な活動を推進している。東アジアの座標軸を踏まえた朝鮮通信使から多くの教訓を学ぶ中で、歴史認識から生じる現在の日中韓の「相互不信」を共通利益の視点でもって「相互信頼」へと転換する一つの原動力となれば幸いである。

1. 今、生きている時代とは

論語に「和して同ぜず」（「君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」）という格言がある。これは、「人と協調はするが、道理や信念に外れてまで人に合わせる（主体性を失う、むやみに同調する）ことはしない」という意味である。

平和を希求する普遍的価値観の触合いができてこそ信頼関係が生まれ、国境を越えた知恵を生み出すことができる。権謀術数渦巻く人間社会において、現代は「人類は戦争の歴史」時代のほんの一部にすぎない。相互不信を世の常と考え、それを抑制してお互いの利益になることを模索する姿勢が「大人の知恵」というものではないだろうか。

1.1 雨森芳洲の先進思想（誠信の交わり）

近年、徳川幕藩体制下における東アジア世界との交流史の中で、一躍クローズアップされているのが、江戸期中期の対馬藩の儒学者・雨森芳洲(1668 - 1755 年)である。61歳の著『交隣提醒』の「互いに欺かず争わず、真実を以て交わることを誠信という」の理念は、芳洲の先進的な国際感覚を示し、現代の指針となる名言である。

1990（平成2）年、盧泰愚・韓国大統領（国賓来日）は天皇陛下主催の宮中晩餐会で「平和の時代も争いの時代も、人々の信（よしみ）が結び合えば、固い輪が築き上げられる」と演説し、芳洲の理論（「誠信の交わり」）を賞賛している。

誠信とは、表面的な仲良し関係ではなく誠心（誠の心＝実意）を知ることで互いの違いを理解し合い、それを尊重すれば自然に生まれてくる関係を指す。このことは日朝間の実態（外交や貿易の現場で起こっている事実）を把握し、時代の風潮を読んで分析し、最善の方策を探し出すことが肝要であることを説く。

また、芳洲は朝鮮風俗において「通信使一行は、日光や京都大仏の立派さには感動しない。それよりも日本人が気づいていない道中の列樹の整備が優れていることに感心する。異文化を尊重し、その民族が持っている歴史や風儀を理解してこそ、お互いが共生できる原点である」と述べている（上垣外 1989）。問題の実態を把握し、実意を知ることで、互いの違いを知り、理解することを説いている。事実、両国の文化の違いは、靴の置き方、食器の使い方、あぐらは日本の正座など行儀の良し悪しの違いからも理解できる。

『交隣提醒』の字義に関して、交隣とは「朝鮮国との交流」、提醒とは「注意を引き起こす、暗示を与える」の意である。現在置かれている日朝間の危機的状況に注意を喚起し、今後の施策に対する何らかの暗示を与えることを目的に、藩主及び対馬藩全体を対象に書かれている（雨森 2014）。このように、芳洲は外交の基本は誠信にあると考えており、国際関係においては平等互惠を中心とした普遍性のある世界観を持っていた。

1.2 新井白石の先進思想（西洋の視座）

新井白石（1657 - 1725）は、徳川家宣（6代）と家継（7代）の時代の政治顧問として、正徳の治と呼ばれる積極的な文治政治を展開し、綱紀肅正や儀礼整備等の改革を行ったことで世に知られている。

朝鮮通信使の待遇見直しにおいては、1711年朝鮮信使来聘式を定め、朝鮮通信使の待遇を簡素化して経費の節減を図るとともに、朝鮮からの国書に関しては、これまで将軍の名称「日本国大君」から国家威信を高めるため「日本国王」に改めさせ、将軍から加増の賞与を受けている。この王号問題を巡っては、雨宮芳洲から強い反論があったように、文書形式の問題を超えた国家の基本に係る論議であり、対外的にも配慮に欠く対応であった。その通信使は帰国後、朝鮮国王と日本の将軍を同格に扱った責任を問われ処罰されている。「王道」（先王の道德政治）を説く雨宮芳洲の姿勢に対して、「霸道」（権力政治志向）を推し進める役人・新井白石の思想の違いが背景にであったとの見方がある。

他方、白石はヨーロッパの宗教・道徳の価値を否定しながらも、西洋の知識・技術の優秀性を認め、江戸後期の洋学発展に寄与（『西洋紀聞』『采覧異言』）した。こうした観点から白石の『古史通』などでは、日本と中国は対等であると主張している。白石の残した記録の足跡は、徳川吉宗（1684 - 1751）（8代）時代において、明から清へと中国統治の動きに強い関心を示すとともに、明清の法制度や政治に並々ならない関心を払い学習する一因になったものと考えられる。

白石の世界観は、西洋の視点をもって世界を眺める視点は徳川時代における新しい世界への模索を実行した第一人者として知られる。西洋人の世界像の原点に帰り、西洋の視点から世界を捉え直そうとする意図を持っていた。新井白石の新たに把握した西洋的な世界像は、中国や朝鮮の人々の持つ文化的優越感に打ち勝つ武器になった（錢 2004）。

朝鮮通信使との論争中で、在来の世界像に立脚して議論する朝鮮人の知識人と比して、白石の論点は、新しい世界像に立って議論する日本の知識人のあり方の違いを象徴的に物語る一場面であった。この視点の違いは西洋を軸に世界を見る意識（日中韓の知的三角測量の視点）を持つか否かによっていた。

1.3 朝鮮通信使のユネスコ世界記憶遺産と現代的意義

2015年に日韓は国交正常化50周年を迎える。これまでの相互不信を乗り越えて日朝両国が友好関係修復へ向かう象徴の年となるか世界は注目している。

このような状況下で、朝鮮通信使を日韓共同でユネスコ（国際連合教育科学文化機関）記憶遺産に登録する取り組みが進められている。この取り組みへの先駆けとなったのが1978年から40年近く対馬市で毎年開催している「朝鮮通信使行列」（2013年仏像問題の中止を除く）の開催（朝鮮の民族衣装を着た日韓の約400人が練り歩く仮装行列の祭り）である。これまで忘れ去られていた歴史的資産「朝鮮通信使」の時代考証を再現しながら、

通信の交隣を基本とした「日韓新時代」を希求して両国の民間断代が主導して活動は進められている。

こうした地域住民の地道な活動が後押しとなり、2012年韓国・釜山文化財団からの提案を機に日本も呼応する形で、2016年のユネスコ世界記憶遺産登録申請、2017年登録へ向けての活動の歩みを進めている。日本では長崎県対馬市や静岡県など、韓国側では釜山がその活動の中心となっている。

日韓共同で遺産登録は、朝鮮通信使は日韓で200年間続いた平和の象徴である。日韓の友好関係の記憶を次世代に継承するだけでなく世界平和を志向した平和遺産であり、世界に向けて発信する意義は大きい。ユネスコ憲章前文では「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」の理念と合致する。

他方、暗い影を落としているのが、重要文化財の対馬の仏像盗難問題。ユネスコ登録推進と仏像返還拒否を巡るユネスコ条約違反の問題が存在する。この矛盾克服をどのように解決するか双方の知恵と歩み寄りが求められる。

【ユネスコ世界記憶遺産登録に向けた日韓の動き】

日 本 朝鮮通信使縁地連絡協議会（事務局：対馬市）	韓 国 財団法人 釜山文化財団
2012年10月「朝鮮通信使特別講演会～ユネスコ登録への道～」対馬で開催	2012年5月ユネスコ遺産登録の公式提案（釜山文化財団中心、韓国政府認識）
2012年12月縁地連臨時総会で世界遺産登録事業推進を決定	2012年10月世界記憶遺産登録のための国際シンポジウム開催（釜山市）
2013年1月「朝鮮通信使交流議員の会」（河村会長、谷川幹事長）へ陳情	2012年秋 韓国国立中央図書館から日本の国会図書館に共同申請協力要請 →断念
2013年3月文部科学省を訪問・協議（仏像盗難問題との関係指摘）：条約違反	議員連盟の鄭義和会長（国会議長）推進 2013年北朝鮮ミサイル等により推進遅れる
2013年11月日韓議員連盟合同総会共同声明で朝鮮通信使の世界遺産登録に向けた協力を確認	2013年11月韓国議員団が日本の交流議員の会を訪問し、推進を確認
2014年3月釜山文化財団を訪問（推進計画を協議し、合意） 2014年5～8月朝鮮通信使ユネスコ記憶遺産（日本推進部会設立、日本学術委員会設立、日韓共同推進会議開催）	2014年6月「朝鮮通信使ユネスコ記憶遺産登録韓国推進委員会」（釜山市）発足式開催
今後の活動予定 ○遺産登録リストの文化資料調査、○協議（外務省及び文科省）、○日韓国交正常化50周年記念事業（シンポジウム、ミュージカル、通信使行列の再現等）	

（出典：筆者作成）

問題解決への重要なキーワードが、「相互不信」から「相互信頼」への視点であると考えられる。文化的誤解や無理解が深刻な状態にある。表面上の形の類似に隠された文化的差異に対する無理解が相互不信の原因の一つ。その事実を認め、その差異を明らかにし、理解を深めることが急務である。

1998年、国賓として来日した金大中・韓国大統領（国賓）は国会演説で、「1500年の両国の歴史の中で、わずか50年にも満たない不幸な歴史のために、1500年にわたる交流と協力の歴史全体を無意味なものにするということは、実に愚かなことであり、またそれは長久な歴史を築いてきた両国の先祖に、そして子孫に対して恥ずかしく、かつ非難されるべきことではないか。」と語り人々の心に波紋を投げかけた。強弱・勝敗を争う尚武でなく、和と協調の「合気」の精神が求められている。

1.4 未来構築の方向性

未来構築として重要な考えの一つは、「戦略的相互依存」の思考である。本音と建て前を使い分け、ギブ・アンド・テイクの互惠平等を原則とする大人の関係が求められる。歴史の荒波にもまれて続けてきた韓国は、関係諸国と付かず離れずの間合いを保つ接し方の中で、日本との関係は政治文化の違いにより、政治的（公的）関係は親密なものに至っていない。双方の共通利益を見出し、関係を安定させる仕組みを作り出すことが大切である。

そのヒントとなるのが、江戸時代の朝鮮通信使における日朝両国の外交戦略である。これまで述べてきたように、日本側は「日本に対する朝貢」と見なす一方で、朝鮮側は「儒教文化の未熟な国を啓蒙する」と捉え、いわば戦略的に双方の勘違い（小倉紀蔵『法に優先するする道徳倫理』読売新聞記事 2014年）状態を続けることで絶妙な平和維持という間合いを保ってきた。

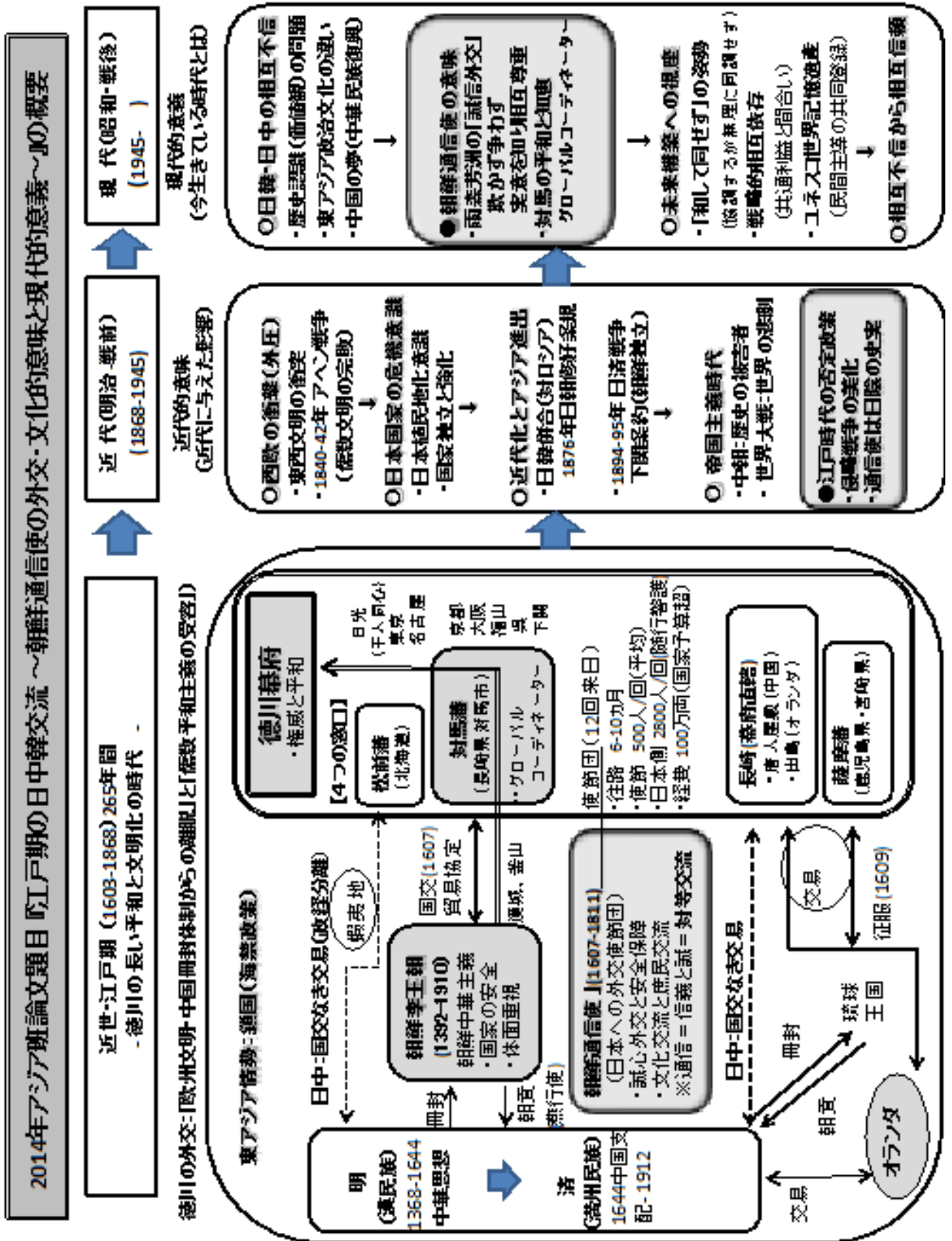
また、法律よりも道徳倫理を優先する隣国の思考と歴史教育に対し、日本は日中韓の歴史教養を通じ、国家と個人の価値観に関して再確認する視界が大切である。その際、国民の媒介者としてのメディアの役割と責任は大きい。

例えば、国際世論喚起の宣伝戦において、日本政府の広報文化外交予算は過去10年間毎年減少し続け196億円（平成25年度、外務省資料）となり、10年前の平成15年度の291億円に比べて33%減の実績となっている。一方、中国の広報予算は非公表であるが、中国誌『新世紀週刊』2009年3月によると、「（中国政府は）国家広報戦略を全面的に開始し、450億元（当時レートで約6075億円）を投じて中国の国際的なイメージを改善させる」と報じている。中国は世界的な情報宣伝の対象地域をEU（欧州で最も影響力のあるドイツ）に力を入れている様子。欧州連合（EU）外交当局者や識者との日中の歴史認識問題に関して、日本と欧州の認識との食い違いを感じるといった声が聞かれる。偏った日本のイメージが当事者国外で持たれ広められることの危険な現実を認識する必要がある。

これまで日中韓の国民による相互理解が極めて脆弱である理由のひとつに、両国民は相手国を自国のメディアを通してしか見ていないことがあげられる。このような状況を変えない限り、今後もお互いの認識は変わらない。世界の中には、戦争や社会不安・不和によって利益を享受する仕組み（組織）も存在すると考えれば、各国民は、当事者意識をもって多様な思考・考え方を理解し、多様な課題に向かい合う有権者・市民の力（言論外交）・ネットワークをもって平和を構築することが求められていることに我々は気づくべきである。

日本はこうした時代認識と世界観を見据えて、各国の思惑を包含する広さと大きさをもって受け止め、世界の安定と平和に寄与する日本であることを示すことが必要であると考ええる。中韓にすり寄ることではなく、中韓の向こうには世界がある。中韓を完全に納得させることは困難であっても、世界を納得させるための分析とその戦略は必要である。雨宮芳洲の誠信外交の戦略（物事の実態を把握し、実意を知る）である。中韓が異なる認識を持っていることは認めるしかなく、その間において、共通理解と共通利益を作る作業を加速させるべきである。そうした思考の中で、歴史の教訓を踏まえ、距離を置くべき国とは一定の距離を置き、連携すべき相手とは絆を強める姿勢である。

戦国の世を終わらせ、265年の長き平和を保ち続けた江戸期・徳川時代。江戸期は平和と文明化を実現した時代であった。長い平和の下で官僚制度が整備され、教育、文化が花開いて日本が一つの文化圏として成熟した。江戸時代は明治以降の日本の前提になった現代と地続きの時代であることから、普遍的なものとして朝鮮通信使の思想に学ぶことは今後も続くと思われる。



(出典: 筆者作成)

2. 編集後記

【三代 ひろな】

今回 1 年間朝鮮通信使に関して学び、過去の日本と朝鮮がいかにして平和を構築していったのか知ることができ、そこから現在不安定な日本と朝鮮半島の関係改善への糸口を見つけられることができたと考えます。歴史上の朝鮮通信使というものを通じて日韓の今後の平和を学ぶことができました。

【三好 瑛大】

日韓関係を語る時、近現代を軸に両国関係を捉えがちだった。しかし、両国には近代より遥かに長く安定的に付き合ってきた明治期以前の歴史があり、その裏には先人の知恵と、そこに生きた人々の文化、人の交わりが存在した。過去と現在の情勢を全く同列に考えることはできないと思うが、人と人とが交わる構造が変わらない以上、歴史には本質的に変化しない部分も多くあると感じる。昔も今も変わらない普遍的な部分にこそ、現代を考える上でとても大切な意味があるのではないかと感じた。

【水口 輝】

今回の朝鮮通信使を研究したことにより日韓関係が現在と背景が異なる状況ではありましたが大変良好な関係を築いていた時代があり、その良好な関係の礎となったものはどこの国の人とどこの国の人かの区別をして付き合うのではなく、人と人として付き合っていたからではないかと感じた。現代においても日本人と韓国人の前に人と人である事は変わらない。人と人との関係で付き合っていくことが必要なのではないだろうか。

【山口 夏実】

朝鮮通信使来日から 400 年の節目の年に日韓の善隣交友を第一に考え、更なる相互理解と友情を深めるために双方様々な団体の寄付により建てられた今市客館跡碑やユネスコ記憶遺産登録に向けての活動など、国レベルで関係が悪化していても同時に和平を願う人は確かにいます。相手を恐れるのではなく真摯に向き合う、この姿勢が民間レベルから高まることができれば、おのずと国レベルで関係が改善されていくのではないかと感じました。一国民としての前に、私自身が日韓問題にどう向き合っていくか、そして今後どのような行動をとっていくのかがとても重要になっていくのではないかと強く思いました。

【越田 辰宏】

人生観と世界観を大きく変えた 1 年でした。朝鮮通信使をテーマとした共同研究により、「時代認識を巡る歴史観と世界観」、「歴史を三角測量する視点」、「真実の中の現実を観る目」をじっくり養う機会に恵まれたことは、大いに幸運な年であったと総括できます。大学院生活の半分以上の思いと時間をインターゼミに投入しました。深みと温かみある多くの教員と大学（院）生との間にできた、知的・人的ネットワークは貴重な財産になりました。

【中村 晶子】

朝鮮通信使を迎えるために、日本は幕府、諸藩や沿道の村にも様々な負担が課せられました。しかし、実際に一行が来れば、異国の服装や音楽に魅了され、歓迎したようです。一方、通信使への参加を任命された朝鮮の人々の葛藤も相当のものでした。しかし、彼らもまた、日本を歩くうちに、景観や食事などに魅了されたと日記に残しています。外交的に様々な思惑があっても、民間のひとりひとりの思いが、国際交流の基礎を作り、今に至っているのだと感じました。

【和泉 昌宏】

参加のきっかけとしては、アジア班指導教員であり大学院科目の責任者である金先生の講座を昨年度から品川サテライトの大学院で受講しており、また一昨年のアジア研修視察（香港）へも参加させて頂いたことから、インターゼミへもメンバーとして加わりたと思いました。このゼミの特徴として教員、学部生、社会人および大学院生という違った世代、フィールドの方々が特定のテーマに1年間取り組むという点で他に例がなく、フィールドワークという実体験を主眼に置いた点に大きな強みがある活動だと感じています。また、自身の論文テーマもアジアに関連したテーマを扱っており、その知見を深める意味でも大変有意義な一年間でした。今年度でゼミ活動も6年目を迎えましたが、これ程活きた視野、蓄積された情報を持ちながらも学内においてまだ認知度が低いのは残念なことですし、特に大学院生の積極的な参加については今後の課題だと感じます。社会人院生もより履修、参加し易い工夫が更にあれば尚一層ゼミとして盛り上がっていくのではないのでしょうか。大学生による一活動という枠にとらわれず、学外との繋がり、連携を深め、「多摩の“志”塾」としてこのゼミから飛躍される人財が巣立つことを祈念し、関係者の皆様への御礼の言葉とさせていただきます。

【塚原 啓弘】

当時、海外とは異質なものであり、おそらく敵（なるもの）という思いが強かったのではなかったかと思われるが、実際に交流を進めていくと必ずしもそうではないのだということが分かったのではなかろうか。そういった民間交流は、今の時代にこそ、大切であると感じた。

【宮崎 真】

寺島実郎の論考から始まる本共同研究を通して、これまで不可解な明治維新からの日中朝関係の暗転を理解するには、江戸期の日中朝関係を精査すること、中でも三カ国の思想史・政治的方針と史料を結びつけ、そして様々な地理的条件を知る作業が重要であるということを感じた。

3. 謝辞

最後に、現在の国際情勢を考える際、東アジアという視点と歴史の軸を長くとり、世界を見ることの重要性を深く学んだ。歴史の知的三角測量や時代認識と世界観の重要性を説いていただいた寺島実郎学長はじめ、アジアダイナミズム班の指導教員である金美徳教授、バートル准教授、小林英夫准教授には、論文作成の書式、構成から時代を読み解く歴史観や人間観について教示いただいた。

フィールドワーク活動においては、対馬・広島調査では久恒啓一教授及び大森映子教授に合流していただき、多くの気づきと有益なアドバイスをいただいた。日光調査においては、多くの多摩学班の皆様と合同調査を行うことができた。この場を借りて関係者の皆様に深く感謝の意を表したい。

2015年1月16日

多摩大学インターゼミ 第6期アジアダイナミズム班一同

参考文献

1. 『幕末の八王子 - 西洋との接触 - 』（八王子市郷土資料館資料）
2. ハロルド・ニコライ（1965）『外交』（東京大学出版会）
3. マリウス・B・ジャンセン（1999）『日本と東アジアの隣人 - 過去から未来へ - 』（加藤幹雄 訳、岩波書店）
4. ロナルド・トビ（1990）『近代日本の国家形成と外交 (State and Diplomacy in Early Modern Japan)』（速水融、川勝平太、永積洋子 訳、創文社）
5. レン・フィッシャー（2012）『群れはなぜ同じ方向を目指すのか?～群知能と意思決定の科学』（松浦俊輔 訳、白揚社）
6. 阿比留伴次、尾上博一、上水流久彦、國分英俊、小島武博、齋藤弘征、杉原敏、永留史彦、中村八重、松原一征、村上和弘、村瀬達郎、山口華代（2014）『対馬の交隣』（交隣社出版企画）
7. 雨森芳洲（2014）『交隣提醒』（田代和生 校注、平凡社）
8. 植芝吉祥丸（2008）『合気道の心』（出版芸術社）
9. 上田正昭（1995）『朝鮮通信使 善隣と友好のみより』（明石書店）
10. 榎 泰邦（1999）『文化交流の時代へ』（丸善出版）
11. 大石学（2009）『江戸の外交戦略』（角川選書）
12. 大沼保昭（2000）『東亜の構想』（筑摩書房）
13. 上垣外憲一（1989）『雨森芳洲～元禄・享保の国際人』（中公書店）
14. 上垣外憲一（2000）『日本文化交流小史』（中公新書）
15. 金住則行（2011）『李芸 最初の朝鮮通信使』（河出書房新社）
16. 金谷治（1993）『中国思想を考える』（中公新書）
17. 賀陽美智子（1993）『対訳世界の教科書にみる日本 韓国編』（財国際教育情報センター）
18. 金美德（2012）『韓国企業だけが知っている日本企業「没落」の真実』（中経出版）
19. 河宇鳳（2008）『朝鮮王朝時代の世界観と日本認識』（明石書店）
20. 佐藤権司（2007）『朝鮮通信使・琉球使節の日光参り - 三使の日記から読む日光道中 - 』（随想舎）
21. 島海靖（2013）『もういちど読む山川日本近代史』（山川出版）
22. 嶋村初吉（2009）『朝鮮通信使の光と影』（梓書院）
23. 嶋村初吉（2010）『玄界灘を越えた朝鮮外交官 李芸』（明石書店）
24. 辛基秀（2002）『新版 朝鮮通信使往来—江戸時代 260 年の平和と友好』（明石書店）
25. 銭国紅（2004）『日本と中国における「西洋」の発見～19 世紀日中知識人の世界像の形成～』（山川出版）
26. 田代和生（1983）『書き換えられた国書 - 徳川・朝鮮外交の舞台裏』（中公新書）

27. 鄭章植 (2006) 『使行録に見る朝鮮通信使の日本観 江戸時代の日朝関係』(明石書店)
28. 寺島実郎 (2013) 『何のために働くのか 自分を創る生き方』(文春文庫)
29. 寺島実郎 (2014a) 『「朝鮮通信使」にみる江戸期の日朝関係 - 17世紀のオランダからの視界(その21)』脳力のレッスン、世界 2014年4月号 (岩波書店)
30. 寺島実郎 (2014b) 『「国交なき交易」としての江戸期の日中関係 - 17世紀のオランダからの視界(その22)』脳力のレッスン、世界 2014年6月号 (岩波書店)
31. 寺島実郎 (2014c) 『多摩の地域史が世界史に繋がる瞬間 - 17世紀オランダからの視界 (その23)』脳力のレッスン、世界 2014年8月号 (岩波書店)
32. 寺島実郎 (2014d) 『若き日本の肖像 - 1900年、欧州への旅』(新潮文庫)
33. 寺島実郎 (2014e) 『本居宣長とやまごころ - 17世紀オランダからの視界 (その26)』脳力のレッスン、世界 2014年12月号 (岩波書店)
34. 中尾宏 (1997) 『朝鮮通信使と徳川幕府』(明石書店)
35. 仲尾宏 (2006) 『朝鮮通信使をよみなおすー「鎖国」史観を越えて』(明石書店)
36. 仲尾宏 (2008) 『朝鮮通信使 江戸日本の誠信外交』(岩波新書)
37. 仲尾宏 (2011) 『朝鮮通信使の足跡一日朝関係史論一』(明石書店)
38. 中田易直 (1982) 『近世対外関係史論』(有信堂高文社)
39. 永留久恵 (2010) 『対馬国志～武門と興亡と対馬の交隣』(「対馬国志」刊行委員会)
40. 中西輝政 (2013) 『日中「二天」に仕える韓国の悲哀』Voice (PHP 研究所)
41. 中村栄孝 (1966) 『日本と朝鮮』(至文堂)
42. 西村毬子 (2000) 『日本見聞録にみる朝鮮通信使』(明石書店)
43. 久恒啓子 (1997) 『万葉集の庶民の歌』(短歌新聞社)
44. 三宅英利 (1993) 『近世アジアの日本と朝鮮半島』(朝日新聞)
45. 三宅英利 (2006) 『近世の日本と朝鮮』(講談社学術文庫)
46. 三宅英利 (1986) 『近世日朝関係史の研究』(文献出版)
47. 横田冬彦 (2009) 『天下泰平』(講談社学術文庫)
48. 吉田光男 (2009) 『北東アジアの歴史と朝鮮通信使』(NHK 出版)
49. 劉健輝編 (2011) 『前近代における東アジア三国の文化交流と表象ー朝鮮通信使と燕行使を中心に - 』(国際日本文化センター)
50. 李成茂 (2006a) 『朝鮮王朝史 (上)』(金容権 訳、日本評論社)
51. 李成茂 (2006b) 『朝鮮王朝史 (下)』(金容権 訳、日本評論社)
52. 林春日 (1992) 『朝鮮通信使史話』(雄山閣出版)

朝日新聞 (2013年4月18日) 「朝鮮通信使行列、中止に 対馬の祭り、仏像返還問題で」

<http://www.asahi.com/special/news/articles/SEB201304180004.html> (2014年7月1日)

一般社団法人対馬観光物産協会 「対馬ってどんな島？」

<http://www.tsushima-net.org/guide/guide1.php> (アクセス 2014年10月17)

外務省「シンガポール共和国基礎データ」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/singapore/data.html> (アクセス 2014 年 10 月 24 日)

外務省「日中関係の改善に向けた話合い」

http://www.mofa.go.jp/mofaj/a_o/c_m1/cn/page4_000789.html (アクセス 2014 年 12 月 10 日)

国土交通省国土地理院

<http://www.gsi.go.jp/KOKUJYOHO/MENCHO/201310/shikuchouson/tokyo.pdf> (アクセス 2014 年 10 月 17 日)

産経新聞 (2014 年 9 月 9 日)「尖閣国有化、11 日で 2 年 中国公船の侵入減少、漁船は急増」

<http://www.samkei.com/smp/politics/news/140909/pl1409090044-s.html> (アクセス 2014 年 12 月 10 日)

長崎県「長崎県の離島における道路の成果指標」

<http://www.pref.nagasaki.jp/shared/uploads/2014/03/1396005324.pdf>(アクセス 2014 年 10 月 17 日)

長崎県「対馬市のプロフィール http://www.city.tsushima.nagasaki.jp/web/profile/post_45.html
(アクセス 2014 年 10 月 20 日)

読売新聞 (2014 年 5 月 16 日)「対馬の朝鮮通信使行列再開へ、仏像問題で昨年中止」

<http://www.yomiuri.co.jp/kyushu/local/nagasaki/20140516-OYS1T50040.html> (アクセス 2014 年 10 月 24 日)

読売新聞 (2014 年 8 月 4 日)「対馬で日韓交流イベント、朝鮮通信使行列は中止」

<http://www.yomiuri.co.jp/kyushu/local/nagasaki/20140804-OYS1T50034.html> (アクセス 2014 年 10 月 24 日)

活動記録資料

【アジアダイナミズム班年間スケジュール】

回	月	日	議 題	文献調査	フィールドワー ク	備 考	議 事 録
1 2 3	4 月		<ul style="list-style-type: none"> ・担当の登録 (リーダー、会計、広報) ・発表 (学長ペーパー：朝 鮮通信使にみる江戸期の日 朝関係の感想) 			グループ分け、 自己紹介、幹事選 出、 論文作成の方向 性、 年間予定スケジ ュール	
4	5 月	10	<ul style="list-style-type: none"> ・発表 (朝鮮通信使第 5,6 章の感想) 	キーワード、目 次作成を念頭 に読む		大石学『江戸時代 の外交戦略』 <ul style="list-style-type: none"> ・第 5 章通信使外 交の展開 ・第 6 章通信使外 交の歴史的位 置 	
5		17	<ul style="list-style-type: none"> ・発表 (フィールドワーク 候補地) 	論文の方向性 <ul style="list-style-type: none"> ・江戸期の外交 戦略 (5 章、6 章キーワード) ・日朝外交 (朝 鮮通信使) ・日中外交 (国 交なし、貿易関 係) 	候補地 <ul style="list-style-type: none"> ・長崎県対馬市 ・広島県呉市下 蒲刈 (しもまが り) 島 ・広島県福山市 鞆の浦 (ともの うら) ・静岡県静岡市 ・箱根 	金教授から論文の 方向性 <ul style="list-style-type: none"> ・江戸時代の外交 戦略：主に日朝外 交(朝鮮通信使) を 通して日中外交を 捉える ⇒当時の関係、現 代的意義 (現代版 に読み替え：信頼、 対等)、日本の未来 を見据える (未来 の構築を考える) ・李藝 (りげいイ・ イエ)：朝鮮通信使 	

						のさきがけ	
6		24	<ul style="list-style-type: none"> ・発表（学長ペーパー：国交なき交易としての江戸期の日中関係の感想） ・通信使ルートマップ 	<p>○「日光東照宮」を目次の一つの章に入れる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学長から日光東照宮と朝鮮通信使（『日光史観』の研究）の話⇒次回担当者選出 ・多摩グループと共同研究（日光東照宮）、（八王子千人同心⇒担当：山口）。 <p>○タイトル：江戸期の外交戦略～日朝外交と日中外交～（仮案）</p>	<p>候補地追加</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日光東照宮 ・調査計画案作成（担当：和泉） ・朝鮮通史外交ルート 12 本、日中貿易ルートの絵図作成（担当：杉山） 	<p>【フィールドワーク（3班4か所訪問）】※</p> <p>①9/5-7 対馬、広島 8～9 万円</p> <p>②6/19 静岡市</p> <p>③日光東照宮（多摩学 G 奥山先生と共同）</p> <p>(④)8/11-12 箱根？ 夏合宿時</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参考文献の纏め（担当：杉山） ・通信使ルートマップ（12本）は引き続き検討（担当：杉山） 	
7		31	<ul style="list-style-type: none"> ・目次案の議論 ・発表（八王子千人同心） ・通信使行事/祭り ・その他（視察旅行プラン、前回発表の残り、王さん発表） 	<ul style="list-style-type: none"> ・目次案（担当：三代） ・八王子千人同心（担当：山口） ・通信使行事/祭り（担当：宮崎）⇒今日との繋がり ・発表（江戸期の日中関係）担当：馬 		<ul style="list-style-type: none"> ・5月末締切 研究費計画書提出 	

8	6 月	7	発表 発表資料の検討	発表：王（江戸 期の中朝関係）		研究目的（担当： 越田） PPT 資料作成（担 当：中村）	
9		14	発表資料の検討	・ PPT 資料内 容の確認（研究 目的、構成等） ・ プレゼン用 PPT 30-40 枚 ・ プレゼン発表 者：全員前へ出 て分担発表	<u>6/19 静岡市：清 見寺、シンポジ ウム</u> <u>（担当：杉山、 和泉）</u>	宿題： 各自の論 文まとめ・キーワ ード（PPT2 枚以 上）	
10		21	発表資料の最終確認 直前予行練習	発表資料：研究 テーマ、研究目 的、目次・各担 当論文、通信使 行程、FW 訪問 先、論文年間ス ケジュール、参 考文献		PT 資料取り纏 め：中村 各論文まとめ・キ ーワード（PPT）： 各自 論文スケジュール （紙媒体）：越田 FW（対馬、広島） 日程（紙媒体）：越 田 参考文献纏め：杉 山	
11		28	◎研究計画中間発表会 ・ 発表 7 分、PPT 使用 ・ 研究テーマ ・ 目的、方向性（問題意識） ・ 目次、各内容（主に日朝 関係：通信使） ・ 文献、フィールドワーク ○18:00- 懇親会（1 F カフ ェ）	発表についてのコメント ●寺島学長コメント： 1. 引き続き事実関係を認識すること：例）朝鮮通 信使が、江戸までやってきたもの、そうでないもの 2. 近代にもたらした意味は何か →今後の課題とし て、「近代」とは何かの確認が必要 3. フィールドワークを重ねる 例）品川の東海寺 ●荻野先生：中国との関係をどう位置づけるか、朝鮮 通信使を中心にしたほうがよいのでは ●出原先生：1. この一年での成果は何か？ 2. 研究目的について：相互信頼の			宮 崎

				きっかけとなる事実があるか ●奥山先生： 先行研究から見た本研究の位置づけ		
12	7 月	5	・夏合宿の中間発表内容 ・都内のFW先	反省会 夏合宿発表に 向けた討議	都内FW訪問先 （東海寺、浅草 東本願寺）の提 案	
13		12	FW（対馬・広島）日程確 認 最終論文目次案	・最終論文目次 案についての 提案⇒各分 担・執筆（夏休 み宿題）	対馬FW参加者 確認、訪問先詳 細の詰め	
14		19	・夏合宿発表資料について ・日中関係の発表	・PPTスライ ドのコメント、 分担 ・日中関係の発 表（中村、水口）	・フィールドワ ーク：日光は多 摩班と合同調査	8/26 打ち上げ案 内：広東料理「紅 梅」18:00-
15		26	・夏合宿発表の予行演習 ・懇親会、壮行会	・発表PPT資 料（発表者、資 料確認）の最終 調整 ・最終論文の目 次案、了承⇒夏 休み宿題（担当 分の執筆）	・「9/5-7 対馬、 広島FW」の訪 問先アポ、ガイ ド手配（越田） ・「10/5 日光東照 宮FW」日程調 整（山口）	・大森映子教授 （日本近代史）、 対馬・広島FW合 流決定 ・前期打ち上げ （壮行会：王、杉 山）、久恒教授参 加
			夏休み		寺島学長より、 朝鮮通信使に関 するイベント	夏休み 学部：8/1-9/17 大学院：8/17-9/20

					(横浜市) 開催 の連絡		
16	8 月	18 - 19	8/18 (月) -19 (火) <u>夏合宿 (箱根) 中間発表</u> 合宿先 : 箱根水明荘 (箱根町湯本 702)	発表者 (役割分担) : 1 研究概要 (山口)、2 目次、3 徳川幕府の外交戦略と朝鮮通信使 (宮崎)、3-1 通信使とは (杉山)、3-2 通信使ゆかりの地、3-3 民間交流としての通信使 (三好)、3-4 通信使シンポジウム・清見寺 (和泉)、3-5 八王子千人同心、4 江戸期の日中関係 (水口)、4-1 国交なき対中交易、4-2 中国からの視点、4-3 食文化から見た日中文化交流、5 現時点で分かったこと (中村)、参考文献・研究計画・FWについて (王) 学長コメント : ①前期は順調。後期は <u>事実認識</u> をしっかりと踏み固めてほしい。②確認として、朝鮮通信使の初期3回は友好・貿易目的でなく朝鮮国民の拉致者奪還。③京都・方広寺の耳塚の悲劇。④ (秀吉の朝鮮出兵時の国交断絶からの) <u>和解プロセス</u> をどのように描くか。⑤銭国紅『日本と中国における「西洋」の発見』で新井白石、雨森芳洲、朝鮮通信使との関わり・位置関係を押さえると深みが増す。⑥ <u>江戸期儒教</u> の持つ意味。 <u>東アジア (日中韓)</u> の近代化に与えた影響。⑦ <u>近代 (明治)</u> に入ってからの日朝関係の悪化 (明治6年の征韓論から)。これまで友好関係を築いてき	8/18 12:30 会場集合 13:00 集合 (B1F) 合宿日程説明 13:05 中間発表 (15分) + 質疑応答 (20分) 15:40-16:40 教員発表 16:40~全体講評 (久恒先生) 夜 懇親会 8/19 9:00 寺島学長講話 10:40 グループ学習 12:00 過ぎ解散	和泉	

				た江戸幕府との断絶後の明治政府との行き違い、高圧的姿勢。その後の <u>現代に繋がる外交関係のプロセス</u> 。⑧こうした研究に若者が立ち向かうことで、時代認識、歴史認識が変わっていくことに、本ゼミの目的がある。地固めして事実認識を押さえてもらいたい。			
	9	9			<u>9/5(金)-7(日)</u>	・対馬・広島FWには、久恒教授、大森映子教授の参加	
	月	13	夏休み		<u>対馬・広島FW</u>		
		20			<u>(担当：越田)</u>		
17		27	・最終論文の各発表(宿題) (各発表日程一覧) ・日光合同FW日程 ・その他(対馬等FW報告)	・各執筆原稿の発表(状況報告)	・対馬・広島FWの感想発表(三好) ・日光訪問先アポイントメント状況(中村、山口)	議事録担当確認 歓迎会(塚原さん)	三代
18	10	4	・FW発表(対馬、広島) 学長講義後、日光合同FW出発(多摩班)	・FW発表(発表:和泉、宮崎、資料作成:三好)	<u>10/4-5:日光合同FW(担当:山口、中村)</u>	・多摩班との合同合宿 参加者8名(金、バートル、中村、山口、三代、水口、和泉、越田)	水口
19		11	・論文発表、査読	発表:(担当表参照)	—		山口
20		18	・論文発表、査読				和泉
21		25	・論文発表、査読		—	和泉休み(論文ゼミ)	三好

22	11 月	1	<u>論文案の完成</u>	60~70 枚			中 村
23		8	文章推敲 スライド(PPT)作成				宮 崎
		15	学園祭 (授業なし)			11/15-16 大学学 園祭 (25 周年)	
24		22	PPT 完成				越 田
25		29	予行演習				三 代
26	12 月	6	<u>最終発表 (PPT プレゼン)</u>	発表方法、持ち 時間等?			山 口
27		13	<u>発表 (地域プロジェクト発 表祭)</u>	場所:多摩キャ ンパス			三 好
28		20	<u>論文提出日 (完成版)</u>	論文 (紙媒体)		12/21 年内最終 授業 12/22-1/4 冬休 み	水 口
29	1 月	10	最終調整、論文完成	一部修正(教員 指摘)			和 泉
30		17	<u>最終論文提出 (完成版)</u>	提出者、提出方 法			中 村
31		24	ゼミ最終日、懇親会				宮 崎
		31				1/31 秋学期授業 終了 2/1-3/31 春休み	

【対馬・広島フィールドワーク日程】

	日付	時間	場所/交通手段	訪問先	備考	担当
	9/3(水) ～4(木)	12:35 14:05 00:10+ 1 04:40+ 1	【宮崎、三好】 羽田発/ ANA257 福岡着 博多発/フェリ 一つくし 218 厳原着	●先発組（宮崎、三好）：通信使視察、 通信使寺院へ宿坊等 ●久恒教授： 9/4 空路で対馬入り（対 馬北部の港等視察） ●大森映子先生：9/4 東京→福岡→対馬 （対馬歴史民俗資料館にて文書調査 4 日～5日）	※通信使の 客館（対馬府 中）： 大平 寺、慶雲寺 （正使）、西 山寺（副使）、 善応寺（従事 官）→ 国分 寺	①メモ ②写真 ③FB (Face book)
1	9/5(金)	08:05	羽田発/SF43 SF: スターフ ライヤー	●集合メンバー：4名（金、バートル、 小林、越田） ・集合場所： 羽田空港国内線 第1ター ミナル 2F 南ウイング SFJ（スターフライヤー）カウンター前 ・その他： 航空券等をバートル先生か ら配付		
		9:55	福岡空港着			
		10:30 11:10	福岡空港発 /ANA4933 対馬空港着			
		11:10 11:30 頃	対馬空港発(借 上げバス) 対馬市内着	対馬空港から車で 20 分（観光物産協会 まで）	ジャンボタ クシー（定員 9名）：空港出 口集合	
		12:15-1 3:15	昼食	ランチ会場予約（地元名産の食文化） 担当：宮崎、三好		
		午後	【対馬市内】	●メンバー：8名（金、久恒、大森、バートル、小林、 宮崎、三好、越田）		
		13:30-1 4:15 (45分)	場所：対馬歴史 民俗資料館 ※久恒教授、大 森教授、宮崎、 三好は資料館 で合流（または	①長崎県立対馬歴史民族資料館： 北川館長、藤川（学芸員） 長崎県対馬市厳原町今屋敷 668-1	※6/13 アポイン トメント完了、 7/26 訪問時間の 調整済	メモ 宮崎 写真 越田 FB 三好

			ランチ会場?)	島内の文化財、公庫歴史資料、民俗資料、宗家文庫などの貴重品を収録展示、入館料無料、休館月曜、開館時間9:00~17:00		
	14:30-15:30 (60分)	場所:対馬市役所内 ※15:25 厳原発 /フェリー 宮崎、三好組は博多へ		②ユネスコ記憶遺産登録ヒア: 訪問先: 朝鮮通信使縁地連絡協議会(事務局・対馬市) 場所: 対馬市役所 担当: 阿比留 正臣(アビル マサオミ) 係長、安田	※打合せ内容(事前調整)⇒質問項目など(先方からの依頼)	メモ 越田 写真 三好 FB 宮崎
	15:30-17:30 (120分) ※15:30~17:30の2時間ガイドから説明	集合場所:対馬市役所1F(対馬観光物産協会)		【朝鮮通信使モデルコース】 ・対馬観光物産協会「対馬観光ガイドの会やんこも」 (厳原町国分1441、対馬市役所1F) 説明ガイド:小島武弘 ※コース:対馬市役所(対馬観光物産協会):徒歩1分→(1)対馬歴史民俗資料館、徒歩5分→(2)李王家宗伯爵家御結婚奉祝記念碑/旧金石城庭園、徒歩5分→(3)宗家菩提寺・万松院、徒歩10分 ③金石城跡~宗家居城~ 1669年対馬藩三代藩主・宗義真が金石屋形を拡張・城郭整備を行い金石城と呼ばれるようになる。国の史跡指定。	※7/30ガイド手配済 8/19時間変更	メモ 越田 写真 FB
				④李王家宗伯爵家ご結婚奉祝記念碑 朝鮮国王高宗の娘・徳恵姫が、旧対馬藩主・宗家当主の宗武志伯爵へ嫁いたことを記念し建てられた記念碑。戦後、李家からの離縁要請や徳恵姫の精神状態悪化等により離婚し記念碑撤去。平成13年清水丘(旧金石城庭園		

				近く)に復元。	
				⑤旧金石城庭園 (きゅうかねいしじょうていえん) 宗家の居城であった金石城の庭園。 国の名勝に指定。 長崎県対馬市厳原町今屋敷 (旧金石城敷地内) 入園料一般 300 円、休館：火・木、 開館時間 9:00～17:00	
			※現地にて時間的余裕があれば、大森先生お勧めのポイントを回る	⑥万松院 ～宗家菩提寺～ 対馬藩 2 代藩主・宗 義成が、父・義智の冥福を祈って 1615 年建立。 朝鮮国王から送られた三具足等 長崎県対馬市厳原町西里 192 拝観料大人 300 円。年中無休、開館時間 8:00～18:00	
		17:30/18:00	対馬市内→空港 (借り上げ車)	●メンバー：6名 (金、久恒、大森、バートル、小林、越田)	
		19:05	対馬空港発 /ANA4940		6名
		19:35 20:00/20:30	福岡空港着 空港 /ホテル	① タクシー案 (福岡空港より車 20 分) 又は、②電車案 (福岡空港駅より地下鉄空港線「中洲川端駅」まで 10 分+徒歩 1 分)	
		20:30 頃	ホテル着 夕食会	●ホテルリソル博多 福岡市博多区中洲 4-4-1 0 ※大森先生： 9/5 夕刻福岡入り、9/6 の広島まで合流 ※宮崎、三好組は博多泊 (別ホテル)	
2	9/6(土)	8:00 8:10/8:20	ホテル発 中洲川端駅発 /JR 博多駅着	●集合： 08:00 まで ホテルロビー 集合 (チェックアウト後) <u>メンバー：6名 (金、久恒、大森、バートル、小林、越田)</u> 地下鉄空港線「中洲川端駅」→「博	

				多駅」：約5分		
		8:43 9:52	JR 博多駅発/ 新幹線さくら 542 JR 広島着	※新幹線ホームから在来線ホーム へ移動		
		10:06 11:00	JR 広島駅発（呉 線）呉経由 JR 広島着	※運行間隔が長いので注意	9/6 朝から合流 （和泉） →時間場所は調 整中	
		11:24 11:47	広駅発（バス） 瀬戸内参道行 三ノ瀬着	※運行間隔が長いので注意		
			徒歩3分			
		午後	【広島県呉市 下蒲刈町】 <u>昼食</u>	●メンバー：9名（金、久恒、大森、 バートル、小林、和泉、宮崎、三好、 越田） 全員集合 ①松濤園（しょうとうえん） 広島県呉市下蒲刈（しもかまがり） 町下島 2277-3 古くから瀬戸内海の海上交通の要 衝として栄えてきた町で、豊かな自 然と日本古来の風習を生かした全 島庭園化事業（ガーデンアイランド 構想）を推進。その一環として整備 された「松濤園」は、三之瀬瀬戸の 急潮を借景とした庭園で下蒲刈島 の歴史と文化を紹介。 ②御馳走番館＝朝鮮通信使資料 館、松濤園の中にある 呉市下蒲刈町下島 2277-3 火曜日休館（HP では年中無休⇒間 違い）、営業時間 9:00-16:30、大人 800円～	<u>7/26 松濤園ハザ マ様に連絡済み</u> <u>（学芸員の案内 依頼済）</u> <u>当日 12:00/13:00</u> <u>頃到着予定の連 絡済み</u>	メモ 和泉 写真 三好 FB 宮崎

				安芸蒲刈御馳走一番、御馳走一番館 に朝鮮通信使に関する資料・復元模 型展示 下蒲刈の三之瀬：古くから瀬戸内 海航路の重要な港。江戸時代は広島 藩唯一の海駅		
		15:05 15:28 16:13 17:35 17:38 18:09	三ノ瀬発(バス) 広島 JR 広島発(呉線) JR 三原駅着 JR 三原駅発(山 陽本線) JR 福山駅	※大森教授の合流は広島又は三原 駅まで → その後、広島空港から 帰京		
		17:25 17:40	福山駅着 ホテル着	福山駅よりホテルまで徒歩1分(福 山城の横)		
		18:30	夕食、懇親会	●ホテル： バッセルイン福山駅北 口(旧キャッスルイン福山) 福山市丸之内1丁目2-1 福山駅から徒歩1分 ※福山名 物：福山鯛うずみ 福山 泊		
3	9/7(日)	8:10 8:40	ホテル発 福山駅発(鞆鉄 バス)5番乗場 (鞆港行き)	●集合： 08:00 ホテルロビー集合 <u>メンバー：7名(金、久恒、バート ル、小林、和泉、三好、越田)</u>	宮崎は早朝、大阪 へ	
		9:10	鞆の浦着 【広島県福山 市鞆町】 <u>9:30-11:30 ガ イドから説明</u>	鞆(とも)の浦周辺史跡： <u>①福禅寺</u> 鞆は瀬戸内海航路の中間点。潮の流 れの分岐点「潮待ちの港」。 福禅寺：通信使三使の宿舎として利 用。通信使の李邦彦は道中で一番の	●鞆の浦観光情 報センター(バス 停前) <u>ガイド依頼 9:30-</u>	メモ 越田 写真 和泉

				風景「日東第一形勝」と評した。 ②福山市鞆の浦歴史民俗資料館: 通堂(ツウドウ)館長 鞆町後地 536-1 鞆の浦を中心とした瀬戸内の歴史・文化・民族などの資料を展示 上記2か所 月曜日休館、開館時間: 9:00-17:00		FB 三好
			昼食		—	
		13:40	鞆の浦発(バス)			
		14:10	JR 福山駅着			
		14:41	JR 福山駅発/			
		15:44	さくら 554 JR 新大阪着			
		15:50	JR 新大阪発/	新大阪→東京		
		18:23	のぞみ 238 JR 東京駅着			
	9/7(日)			【小豆島グループ】 (金教授、久恒教授、バートル准教授、小林准教授)		
		15:12	岡山発			
		16:04	高松着			
		16:30	高松発	小豆島の多摩大セミナーハウス視察	小豆島泊	
		17:05	土庄着			
	9/8(月)	11:20/	土庄発/ 高松着	フェリーにて岡山駅へ → 東京へ		
		11:50	高松発/ 岡山着			
		12:10/	岡山発/ 東京着			
		13:02				
		13:14/				
		16:33				

【日光 インターゼミ アジア班&多摩学班 合同フィールドワーク 日程】

起案:中村、新部 2014/10/03

- 日程 10月4日(土)~5日(日)
- 参加者 アジア班 7名 (山口、三代、水口、中村、和泉、金先生、バートル先生)
多摩学班 6名 (奥山先生、新部、小山、星 &5日のみ: 荻野先生、古西)
- 役割 幹事: 山口(資料調査、訪問先案、報告書作成) FB ブログ: 三代, 会計: 水口,
写真: 和泉, その他: 中村
- 宿舎 日光わらく荘(日立保養所)日光市中宮祠 2484

日付	時間	訪問先	備考
10/4 (土)	17:00 頃	九段下キャンパス発	
	20:00 頃	宿舎着:チェックイン、多摩学班と懇親会	夕食:車中(弁当)
10/5 (日)	06:10~	竜頭の滝 〈希望者のみ玄関集合〉 注:気温 10℃	車移動 10分
	07:20~	朝食	朝食:宿舎
	08:00	宿舎出発	
	08:20~	華厳の滝:滝上 観瀑台のみ(無料) 滞在 20分 いろは坂、①コンビニで軽食購入後、②駐車、日帰り組と合流	
	09:00~		
	09:45-	③日光東照宮 視察: 土屋様のお話	拝観料:1300円
	12:00~	⑥八王子千人同心記念碑	集合写真
	12:15~	④輪王寺三仏堂視察 (各自軽食)	拝観料:400円
	13:00~	⑤輪王寺宝物殿視察:佐々木様のお話&〈朝鮮通信使品物〉	拝観料:300円
	13:50~	⑦大猷院視察	拝観料:550円
	14:40~	⑧二荒山神社 神苑視察 〈進行状況により通過〉	神苑:200円
	15:15~	②駐車場 ⇒ ⑨神橋(車中見学)	
15:40~	杉並木公園:朝鮮通信使 今市客館跡碑	車移動	
19:00:頃	都内着後解散		

【記録写真】

- インターゼミ合宿 -



夏季インターゼミ合宿にて

左から 金、宮崎、水口、和泉、山口、王、バートル、三好、久恒（敬称略）

- 対馬・広島フィールドワーク -

対馬



朝鮮通信使対馬上陸時の船着場



朝鮮語学校の跡地



西山寺（「以酌庵」）



対馬藩の対朝鮮外交機関の「以酌庵」



対馬にある宗氏の菩提寺である万松院の三具足

広島



呉市下蒲刈町字三之瀬 朝鮮信使宿館跡





広島県呉市下蒲刈松濤園



鞆の浦の福禅寺 対潮楼にて

左から ガイドの方、三好、小林、後ろ左から 越田、金、久恒、パートル、和泉（敬称略）



対潮楼からの鞆の浦景色





左から越田、和泉、久恒、ガイドの方、バートル、宮崎、
後ろ左から大森、小林、金、三好（敬称略）

- 日光フィールドワーク -



日光東照宮八王子千人同心石碑前にて
左から山口、星、和泉、中村、金、古西、奥山、小山、水口、バートル、新部、三代（敬称略）



日光東照宮



朝鮮から送られた鐘



お墓の前に置かれているものが『三具足』



朝鮮通信使の石碑前にて

左から星、古西、中村、山口、三代、小山、新部、水口、和泉、金、バートル（敬称略）